女子文壇

第壹巻第拾壹號



女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添をこふ

☞注意＝此目次を熟讀順次内容御閲覧を乞ふ

第拾壹號 女子文壇 目次

《第一卷》

○都會の女學生と地方の女學生「社説」（初頁）

▲名家文壇（三―一五）

◎作文の手引……大和田建樹
（一）短文を習へ（二）日記を作れ

◎選評餘談（四）…文學士…鹽井雨江
猥りがはしき思想の文を作るべからず

○沙翁喜劇梗概（完結）
眞夏の夜の夢物語（下）……水野環一

○頼山陽十二媛絶句評釋（四）……福井學園
千手＝靜＝尼將軍

▲英文（第九回 卷末揭出）…（一―四）…津田梅子閲 河井道子述

美術口繪
三宅克己 水彩密畫（小春日和）（石版九色）
鏑木清方 繪はがき（白菊）（石版七色）

寫眞版
米國女學生新遊戲（大判二頁）
佛國流行社會
伯爵グランドメーゾン家夫人と令息○長野縣中野婦人會餘興○米國リリヤン、ブローエルド孃家庭○團子坂の菊
音樂家
と人形、一鉢千輪菊○根津權現○瀧の川○田中紫水君紅葉の書○短册、文學博士黒川眞頼君、故勝伯令孃妙子、大河内子爵令妹桂子眞筆其他人物風景數個入

▲家庭（一六―二三）

○育兒法（完結）…紐育 エメリン、クーリツヂ
（二）空腹を訴ふる聲（三）吸ひこむ癖

○家庭小話……小式部
（五）緩い汽車（六）ずるい少女（七）噓吐き坊主
（八）横着な乞食

▲論文（二四―二九）

○風：小島流子○幼兒：澤田みさを○白萩と紅萩と：重田春子

▲新體詩（三〇―四〇）

○メルヒンの響（特別賞）：天紘女史○夕の森：新井琴子○大和川の暮：野菜女史○紅葉の錦：小島登美子

▲叙事文（四一―五二）

○夕立：霧生かめ子○安樂温泉行：香子○鏡が浦：林霞江

▲短歌（五三―六一）

○木村しづゐ○ゆき子○辻なほ子

▲抒情文（六二―七四）

○不運の少女を弔ふ（特別賞）：久富とく子、失望（同）楓子○秋の夜：たか子、名なし草：松本もと子、月の夜 漁女

▲俳句（七五―七六）

○（特別賞）中内蝶子、梅浦星香女史、堀河弘子○佐久間しげ子、森みち子、池澤湖春女史

▲消息文（七七―八五）

○十五夜に友を招ぐ文（特別賞）：服部貞子○都なる弟へ：澤田つま、婦美子さんに或る時：山里彩子、父を亡ひし友の許に：小枝子

▲圖畫（七七―一〇三）

○夏の銀座：川本哲子○里の道：關美根子○蟬の聲：宮下さつき

▲短篇小説（八六―一〇三）

○貞操（當入）：太田あきつ子○新職業：いほり○燈明臺：小島すみれ

▲はがき文（一〇四―一一一）

○母様のお小言（特別賞）：寺田光子、小包（同）：顯明
○月末：今紫久子、雨つゞき：石井薔薇子、螢：清月（一一二―一一六）

▲誌友倶樂部 ▲編輯たより

☞前號 も又々發行後旬日を出ずして初版增刷二版とも賣盡したれば第拾壹號を以て代送す乞ふ諒せられよ

小春日和



小島工藝石印

三宅克己先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



大日本女學會

●本會は十年來女學の通信教授に任じ本會の教を受けし者既に參萬貳千人に及べり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢東修四拾錢
○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田仲親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌をんな

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢東修貳拾錢
○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

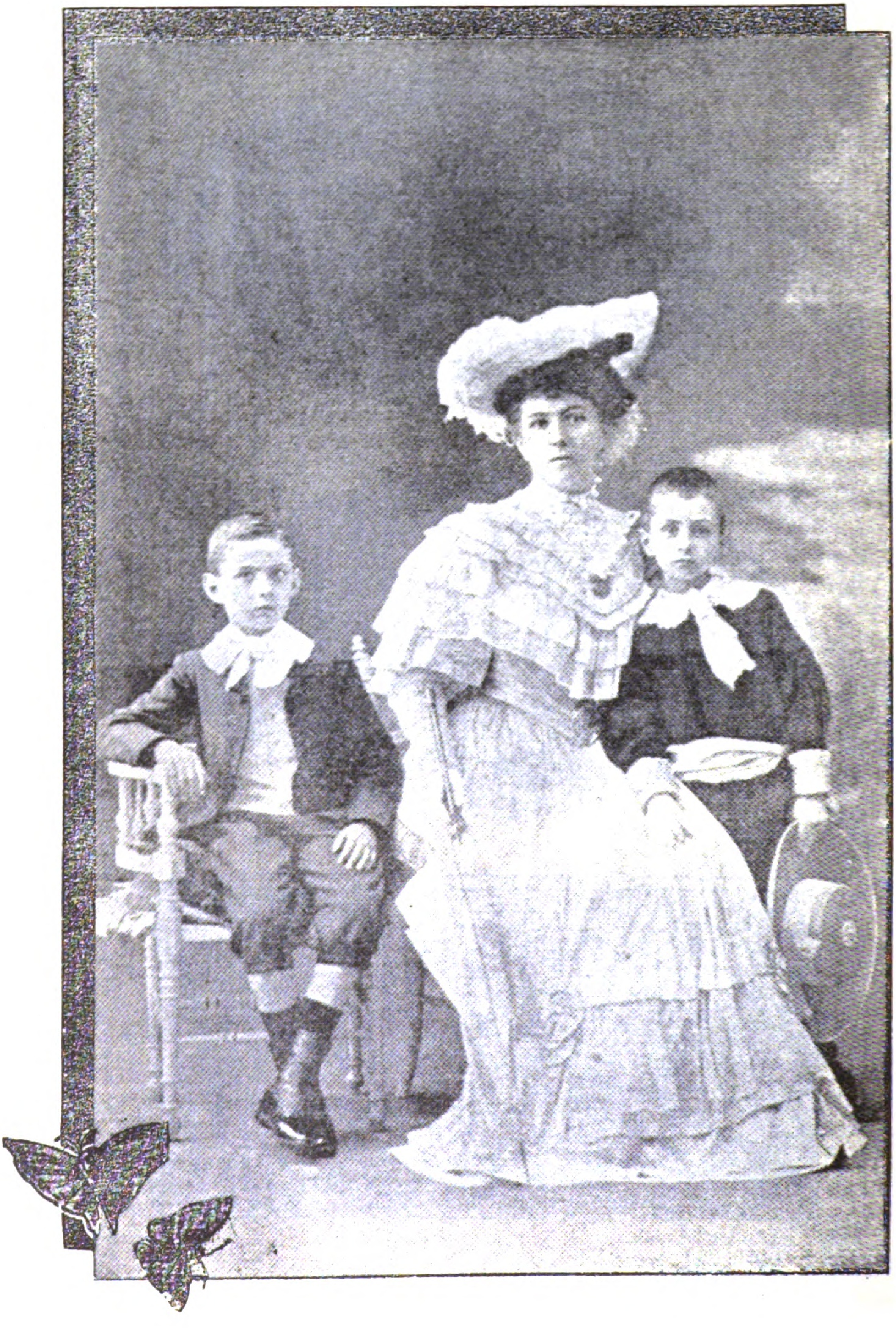
初卷發行　簡易科十一月五日　高等科同月廿五日

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會　電話番町一三三〇

（中付の二）

（付の四）

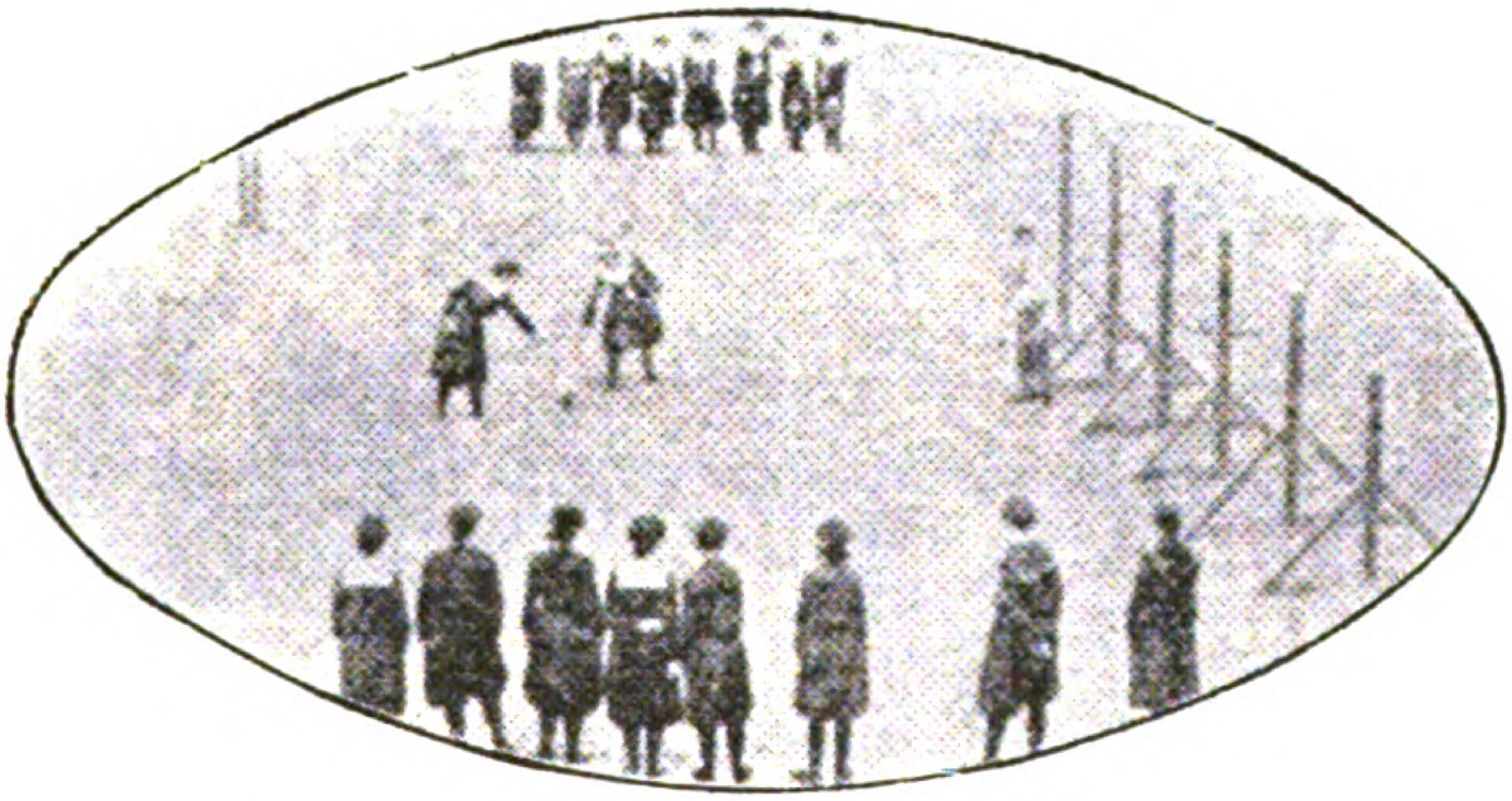
佛國流行社會



米國女學生新遊戯

(其一)







米國女學生新遊戲

（其　二）

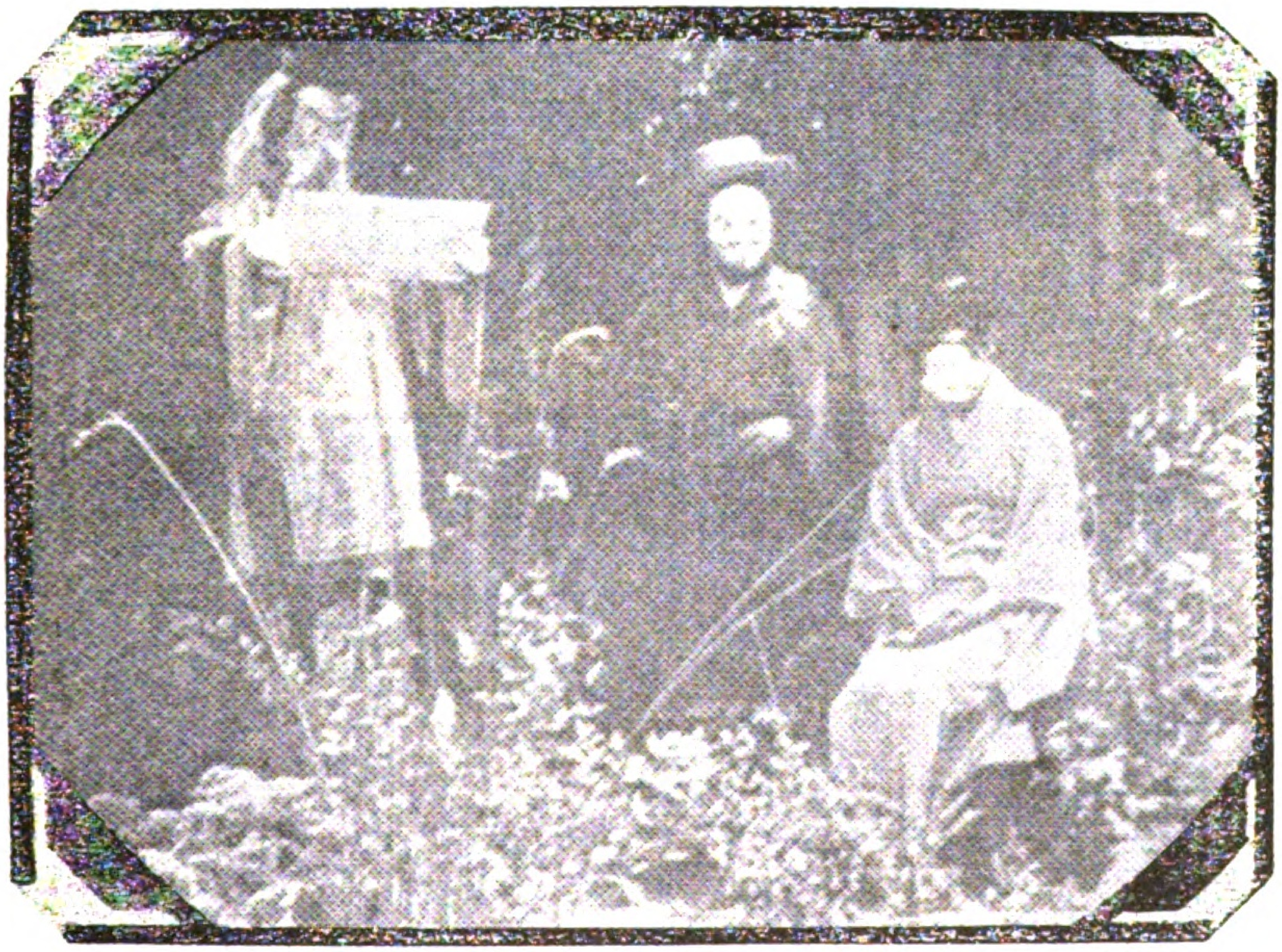






長野縣中野婦人會餘興





(古田ちよ子寄贈)

(編輯だより欄參看)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

菊池幽芳著

夏子（愛と罪）

前編新刊　鏑木清方畫

清新なる家庭の好讀物として玆に『夏子』を薦む。
『夏子』は人生の意義を發揮せる光明小説なり。
『夏子』の聲は縹緲たる彩雲を洩るる女神の聲なり。

▲菊判洋裝彝堂特得釘裝
▲實價七拾錢　郵税八錢



菊池幽芳著

己が罪

前編實價四拾錢
中編實價四拾五錢
後編實價四拾錢
郵税各六錢

（後付の一）

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

新奇發明 培酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍增し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり、（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味醂速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案內：：無代進呈す酒造家右今回披露の爲拾萬部限り：：無代進呈及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる大有益の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して偽傳者に欺かるゝと勿れ：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授產館

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ケ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血一を掃すると確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓七拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯る深く注意ありて一專賣元日新館藥房一の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療實驗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分七拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事（電話下谷五四六番）

貳藥以上

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇

第壹巻 第拾壹號

十一月一日發行

都會の女學生と地方の女學生

都會で勉強せられる諸嬢と、地方で勉強せられる諸嬢との間には、自ら多少の相違した點があると思ひます。素より學校で習ふ學問や技藝の事には、大した相違もありますまいが、學問以外、周圍の感化には甚しく異つた處があります。先づ第一、都會の諸嬢は新しい智識、新しい趣味に養はれて居るだけ怜悧で、敏慧で、快活で、自由で、自ら生活の意義が廣い。之に反して田舎に於ける諸嬢の生活狀態は甚だ狹く、單調で、枯淡て、不自由で何事も後れ勝です。それなら競うて田舎の諸嬢は早く東京へ出るやうにすれば宜かと云ふに、必ずしも左樣でない。都會へ出るには用意も入る、時機もある、且又都會の女學生たるには頗る危險が多い、刺戟され易く、荒み易く、ずるくなり、輕薄になる。それですから豫め是等の誘惑を避け得られる丈の用意あるやうになつてからでないと、妄りに上京してはなりませぬ。又地方の女學生と都會の女學生が、氣脈を通じて互に音信し、一は自然の儘の純樸なる氣風を都會に傳へ、一は日に新たなる智識の進歩を傳へ、互ひに其欠けたる點を補ふやうにすれば、至極結構な事と思ひます、近頃文通上の交際をせらるゝ諸嬢が、全國に渉つて多いやうですから、茲に一言する譯です。

名家文壇

作文の手引

大和田建樹

一、短文を習へ

文は冗長を忌む。故に無用の文字をごた〳〵と並べ立て丶。謂はゆる下手の長談義に爲らしむべからず。旅行記を作るとて。

十一月一日。東京市下谷區上野驛より。日本鐵道會社の一番滊車に乘りて出で立つ。まづ財布より銀貨を取り出だし。切符賣場に至りて。何處までの三等切符を。何々錢にて買ひ求め。釣錢何々錢を受け取り。改札口にて切符を切りて貰ひ。三等列車に乘り込む。室内には云々。室外には云々。

など丶長たらしく書きたらんには。誰も面白からずとて。途中で打ち捨く人。十人が内の九人なるべし。

故に文は簡潔ならざるべからず。簡とは入用の文字だけ使ひて手短かを云ひ。潔とはあッさりとして。しつこからず又いやみ無きを云ふ。今右の旅行記を訂正せば。

十一月一日。上野の一番滊車に乘りて行く。日よく晴れて客は室に滿ち。梢の色も紅になりて外のながめも面白し。

などにて十分ならん。この簡潔といふ事を常に心掛て居るべきなり。

故に先づ短文より書き習ふをよしとす。文の最も良きものは。なるべく少しの詞に。出來得るだけ多くの意味を持たしむるにあればなり。

いまだ遠くの道を歩き習はざる小兒に。一里二里の道を行かしめなば、達する能はずして途中に倒れん。その如く。いまだ詞の續けもろくに出來ざる初學者に。長き文章を作り習はしめば。よい加減の事ほか出來ずして。眞正の稽古にはなるべからず。短文作り習ひ給

へとは。一つは此理由あればなり。然るに。世には長き文ほど良くして。短きは物足らぬやうに思へる人のあるこそ不思議なれ。

二、日記を作れ

文を簡潔にするには。多くの材料に就きて。これを選擇する事に熟せざるべからず。選擇するとは。例へば。打ち見渡したる景色に。山あり川あり人あり馬あり。および家あり松あり竹あり花ありとせんに。

松靑く花白き村の入口には橋ありて。打ち渡る人馬豆よりも小さく。後に聳ゆる山の頂は雲を衝いて高し。

などゝして。川と竹とを略する事もあるべく。又は。

山高く峙ちて水長く流れ。橋ゆく人馬の影いと稀にして。雲かと思はるゝ花の色しづかなり。

などゝして。松と竹とを略する事もあるべし。この略すべきを略して略すまじきを略せぬが。即ち材料の選擇なり。

材料選擇の練習には。文として日記を書くに若くはなし。

およそ人の日々にする仕事は多し。朝になれば起き。着物を着かへ。顔を洗ひ。食事をし。學校に行き。學校より歸り。猶さま〴〵の動作あるべしといへども。爲したる事を悉く書かんには。際限あるべからず。其動作の内より。書くべき事と書かでもよき事とを。選擇すべきは勿論なり。

日記は其日〳〵の出來事を記し置くものなり。顔を洗ひ食事するは。日々あるべき事にて。其日の出來事にはあらず。もし病にして食事を缺くか。又は常食を用ひられずして粥などを啜る場合には。書く必要あれど。人間各自の日々の常事は。何とて筆にするに及ぶべき。さらば是は書くに及ばぬ事と知るべし。されど。顔洗はんとする時に蜂來りて面部を刺したりとか。食事にかゝる時めづらしき客に訪はれたりとかいふ類は。其出來事に連續して書かれたるなれば。必要なる材料となる。日記を書くに心得べき點なり。

斯くの如くして。日記は材料撰擇の練習に益を與ふる事少なからざるべく。猶その上に。思想材料を空中より求めずして。日々わが經歷中の事實より取り。用語文躰も遠く模範を古人に仰ぐまでもなく。必要上より生み出だす我言語。すなはち我文章となるべければ。得るに易くして馴らすに早く。日々かならず書くべき事なれば。必要にせめられて筆ブセウになる患を防ぐ功また大なるべし。

昔は觀世何がしといふ能樂の名人。近江の湖水を過ぎて。矢走の渡舟に乘りしに。船頭人に語るやう。昨日は風邪にて一日休みたるため。今日は櫓を押すにタイギなりと。何がし之を聞きて。船頭の如き容易げなるわざですら。一日休めばタイギなる此くの如きに。我等が學ぶ能樂の如きは。怠りて如何でか其奧に達せんとて。是より日夜孜々として勉强せしといふ美談は。口碑に殘れり。作文また其如し。絕えず書けばこそ上手にはなれ。折々一つ二つ作るといふ具合にては。いちじるしき進步おぼつかなからん。

選評餘談（四）

文學士　鹽井雨江　談話
門生　記筆

筆づかひ、詞づかひにつきての注意すべき點をおはなしする考へにて、前回の末に、其の一ケ條をあげて置いたが、急に思想の上につきて、特に注意せねばならぬ事のあるを發見したる故に、こゝに暫く支路に入るを諒せられよ。

○猥りがはしき思想の文を作るべからず。

こゝに猥りがはしき思想といふは、人倫道德の垣を越えての猥りがはしき戀愛をいふなり。これまでの投書の中にも、折り〳〵此の種の思想の文のあつて、文のよし惡しを問はず、直ちに沒書の刑に處して置いたが、今回の投書の中には、數篇の多きを見るに至りたれば、特に注意して、これを戒めんとするのである。

其の猥りがはしい思想の一二をあぐれば、抒情文の中に、「戀ひしき君に、人目の關を忍びつゝ、胸の思ひを傳ふるも汝の情けてある」と言うて、筆をよろこびたる文を書いた人がある。また、戀ひしき人が病にかゝりて病院に入りたれど、人目の關を怖れて見舞にも行かれぬといふ煩悶を書いた人がある。或は、父母は我が心を知らずと失戀の恨みを書いた人がある、叙事文の中にも、垣を踏み越えての男女が散歩の狀景を描いたのがあつた。

男女の學生が、親の知らぬ兄妹と人に見せての墮落の境を書いた人もある。こんな種類のものである。猥りがはしい思想てはないか。

此の頃は、投書家の、其の思想に其の筆に、非常に意を凝らし心を碎かれてつとめらるると見えて、一回一回、其の趣向に其の筆に面白く整ひ得たる文章の多くなつて來て、爲めに、女子文壇の紙上は、宛から一雨々々に美しき草の萌え出づる春野のけしきの心地せらるるは、選者の眼には、誠にうれしくおぼゆる事てある。うれしくて、なほ必ずと待たるる事は、投書家諸孃の、其の文章の趣向に筆に、益々錦心繡腸を工夫せられて、花紅柳綠、女子文壇紙上に、春のもなかのけしきを見たいのてある。文章の趣向には、何處までも工夫して貰ひたい。新しく面白きものを、何處までも工夫して貰ひたい。されど、斯くの如き猥りがはしき趣向は、何處までもお斷りにしたいのてある。

美感、精神上の快樂を讀者に與へむとする文章を作らんとせば、其の思想、やがて、其の書く事がらは、つとめて高尙優美なるものてなければならぬ。其の詞もまた必ず高尙優美なるを心がけてはならぬ。たとへ人間に往々見る事、社會に往々見る事がらにても、心あらむ人の讀みて嫌惡の感を起す如きものならんには、文の思想とする事は避けねばならぬ、やめねばならぬ。文章家に高尙優美なる思想を要するは、單に讀者をして、こゝに樂しましめて、こゝに趣かしむる爲めのみにはあらず、作者自身も常に心をかゝる境に置きて、こゝに樂しみて、この人となるを得ん爲めなり。

習ひに慣るる人の心、常に猥りがはしき事を見たり聞きたり思ひたり言ひたりして居りては、習ひのはての必ず恐るゝものなしとは言ふべからず。されど、作者自身の爲め、讀者の爲めに、作家はこゝの心がけを要するなり。されど既にしかと我が人格の出來た作家は、さてもあれ、まだ我が人格を作るの途にある年少の作家は、是非に猥りなる事は見もせじ聞きもせじ思ひもせじ言ひもせずといふ心がけを有つて貰ひたい。

斯くの如き猥りがはしき文を見るに至りたるも、一は諸嬢が其の作文の意匠に、何にか新しく面白きものをと苦心せらるるの結果であらうと思ふ。趣向に苦心せらるるは誠に美事なり。何處までも選者はこれを願ふのである。されど、かゝる猥りがはしき方面に、其の趣向を求めぬやうにせられたい。何處までも選者はまたこれを願ふのである。假りに設けたる趣向にもせよ、抒情文、全く其の人となりて其の熱情を發表する抒情文に、かゝる猥りがはしき情をきゝては、何んとなう其の人がらも疑はしくおぼゆるやうにもなる。敍事文といへども、かゝる猥りがはしい狀景を書くは、殊に年少き諸嬢の爲すべき事ではないと思ふ。近時、世には頻りと戀愛を說き、いかがはしき戀愛などを說きもうつしもする人あれど、諸嬢はすべてこれ等に耳や目や心を汚さるる事なからむ事を、選者は切に希望するに候。

今一つ序に注意して置きたい事がある。それは、妄りに他人の文章の趣向や筆をまねしないやうにせられたい事である。投書家の中には、前回の天地人の位に擇ばれたる文章の趣向や筆形を、其のまゝまねしたばかりの文を作つて投ぜらるる人が、往々ある。よく見ても、見識の低いと評せねばならぬ。惡く見れば、徒らに天地人の賞を追うてと、いやしまれもする。自家の文には、必ず自家の特に工夫したところがなければ、いけぬ。他人の工夫したあとを、其のまゝまね、他人の文の形を、其のまゝまねたるにては、自分の文章ではないやうなものである。

これから、前回の後を追うて、詞づかひ筆づかひに

つきて、注意すべき條々をのべやう。

（二）比喩法、擬人法の亂用

近時の若き人の文には、比喩法、擬人法の亂用が、隨分多いやうである。亂用とは、不穩當なる比喩擬人をなす事と、また妄りに多く用ふるをいふなり。

比喩法といふは、例へば、

○容貌は花の如く、しかも心は玉に似たり。

○其の主と住家と無常を爭ふさま、言はば、朝顔の露に異らず。

○形こそ深山がくれの朽木なれ、心は花に成さば成りなむ。

といふやうに、一事物を發表するに當たりて、それに似よりたる他の事物を取り來りて、たとへていふをいふ。かゝる形のを修辭學に明喩といふ。圏點を附したるところが、其の明喩法である。また、

○花の色はうつりにけりな、いたづらに我が身よにふるながめせし間に。

といふ花の色の如く、一事を發表するに、直ちにそれに似よりたる他の事物を用ふるもある。美しき紅顔といふ事をあらはすに花の色と言ひたるは、同じく美しき點の似て居るより、それを直ちに用ひたのである。よく諸孃が用ひたまふ　赤き心　胸の村雲　袖の露（涙の意）文の山路　花が綻ぶ　思ひも消ゆ　などいふも。皆此の類である。これを修辭學に暗喩法といふのである。また、

○牛の子に踏まるな、庭の蝸牛、角あればとて身をな頼みそ。

といふやうに、似たる他の事がらをのべて、其の眞意は其の裏面に寓せしむるものもある。表面は蝸牛を戒めたるなれど、それは比喩にして、眞意は人を戒めたるものにてこれを其の裏面に寓せしめて發表したのである。かゝる類のを修辭學を諷喩法といふ。

擬人法といふは、例へば、

○春老いて花はやつれぬ。

○山河默して月ひとり語たる。

○軒ばの木ずゑは枯風に恨み、床下の虫は寒霜

にむせぶ。

○今はとて田の面の雁もうちわびぬ、おぼろ月
　夜の明けぼのゝ空。

といふやうに、無生物及び吾人以外の生物に、吾人の如き精神上肉體上の性質を附與して敍する法である。

これ等は單に吾人の性の一部を附與したのみであるが、更に進みては、全く吾人と同じき靈性活動あるものゝ如く見立てゝ敍するのもある。

○昔思ふ草の庵の夜の雨に、涙な添へそ、山時
　鳥。

○名にし負はば、いざ言問はむ、都鳥、我が思
　ふ人のありやなしやと。

斯くの如きは、全く其の時鳥都鳥を、吾人と同じ生命あるものと見たてたものである。

さて、此の比喩法の妙味のあるところは、異りたる事物の間の思ひがけない似よりの點にあるのである。されば、同種類のものでは、いけぬ。必ず異りたる種類の物でなければならぬ。例へば、

○手習ひは坂に車を押すが如し

といふは、いかにも面白みがあるが、これを「手習ひは讀書の如し」と言はば、何んの妙味もないではないか。手習ひも讀書も同種類の故である。されど、異種類とはいへど、其處には程度がある。尤もらしくきゆてるまでの程度にとゞまらねばならぬ。其の程度を越えて、あまりに突飛なるものとなりては、滑稽の材となるばかりである。

また餘りに貴きものと卑きものと、餘りに高大なるものと低く小さきものとの間でも、面白くは無い。一二の例をあぐれば、

○彼の少女は冬のもなかの日の如く短く黒し。

○棟を負ふの柱は、南畝の農夫よりも多く、梁
　にかする椽は機上の工女よりも多く、釘頭の
　磷々たるは、庾にあるの粟粒よりも多し。

○鋸屑の數々と濱の眞砂と君が代は數へ盡くさ
　じ。

○少女の風に吹かるる金髪は、首うち振りて長

く断ゆる駿馬の鬣に似たり。

○陰徳は耳の唱るが如し。己れ獨り知りて人々これを知らず。隱慝は軒の如し。己れ覺えずして人これを知る。

これ等は大家の文に見たるなれど、皆不穩當にして面白からざるものと思ふ。よく味ひて見られよ。今回の投書の中にも、隨分不穩當なる比喩を多く認めぬ。其の一二を言へば、

○大和魂の光りの玉の樣な日輪

○今し妾は獨り果てしもあらぬ聯想の車を胸に廻らしつ、思ひ出て多きこゝ三木が招の畔に立てるなり。

○夜着の袖口の如き唇

聯想の車といふは暗喩にて、其の他の二つは明喩であるが、あまりに突飛て、笑はずには居られないではないか。

なほ言はねばならぬが、選者、實は八月頃より腦を痛めて居りて、長く語たる事が出來ぬ故、今回はこの中途にて。

眞夏の夜の夢物語（下）

沙翁喜劇梗概

みづの舍一

（四）

却說、われらをして、かのヘルミヤ、デメトリヤスが戀物語を回想せしめよ。かの佳人ヘルミヤは如何に成りにしか。ヘルミヤはもしデメトリヤスとの結婚を拒む事もあらむか、遂には恐ろしき死の宣告を待たざるべからざる悲運に會して、周章て夜暗に乘じてその家を逃げ出しぬ。彼女が森に着きて、其處、こゝ迷歩きしが、直に一刻も早く叔母が許に連れ走らんとして待ちかまへたるリサンダーと出會ひぬ。されど柔弱き處女の身の、走りつめなるが上に、森の中程にて、身いと疲る、リサンダーも早や、疲れに疲れて、足も運べず、『それじやね、何處か柔かな芝生の上でも行つてゆつくりお寢み、わたしも何處ッかへ轉んで一眠りするから、』リサンダーはやがて、轉りて熱眠せしが、折しも其處へ來かゝりしパック小僧、得たり賢し、これぞオベロン王が仰せられしアゼンスの男ならめ、と大

間違して、早くも獨合點して、難なくリサンダーの瞼の中へ戀汁を落し込みぬ。リサンダー眼醒む。その時ヘルミヤは去りて、偶然ヘレナは來りつるあり、リサンダーが初て見しはヘルミヤならて、ヘレナ。リサンダーは既にヘルミヤを忘れて、ヘレナを戀ふ。

却説ヘレナは己れに不實、いと辛く擧動ひにすた々々行くデメトリヤ一人を追ふて、來りしが、悲しい事に、これも、年若き處女の身、足並早きデメトリヤスを見失ひてうろ／＼せしが、あたりに打臥せる若き男、誰？と近づきよく見ればこれぞかのリサンダー。『オヤ、誰れかと思へばリサンダー、しかし死んで居らッしやるのか、それとも假寢か』と『ねエ、貴方、眠て居らッしやるなら、お起遊ばせ』と搖り動かせば、驚かされて眼開いてリサンダー、パックが大失策の戀汁か言はする慢言『如何と貴女はお奇麗て、今の世界中、貴女の樣な麗人は二人とあろうぞ、唐天竺をたづねても』と惚れ言葉に、嘗め言葉、何が何やら源因知らざるヘレナは不思議てもあれば可笑しくも亦腹立しくも『何仰ッしやるの、貴方、そんな事は妾には何の事だか解らないわ、妾、これ迄でも可加減デメトリヤスに馬鹿待遇にされて、居るのに、又貴方がそんなになすッて、眞實に妾は人に馬鹿にされに生まれて來た樣な考だわ』と恨み言たら／＼、逃げ行く、飽く迄、ヘレナに恍惚となれるリサンダーは森の中をば追かけぬ。

ヘルシヤはうたゝねしつゝありしが、目醒むれば、リサンダーはあらて、己れ獨り、茫然たる所に、これもパックに戀藥落し込まれしデメトリヤス、側にリサンダーに逃げて來れるヘレナを一番に見て、これ迄、嫌ひしヘレナが天の御使とも見ゆるばかりいと美しく見え、これもいろ／＼讃言葉を呈して媚ふるに、ヘレナは打つて變つたるデメトリヤスが擧動に、夢かとばかり驚きつ。ヘルミヤも、昨日迄はあの樣に自分に優しかりしリサンダーはかくも自分を振りすてゝ、ヘレナに愛着し、大騷ぎをするとは、げにたのみにならぬは秋の空と男心とあきれはて、はてはヘレナ、とヘルミヤ双方佳人二人の戀ゆゑの恨み言。

『眞實に貴女はお人が惡いのね、貴女がお好なくなりサンダー樣が、かく私になさる理由も無し、それに、デメトリヤスは貴女にこそ焦がれて居れ、今が今迄、妾を酷い目に遇はせて居たのに、デメトリヤス迄があの樣に、何の彼のと自分を賞めるのだもの、妾、必然、一切あなたの策略だと思ふのよ、それ貴女とは

學校の御友達でも彼樣な仲好だッたし、それからも彼樣に親しくしたじやありませんか、それだのにあなた。貴方は、妾などは愚物だから、この世界に愚弄にされに生まれて來た樣な者よ」とヘレナは涙さへ浮かべて實際の恨み言『妾にや、そんなに貴女が短氣な事、仰ッしやるのが全然、何だか解らなくッてよ、妾こそ貴女に馬鹿にされてるわ、可い事よ。』とヘルミヤはかへりて、又大悲憤、ヘレナ、ヘルミヤの大爭論の中、デメトリヤスとリサンダーはヘレナの奪ひ合ひに決闘すべく森の中へと、二女を棄てゝ入り行く。

（五）

さて小妖魔王のオルベン、かゝる所へ出て來りて、彼等二貴女の爭論にこれは不思議？と耳傾けつゝあるパックに『お前、大失策したね、何故、そんな不注意な事を』と詰れば、不信な小面してパック『何？間違ひてすつて？　でも、私は王樣がアゼンスの服裝した男だと仰ッたもんだから』『否、然うじやない、詳しい事は云はなけりや、解らぬが』と王は詳しくそはパックが初めにリサンダーにも戀汁を飲ませしを物語り、『だから、今ヘレナにリサンダーも現を拔かして、デメトリヤスと決闘する所だから、早くお前が行つて、リサンダーが元のヘルミヤを愛する樣に、しなけりやいかん、そして、リサンダーとヘルミヤと二人が戀しい夢だッた事を早く知る樣にな、パック、大急ぎて行け、己れはチタニヤがどんな動物に戀して居るか見て來るだから。』

戀汁流し込まれしチタニヤは未だ熟眠せり、オベルンはその傍に大頓馬男の寢ねたるを見たり。蓋しこの頓馬はこの森の中に道に迷ひて、途方にくれて、うたゝねしつゝあるにてありけり。『此奴、チタニヤの戀人と云ふのだな、とその驢馬の耳、然たる長き耳を輕く叩けば、その頓馬は一寸眼開きて、キヨロ／＼せしが、恰も己れオベルンに何せられしか知らざる者の如く、直に起き上がりて、女王の別莊の寢所へと行く。

チタニヤ、眼開きて、早や戀汁の云はする慢言、『まアお前、好男子だね、お前美貌な樣に賢いの』

『何？夫人、己、道迷つて困つてるんだ。どうぞ、扶けてお呉んなせエ。』

『この森はね、出る事は、とても出來無いのよ。妾はね、奇妙な精なのよ。妾お前さんが好きて仕樣か無いから、モウこれから妾と一所にね、小間使も數人與げるから』仙女王は段々誘惑し初めぬ。

彼女は小間使の四人を呼びぬ。曰はくお豆、お蜘網、お蛾、芥子。

「皆この雅しい方の御用をするんだよ。飛んだり、跳ねたりしてね、そして葡萄や、杏などを上げたり、又蜂蜜を盗んで來て上げるのだよ。ねエ、お前さん、妾とお坐りな、いろんな事して遊びませうよ、一寸驢馬耳さん、お前のこの長い耳へキッスさせて頂戴な、」

「お豆さんは何處に居る？」

「ハイ、此處よ」小さきお豆は返事する。

「お前さん、己の頭、搔くんだ」それからお蜘さんは？」

「ハイ、此處方」

「おゝやさしいお蜘さん、お前さんは己にな、あざみの木の上に、巣をして居る赤い土蜂を殺して、その密嚢を持つて來て、おくんなせエ、その蜂の密嚢は破さない樣に頼ンますよ、それから芥子どん？」

「あいよ、何か御用？」これが芥子どんの返事。

「何、何でも無が、お前さんも、矢張お豆どんと一所に己の頭、ゴシ〳〵搔くんだ」

やがて又仙女王チタニヤは大頓馬と痴語喃々。何如にまア貴郎は可愛いこと、永劫末代貴郎と妾とはこをして一所に暮すのよ、とすがり寄り。

「然しモウ妾眠るんだよ、貴郎はね、妾に抱かれて眠るんですよ。」

大頓馬は女王に花をもて馬の樣なる頭を飾られ、女王の小さき腕にすがりて眠る。散々女王を愚弄せしオベロン王「この樣子は！」と流石にあまりの女王の狂躰と、頓馬の間拔顔を打ながめて腹を抱く、今の間に、と、竊と女王の愛兒を盗み取り、これで己の用事は濟みたればと。段々女王の瞼にそゝぎたる戀汁を取り去る。やう〳〵夢より醒めたるか如く、正氣付きたるチタニヤ女王、己れ今か今迄絶世の美男子と思ふて、抱き寢たる戀人は、大牛程も身躰のある、驢馬の樣なる長耳の、馬の如き顏したる大頓馬、只驚きて、これこそ、夢か幻かとばかり「オヤ、まア、これは〳〵」

（六）

かくてオベロンとチタニヤとは夜來の不和、こゝに目出度く相解けて、二人は今、手携へて、怪しき夢見たりし戀に焦れつゝある若人、處女は如何にせしかをたづねゆきぬ。

しばし劇中の人となりにし、若き男と女とは程近き芝生の上にて眠りつゝありき。

ヘルミヤは先づ目醒めしが、一度見失いしと思ひしリサンダーが直ぐ傍に眠りつゝあるに、これはとばかり夢心地、リサンダーもやがて目醒ひ、これも己れに傍ふて、ヘルミヤが依然たる容姿、美はしく、座せるに夢心地、成る程、夜來の事はさては夢にてありしかな、貴郎、此樣で妾ほんとに困ッたのよ、何己は此樣て、と、互に夢の物語。

次にヘレナとデメトリヤスも目醒めしが、これもひたすら驚く怪しの夢、この夜來の怪しき夢の効能にて四人共大悟徹底、こゝに彼等の議、一決して、ヘルミヤとリサンダーは好いた間なれば、元の如く夫婦約束、デメトリヤスもかくも己れを戀ふるヘレナをつれ無くして、ヘルミヤを娶らんとするは第一、友なるリサンダーにも濟まぬ事なれば、斷然、ヘルミヤに愛着の念を絕ちて、ヘレナを娶る可しと。彼れはこの美はしき決心を以て、ヘルミヤが父にヘルミヤを死に處する殘酷を說き、かつ其の請ふがまゝに、リサンダーに嫁ぐを許すべきむね、說服し吳れんとアゼンスさして趣かんとする折しもあれ、森の彼方に、黑き人影、これぞヘルミヤが父なる頑固阿翁エグコースが逃亡せる娘を追駆け來りけるにぞありける。

流石の阿翁も萬更、人情の一滴無きにしもあらず、よく／＼事情を聞いて見れば成程／＼『それぢや、仕方が無い、娘の云ふ通りにしやう』とてこゝにヘルミヤも大喜悅、ヘレナも亦その愛人たるデメトリヤスに嫁ぐを得て大滿足、二對の新夫婦、鶴は千年、龜は萬年、目出度し／＼。これを打見て、情ふかきオベロン王も甚だいと愉快く感ぜしとなむ。怪しきこと、困りしこと、はた悲しかりし事も、今より思へば、これぞあどけなき眞夏の夜の夢にぞありける。（をはり）

賴山陽十二媛絕句評釋（四）

福井學圃

千手

燈暗琵琶强試彈。楚囚自作二楚歌看一。可レ憐胡蝶眞情種、一觸二春風一戀二牡丹一。

燈暗　平家一が谷の軍に敗るゝや、平重衡生捕られて鎌倉に至り、狩野宗茂に預けらる、ある夜宗茂千手をして酒を侑めしめし時、重衡朗詠集中橘相公の燈暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲なる句を朗詠したり、

此句は鞆絵の詩注を參照せば意義分明ならん。琵琶も其とき重衡が彈ぜしなり。楚囚は四人の事にて、左傳に晋侯軍府を觀しとき、鍾儀を見て之を問ふて曰く、南冠にして縶がるゝ者は誰ぞや、有司對へて曰く、鄭人が獻ずる所の楚囚なりとあるに本づく。楚歌は前に出でたり。胡蝶は千手に比す。牡丹は平家物語に、先年あの人々を花に譬へて候ひしには、此三位の中將殿をば牡丹の花に譬へて候ひし云々とあるに據る、三位の中將は重衡なり。

大意は、千手が末路の重衡に對して其情の濃かなりしをいふ。四人の身となりたる重衡が、燈火ほの暗きもとに強ひて琵琶を彈じたり、其の歌ふ所の曲は悽惋にして自然楚歌と看らるゝなり、かゝるなかにもいとしらしきは、胡蝶なる千手は眞の情の種にて、一たび春風に觸るれば牡丹の花なる重衡を慕ひたりと、こは餘談なれど、平家一門には風流男多く、歌舞管絃の道には拙からず、重衡もまた其の一人にしてかゝる艶福を受けたり。されども重衡戰には敗れ、卑怯の振舞多かりしは惜しむべし。此詩を見るに先だちて平家物語千手の條を熟讀なし置かば、啻に語意の解し易きのみならず、また山陽が措辭の妙を知るに足らんか。

静

雄風東起急煽レ萁。草木一時頭盡垂。獨有二柔荑撓不一レ得。當レ筵未レ肯侑二君巵一。

雄風東起は、頼朝が義經を伐つ軍を起せしをさす、頼朝は關東にあり故に東起といふ。煽萁は豆からを煽るにて、兄弟の中わろきをいふ、昔し魏の曹丕、弟の曹植と相諧はず、ある時植に七歩の間に詩を作れと命ぜしに、植詩を作りて曰く、煮レ豆燃二豆萁一。豆在二釜中一泣。本是同根生。相煎何太急と、丕が弟を遇する無情なるを諷せしなり。

草木頭垂は義經行家等の奔竄せしに譬ふ。柔荑は詩經の衛風碩人の章に衛の莊姜を美して手如二柔荑一とあり、茅の始めて生ぜしものを荑といひ、柔かにして白ければ、以て美人の手に譬へしなり。撓不レ得静の義經と吉野山中に訣れしや、獨り風雪の中を行き、山僧の爲めに獲られて鎌倉に送られ、義經の所在を問ひたゞされしも、固く知らずと答へき。ある時頼朝夫妻鶴岡の祠に詣で、静を召して舞を命ぜしに、静固辭したるも再三強ゐられたれしかば、乃ち起ちて舞ひ、「吉野山みねの白雪ふみわけて入りにし人のあとぞこひし

き」及び「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」の歌を詠じて、義經を慕ふの意をのべ、更に屈する色なかりき。君は頼朝を指す、靜がもと白拍子なりし故に此句を出せしならん、さて工藤祐經、梶原景茂等倶に靜の舍に就きて酒を飲みしとき、景茂醉ひて靜を挑みしに、靜泣き且つ怒りて景茂を辱しめし事あり、されども此句は頼朝にかけて說く句穩當なり。

大意は靜が貞操堅きをいふ。つよき風が關東より吹起りて急に豆がらを煽りしかば、草木は其勢におそれて一時にみな頭を垂れしが、獨り此の美人の柔荑の如き手だけは撓まし得ずして、酒莚に當りても未だ頼朝の爲めに屈を侑むることは承知せぬとなり。雄風、其、草木、柔荑、字づかひ甚だ面白く、且つ頭　盡　垂といひて撓　不得とうけしもまた妙なり。

尼將軍

菱花買レ夢意殊深。變鳳孤鸞忽古今。人彘千年巳酸鼻。自屠二豚犬一更何心。

尼將軍　源　頼朝の薨後、夫人政子髮を削りて尼となり、政事を與り聞きしかば、時の人稱して尼將軍といへり。菱花買レ夢　菱花は鏡なり、頼朝の伊豆にありて北條氏に依りしや、其の次女に通ぜんと欲し、僕安達盛長に托して書を贈らしめしに、盛長思ふ所ありて更に書を作り、之を其長女に致せり。其の前夕に、次女鳩が金函を銜みて至るを夢み、覺めて後ち之を其姉に語りしに、姉心動き、妹に己れが粧鏡を與へて其夢を買ひたりしに、夜あけて頼朝の書を得、遂に慇懃を通じたり、長女は即ち政子にて、時に年二十一なりき。變鳳は頼朝政子をいひ、孤鸞は寡婦となりたる政子を指す。人彘は漢の戚夫人の事なり、初め高祖戚夫人を愛し、其生む所の趙王如意を立て太子となさんと欲せしが、張良等が策によりて其事やみたりしも、呂后は戚夫人を怨むこと甚しく、高祖崩ぜし後、趙王を鴆殺せしのみならず、戚夫人を囚へて其の手足を斷ち眼を去り耳を煇べ、瘖藥を飲ましめて厠中に居らしめ、名づけて人彘といひしとぞ、呂后が政を專らにし漢家を危ふして呂氏一族の跋扈せしありさまは、恰も政子及び北條氏一門が源氏に於けると同じ、殊に政子が頼家に於ける殘忍の處置は、呂后が趙王及び戚夫人に於けると酷だ相肖たり。

（未完）



家庭

育兒法（若き奥樣への注意）

紐育　エメリン、クーリツヂ

二　空腹を訴ふる聲

嬰兒は、空腹を覺えると、即時に泣き出すものであるが、その時の泣き方と、また、何處かゞ苦しいとか、心持が惡いとか云ふ場合の泣き方とは、多少その身振りや何かに異なる點があつて、或は口を動かすとか、或は指や手を噛むとか云ふことがある。そして食物を與へると云ふと、待ち兼ねたと云はんばかりに、パクパクと食べるとか云ふやうな特兆があるから、若い母親達は、此邊によく注意をしなければなりません。

甚麼に美しい人間ても、その腹の奥に如何なる鬼が潜んて居やうも知れないのて、おのづと互ひに警戒をして、心をゆるさぬと云ふことはあるけれど、嬰兒に對する場合には、全く之れと違ふので、嬰兒の間は、全く無心である。無邪氣である、浮世の罪といふことは、露ばかりも心の影に宿つて居ないから、自然と其無邪氣な、罪のない心が、容姿の上にあらはれて、嘗めつきたい程に愛らしいものである。

眞實嬰兒を可愛らしいと思ふ情は、他人の子と自分の子との差別がない。嬰兒の可愛らしい姿を見ると、誰れても、即時と抱き上げて『可愛いことね』と云ひたくなる。ところが、此場合、即ち嬰兒を我手に抱き上げると云ふ場合には、餘程嬰兒の機嫌の好い時とか、或はまた、好んで抱かれやうとする時を選ばなければならない。嬰兒の心が、何か他の方へ向いてゐる時とか、或はまた、抱こされるのを嫌がる時とか、其樣な場合に、強ひて抱かうとするのはよくない。却つて、その嬰兒の、自然の氣質の發達を阻害する恐れがありますから。

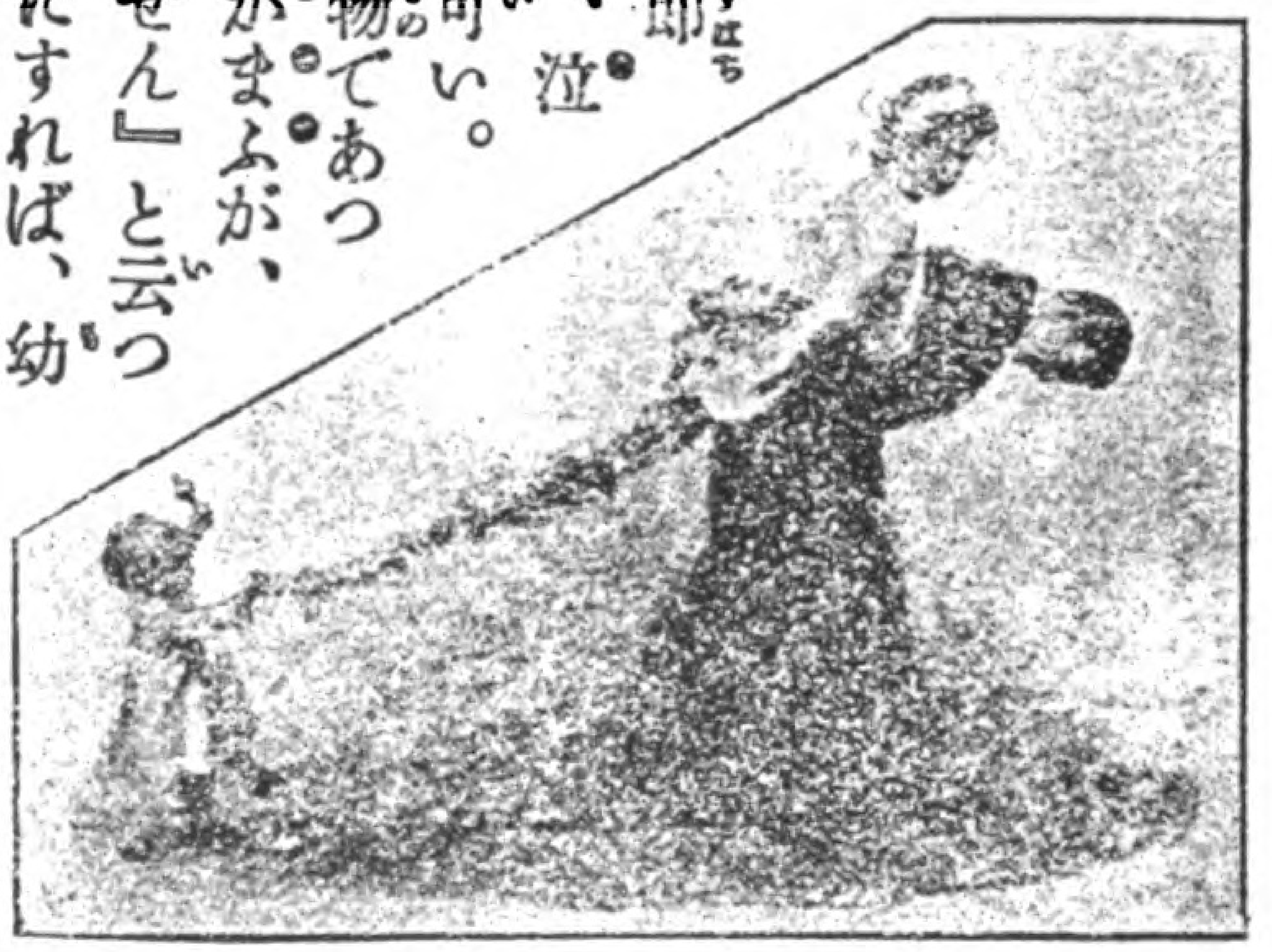
稍や大きくなつて迄も、よく泣く癖のある幼兒があるが、是等は畢竟、その嬰兒の時分からの訓練に注意が足りなかつたからて、啻に其兒の不幸ばかりてなく、その親達に取つても、また幸福とは云はれなからうと思ひます。

此樣な癖のある幼兒は、何ても欲しい物があると、

何時でも泣いて見せるのです、すると、兒に目のない親達は、即時に其欲する品物を與へて、機嫌を回復させやうと努めるが常で、段々と兒に甘く見られるやうになる。これが甚だ能くないので、泣いて物を强請らふなんぞと云ふのは、元來正しいことゝてるない。自然と之が爲に、性質がねぢける虞があるから、此樣な良くない習慣は、成るべく速に矯正すやうに心がけなくてはなりません。

然らば、之を矯正す道は如何にと云ふに、それは、小兒を甘やかさないこと、即ち、何か欲しいと云つて泣いた時分には、泣き止むまで其品を與へないやうにするが可い。また、其品物が、幼兒に與へてよくない物であつたならば、尙更のこと、如何に泣いてせがまふが、斷じて與へてはいけない。嚴然『いけません』と云つて、あきらめさす方が可いのです。其樣にすれば、幼兒の方でも、遂には泣いたとて無効だと云ふことを悟るやうになりますから、自然と惡い癖が止むだらうと思ひます。

私の親しい人の家に、數多の幼兒があつたが、平常餘程よく訓練されたものと見えて、食べ物でも、玩具でも、兩親から與へられた時に、年上の方の幼兒は、何時も年下の方に讓る習慣がある。自分に貰つたものでも、年下の方が欲しいと云へば、不快な顏もしないで、快く與へる。何と愛らしい兄弟ではありませんか。けれど、此かる習慣は、年上の方に取りては、非常に美い申分のない敎育の仕方ではあるが、年下の方に取りては、あまり面白くない敎育の仕方である。何故かと云へば、少さな方の嬰兒は、欲しいとさへ云へば、兄の物でも、姉のものでも、たやすく自分に得らるゝが爲めに、自然と性質が增長して、我儘氣儘が募ると云ふ弊があるからなので、兄弟數の幼兒を有つ親達は、齡の高下によつて、恁かる隔てをつけることなく、成るべくは、兄弟平等に相分け合ふと云ふ習慣をつけるやうに、又嬰兒にも、常に其風を見習はすやうにする方が、却て將來の爲によからうと思ひます。



三　吸ひこむ癖

嬰兒は、先天的に物を吸ふと云ふことを知つてゐる。母の腹から生れ落ちたばかりてまだ何の辨別もない嬰兒ても、乳を吸ふことだけは知つてゐる。しかも、これは乳だけに限らず、指も吸ぶれば、玩物もしやぶる、手に觸れるものは、大抵口に持つて行つて吸ぶると云ふ習慣があつて、その習慣は、稍や大きく生長する迄も續くものです。

しかし、此癖は甚だよくない習慣で、斷えず物をしやぶつてゐると、口中の唾液は餘計に費さるゝことゝなる。ところが、此唾液と云ふものは、食物と混じて、胃の中の消化を助くべき肝要の液てあるから、物をしやぶるか爲めに、餘計に費すときは、食物を口に入れる時に當つて、必要な丈けの分量が、自然と足らぬやうになるのは明らかなことてあります。

たゞそればかりではなく、絕えず口中におしやぶりを入れて居る時は、いつしか口の格好まで損ふやうになり、また、指を好んでしやぶる幼兒は、いつしか其指の形を害ふやうになり、果は恐ろしい病氣を惹き起すこともあるのです。

又衛生上から云つても、しやぶつて居た玩具などか、一旦疊の上に落ちたり、又は、地面に落ちたりなんぞしても、それを更に洗ひ淸めるてもなく、其まゝ再び口中に入れさすなどは、最も危險きはまる話て、たゞ汚いばかりならば兎も角、其麽恐ろしい黴菌が、之に附着して居やうも知れないてはありませんか。殊に、一度塵だらけの玩具箱に投じたものを、更に取り出して口に含ますか如きに至つては、母親たるものゝ不注意も、また實に甚だしいものと云はなければなりません。

前に述べたのは、僅に其一例てあるが、其一例てさへも、恁樣に大きな害と危險とがあるのてすから、幼兒を有つ方は、成るべく、乳の外には、玩具、指などを吸ぶらせないやうに心掛けなければなりません。さらば、如何にすれば、此惡い癖を除くことが出來るかと云ふに、之れは、それ〲の工夫を凝らさなくては出來ない仕事て、先づ玩具や乳嘴などを吸ぶることを好む幼兒ならば、その癖の止むまて、其等の品物を眼の前に置かないやうにさへすれば、段々と矯正すことが出來るのてあるが、指をしやぶる方の幼兒になると、其方法が、ちと厄介てある。即ち其幼兒の指に、綿の

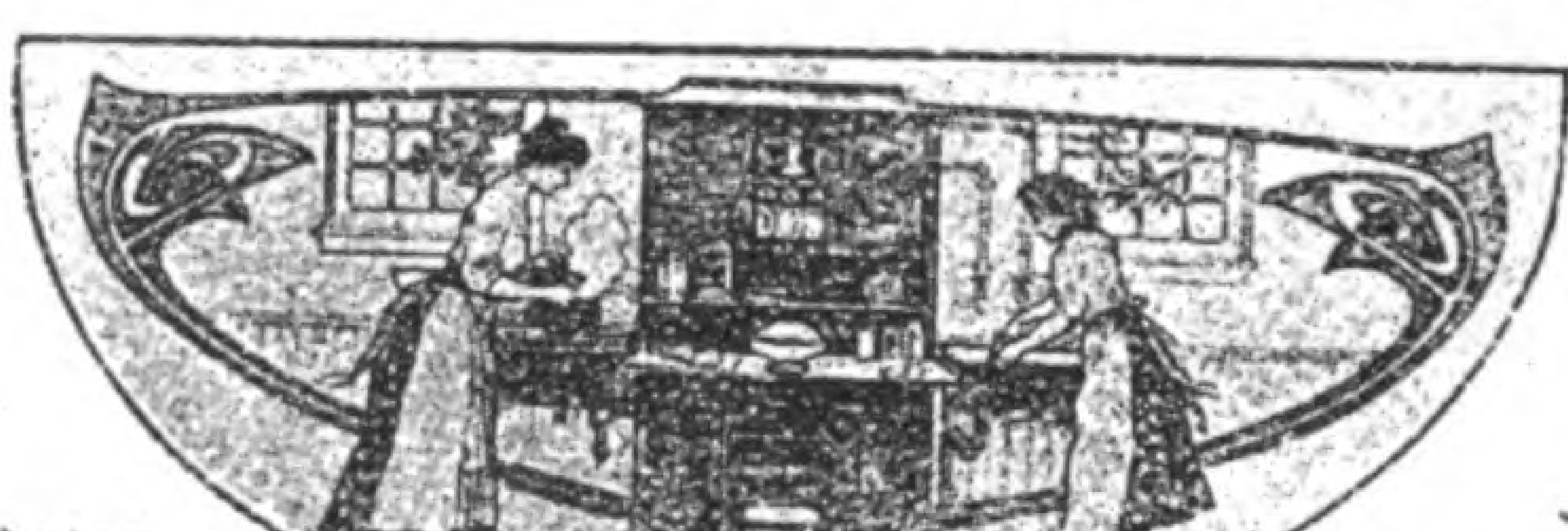
袋を被せるとか、或は手套を穿めますとか、或は、それても効が無いと見たときには規尼涅若しくば蘆薈の溶液を指に塗るに限る。それでも尚効の無い時には、板紙の類で腕を巻き、肘から稍や上に、殆ど手頭の處迄も届く位にして、指尖では玩具をいぢるてとは出來ながらも、肘を曲げて口にとゞくてとの出來ないやうにするから外に、良い方法はなからうと思ひます。尤も、係かる場合には、夜中眠らす時の間は勿論、その他の時刻と雖も、時々其板紙を取り放して、腕の發達や、肘の屈伸に害を及ぼさないやうに、注意して、よく摩擦してやるのが肝要であります。

＊　＊　＊　＊　＊

此他にも尚、幼兒には爪を嚙む癖がある者もある。けれど、是等も前の例に據つて、考案をめぐらしたならば、矯正の道も、さまで困難なことはなからうと思ひます。

朱に交はれば赤くなるとは、よく人の云ふ所ですが、幼兒の間には、わけても惡い習慣には染み易いものてあるから、成るべく、善い方へ、良い方へと導くのが肝要である。幼兒が玩具などを持ち出して遊ぶ時は、その遊びの終つた時、必ず其玩具を拾ひ集めて、元の箱へ納めさすと云ふ習慣は、乾度つけて置くべきことて、幼兒は將來、かゝる些細なる習慣から、事を處することが規律的になつて、放縦不羈の風は嫌ふやうになるのであるから、幼兒を養育せらるゝ、若い奧樣達は、この邊に、よく／＼御注意を願ひたいのです。

（完）



家庭笑話　　小式部

作り話てはありません、實際に見聞したこと！
笑ひ草となり、また教へ草ともなる滑稽な話！

五　緩い汽車

その名は、こゝに公けにせられぬけれど、速力の緩いことを以て世に聞こえてゐる、さる鐵道の汽車に乘つた一人の婦人があつた。

短亭長驛、幾十かの停車場を通過して、やう／＼、終點の驛も近くなつたころ、車掌が、切符を撿めに來た。

車掌「どなたも、切符を拜見いたします」

婦人は、聲に應じて、二枚の切符を前に差し出した。

車掌は、それを手に受取つて、撿めて見ると、一枚は、普通の切符で、今一枚は、小兒の用ふべき半切符である。

車掌は、不思議そうに四邊を見まはしながら、

車掌「この半切符はどなたのです」

婦人は、その隣に腰を掛けてゐる一人の男を指しながら、

婦人「こゝに居ます、妾の小兒の……」

車掌「えッ」

と車掌は、怪訝な面容で、

車掌「この半切符は、十二歳以下のお方でなければ、無効です。こちらにお在ての方は、お小供衆ぢやないではありませんか。立派な大人の方を……へゝゝへゝ、御諧謔を」

婦人は、故意と落ちつきすまして、

婦人「イエ、あなた。汽車に乘つた時には、まだ小兒でありましたの。それが、こゝまで參りますうちに、恁麼に成人になつて了ッたんですよ」

六　ずるい少女

年の頃、まだ七八ッばかりの女の子が、ある邸の門の前に立つて、まご／＼してゐた。

其處へ通りかゝつた一人の紳士、少女の側へ立ち寄つて、言葉も優しう、

紳士「孃ちやん、どうかなすッたのですか」

少女は、見るより嬉しげに、

少女「をぢさん、御請ですから、この門を開けて頂戴な」

紳士は、請はるゝまゝに門を推すと、何の苦もなく易／＼と開く。

紳士「オヤ、恁麼に輕いのに、孃ちやん、なぜ、自分で開けられないの」

少女「だッて、をぢさん。瀝青を塗つたばかりよ。衣裳が汚れるんですもの」

七　噓吐き坊主

ある寺の和尚が、街を通りかゝると、往來の眞中に、澤山の兒童が寄り集り、可愛らしい小犬を中央に坐らせて、周圍に環をつくつてゐる。

和尚「オイ／＼、お前たちは、往來中で、その犬を何うなさらうといふのぢや」

一人の兒童は、振りかへつて、

兒童「犬の賭つこをしてゐます」

和尚「何！　かけつこを？」

兒童『あゝ、この仲間の中で、一等大きな嘘を吐いたものが、この犬を貰へるの』

和尚『サテ〳〵、お前たちは、兒童の癖に大膽なことをなさる。わし等が、お前たちのやうな、小兒の時分には、嘘と云つては、爪の垢ほども吐かなかつたが……嗚呼〳〵、後世恐るべし、南無阿彌陀佛〳〵』

と、鹿爪らしい顔をして、珠數を爪繰るのである。兒童等も、互に面を見合はして、しばしは言葉もな



米國音樂家リリヤン、ブローヱルト嬢の家庭

かつたが、やがて、其中でも、年長らしい一人の兒童
兒童『オイ〳〵、一同、勝負は決つたぜ。この犬は、坊さんの所得だよ』

八　横着な乞食

慈善家の主婦が、針仕事をして居る處へ、襤褸の衣服をまとうた一人の乞食が、小腰を屈めて入つて來て
乞食『まことに恐れ入りますが、この通り着物が破けて困ります、何卒、おかみさん、針と糸を、一寸拜借は出來ますまいか』
主婦『はい、はい、お易い御用ですよ。さア、澤山、おつかひなさい』
と主婦は、快く針と糸とを與へた。
乞食『どうも、難有うぞんじます』
と禮は云つたが、それで綻びを縫はうとはせず、何だか、もぢ〳〵して居たが、
乞食『御覽の通りに破けて居りますので‥‥へい、御面倒でも、補綴に致しますから、どうか、少しばかり』
主婦『はい、はい、布片なら澤山ありますよ』
と葛籠の中から、新らしい小布片を取り出して與へた。
乞食『へい、どうも難有うぞんじます』
と云ひながら、頂いて手に取つて、やゝ暫らく眺めて居たが、天頭を掻きながら、氣味の惡い追從笑ひをして、
乞食『どうも、結構なお布片で、あまり奇麗過ぎて、甚麼汚い襤褸の綴補にするのは、何だか勿躰なさ過ぎますやうで、へゝゝゝ、お慈悲に甘へるやうで、何とも、はや申上げ兼ねた次第でございますが、旦那樣は、この布片と同じやうなお召物は、幾何もおあんなさるだらうと思ひます‥‥どうか、おかみさん、お情ついてに、旦那樣のお着古しを一枚‥‥』
主婦『はい、はい、ありますよ、いくらでも』
乞食は、しめたと側を向いて舌を吐いた。

女子高等師範學校入學心得

女子高等師範學校生徒の薦學に就ては從來東京府は一般募集の方法を執りしが本年よりは其方法を改め府下に設立せる專門學校在學生及び高等女學校其他高等女學校同程度の學校の卒業者當該學校長の保證したる者の内より選拔して薦擧することとし他府縣女學校の卒業者は東京府に本籍を有する者を除くの外は薦擧せざることゝせり

▲訪問心得

人を訪問するには時間、職業、其他の諸點より注意すべき要點左に掲ぐ

○時間　西洋の禮式法には、日出より日沒までの間を「モーニング」と稱へ、日沒以後を「イブニング」と稱ふ、而して日中の訪問は正午十二時前、及び午後五時過ぎになすを忌むの慣例あり、但し被訪者の職業によりては此定めの外に猶忌むべき時のありと知るべし。

○夜間　夜中の訪問時限は必らず午後九時より遲かるべからず、假令止むを得ざる事故ありて、九時後に訪問するも十時後まで長座すべからず夜間の訪問は通常一時間を以て例とし、親交の間は之れより幾分長座するも差支なしと雖、通常の交際にあつては勉て長座を避く可し。

○名札　何等の訪問をなすにも名刺は常に携ふべし、名刺は門口にて取次の婢僕に與へて主人に通ぜしむ、其家內もし二人以上の婦人ある時は、名刺の一隅を折返して出すべし、之れ訪問の一家一同にかゝる意を表すものなり。

また訪問の際忌む可き條件を擧ぐれば左の如し

○先方の家內雜沓する時は一時見合せ數日を過ぎて後訪問すべし。



○零落したる人を訪問するに富裕を誇り衣服裝飾の美をなす可からず。

○先方の意を量らず猥りに他人を伴ひ訪問すべからず。

○主人の來るを待つ間室內を逍遙し或は圖畫などを長覩るべからず。

○去らんとして一旦席を立ち乍ら特別の用事もなきに復席すべからず。

○戶を叩き案內を乞はず勸めを待たずして濫りに室內に入るべからず。

○窓戶を開閉し或は居室の整頓を亂すべからず。

○自分の時計を取り出して時刻を計ることを示すべからず。

○正式の訪問をなす時手袋を取り脫すべからず。

○對話の盡くるにも拘らず長座すべからず。

○勸めを待たずして濫りに病人の室に入るべからず。

○雨天には正式の訪問を爲すべからず。

○傘杖及び帽子等を振りまわすべからず。

○人の前に座をしめ脊を向くるは失禮なり。

○懇意にもあらざる家に小兒又は犬などを伴ふべからず、又しげ〳〵室內を長覩すべからず。

○食事の刻限まで長座すべからず。



論文

天

日本女子大學教授　鹽井文學士選

○風

牛込區早稻田鶴巻町四一八番地　小島滾子

袂をかろく弄ぶ風、漫々たる洋中、帆を孕みし千石船を送る風、花に宿りし一滴を地に落す風、小羊の和毛撫で行く風、春深うして薫香に充ちし風、夏木影、釣床めぐるかぜ、秋凉しうも黄金の瑞穗搖がす風、その風は樂しげに、平和の限りを吹き示す。人は之れによりて、快樂を得、慰安を得、奮發心を得、詩情を得、高尚き心を呼び起し。花鳥は之れに依りて、淸らけき香を運び、淸らけき譜を漏らす、其の風の過る所、歡呼の聲、祝福の聲の湧き出づるなり。

死したる子雀の、小さき骸に土きせて、そゞろ悲しき殺鳥の嘆きの言を傳へくる風、悲秋五丈原に孔明の逝きし時、蜀の陣々の旌旗搖がしし風、秋の小蝶の、消え行く身の運命え知らず顔に、草間の露を吸はんとて、か弱き翅に飛び廻るを羨みて、つれなくも地上に吹き落す風、病みたる母をみとりの夜、湖畔の蘆の穗先を戰がし渡りて、寥しうも雨戶に訪る風、その風は悲しげに、哀れに颯々と、冷たき氣を運び來る。其風の過るところ、草は死し、木は枯れ、人は泣くなり。

一天にはかに黑雲を捲き起し、雷電交々、急雨を地に降りそゝがす風、怒濤狂瀾、大船を木の葉の如くもて遊ぶ風、海豹吠ゆる北海の中、夫を扶けて舟に居る漁人の妻の、黑髮梳る風、不義の財を集めし僞善者の家吹き倒す風、その風は壯大に、快活に、勇ましく心地よく、その治まりし時は、天地聖く神爽かなり。

風、嗚呼風、その風は人の愛ふる二百十日に吹き荒れ、人の希ふ三伏には吹かず。されど、そは天の命ずる儘にして、心に一私あるにあらず。天を翔り地を奔り、逆ふ者には抗し、反する者には對するは、天の定めたる方面に進まんとの、忠實なる心に外ならざるなり。吹け〳〵風、風は永刧に愛す可く、敬ふべきものなりかし。

（雨評）　温き風をとくところ、自から情あり。冷たき風をとくところ、

自から涙あり。怒れる風なとくところ自から氣あり。末段風を論ずるところ自から理あり。一種おもしろく讀まるべき說といふべし。大にほめすぎたやうなれど、風は天のものならむ。

地

○幼兒

三河西加茂郡石ヶ瀨　澤田みさを

幼兒は美の極致である。小羊の和げる眼ざし、林檎の如き頰、紅梅の蕾のやうな唇、羽二重に似た肌膚、優しい手足、さうして曲線の美を集めたる體、あゝ幼兒は美の結晶である。

幼兒は愛の凝結である。愛には色々の種類もあるが、幼兒が母を戀ふる愛ほど深く濃かなるは無いのであろう。いかなる苦痛、いかなる場合にも、母に對した彼れは、莞爾として愛の笑みを溢すではないか。

幼兒は純潔である。其の心に一點の邪氣もなければ行に一點の汚點もない、所謂天眞爛熳である、無邪氣である、思ふ事は直に之を發表し、言ふ所は必ず行ふ、其の言行は心の鏡である、鏡は最も世の中で僞りなきもの、而して、幼兒は即ち鏡の其である。

幼兒は無慾である。彼は得るだけ得て。敢て多きを貪らない。又安心立命的である、母に依倚すれば、如何なる事にも恐れないのである。

あゝ、美の極致、愛の凝固、純潔、無慾、安心立命、是等の德を一に集めた幼兒は、如何に純善なる者であるよ、純美なる者であるよ、例へば彼は天使のそれであろうか、彼に向つては、いかなる惡人も矛を向け得ず。如何なる暴逆の徒も、愛憐の情を止め能はぬ。而して、其の幼兒が至純至美の德は、遂にあらゆる邪念と惡心とを消え去らしむるのである。

美しい蕾は、美しい花を開くやうに、何故人は幼兒の心を以て成長せぬのであろう。若し人が、何時迄も幼兒の心を持する事が出來たならば、社會は如何に平和だろう、圓滿だろう、理想境だろう、神園であろう。

あゝ利慾に荒び、虛僞みち、混沌として罪の子、魔の



女學生風俗(其廿二)

子入り亂れて、罪惡の淵に狂へる世に、一片理想境の存在を示す幼兒其者こそ、いかに敬すべく將愛すべき者にあらずや。

（雨評）　選者は同感に候。地とする。

人

○白萩と萩紅と

麹町區飯田町六丁目十番地　重田春子

今しも、わが庭の花壇には、白萩と紅萩とが咲き亂れてゐる。可愛い蜆蝶が、ひら／＼とその花にむつれる度に、花はゆらいて、やさしい紅點白點を、地に印してゐる。姉樣と私とは、椽に腰をかけて、暫しは花の品定め、姉樣は紅萩をいゝと云はれ、私は白萩を愛するといふ、あの小さい濃い紅の色、そこに溫い愛といふものがひそんで居つて、人生の自覺を促して、自由、平等、博愛を成就する革命の花ではないかと、姉樣がおッしやれば、さゝやかな淸い純白な花びら、裏面にかくれた人間の眞情を、ほのかにあらはして、世に阿らず、人に媚びず、運命に服從して、自己といふものを人のために犧牲に供するといふ、美はしい心情を持つた、やさしい詩人の涙のこぼれに咲いた花だと私はいふ。暫し、何れを何れとも決せず、そのまゝ姉樣は書齋へ、私はその花壇へ……さて、私は右に白萩、左に紅萩を眺めて、つく／＼考へた、そして大いなる發見をしたのである。

あゝ實に、世の中はこの白萩と紅萩の樣なものだ、紅萩は白萩の爲に、白萩は紅萩のために、猶更淸く思はれる、實に兩々相まつて、初めて「自我」といふものを發揮し得るのである。紅萩のもゆるやうな愛の優美と、白萩のおちついた寂の淸淨と、あゝまこと好個の教へではないか、私は、紅萩のやうな溫い情を持て、白萩のやうな潔い品性を保つて、眞正な人道をふんで行かうと決心した。決心して、さて、今更に右を見、左を見れば、猶白萩は高潔に、猶紅萩は優麗へ見えて……

（雨評）　決心してよりの末段の意匠面白し。人とす。

秀逸

○源氏の詩人

神田區竪大工町杉山內　葭江女史

平家物語や源平盛衰記などを讀んだ人は、誰人でも、平家の一代が奈何にも優美な哀詩的であることを知ると同時に、源氏の歷史は其各世を通じて骨肉相食む野獸的の殺風景なことを認めるてありませう。又、平家の人々は、何れも多情多涙の詩人肌であるに反し、源氏の人々は多く精悍鋭猛の壯士的であることをも感じませう。併しながら、源氏の中にたゞ一人、優美な性情を具へた詩人三位賴政のあることをも忘るゝ事は出來ますまい。

武人としての賴政は、機智を以て山門の衆徒を却けたことと、弓張月の射るにまかせて怪鳥を退治したことゝのほか、さしたる勳もない樣で、人から餘り重く見られなかつたと思はれます。

遮莫、その生涯は、まことに趣味ある詩であります。『五月雨に沼の石垣水こえて何れを菖蒲ひきぞわづらふ』と詠んでは、雲の上人星と列べる殿上を花の如き美人の手を授いて立つところ、面白いではありませぬか。

『人しれぬ大内山の山守は木隱れてのみ月を見るかな』て四位に、又『登るべき術しなければ木の下に椎を拾ひて世を渡るかな』と喞ちて、三位になつたのも、其そのものが、惻々人の心を動かしたからで。世の黄[illegible]を袖より通はして、榮進の途を覓める蟲とは、雲泥の差です。



女學生風俗(其廿三)

さて此の人の『深山木の其梢とも見えざりし櫻は花に顯れにけり』の歌は、有名なものだが、これが賴政自身の生涯を言盡して居る樣で、床しいと思ひます。平家驕横の間、其頤使に服從して、餘命を保つて居た頃は、意氣地無い老翁で、誰の眼からも其の梢とは見えなかつたであります。それが宇治川の朝風に、白旗颯となびかせて、天下の耳目を聳動せしめた時は、即、朝日に榮ゆる櫻花と世に顯はれた時であります。『埋木の花咲く春も無かりしに實のなる果ぞ悲しかりける』といふ辭世には、坐ろ同情の念に堪へませぬが、其最後の一活動が導火線となつて、源氏再興の機運に向はしめたのですから、實は大に實の

生り榮えがある譯かと考へます。敢て詩を生命としたではないが、源氏第一の風流男、詩人というても善からうと思ひます。

（評）論旨はきこえたり。

○小楠公

大阪　つゆ子

私が書物で讀んだ事の中で、最も私の心を感動せしめたのは、流星の如くに短かき、且つ、華やかなる小楠公の生涯に關する記事でありました。故に、私は東西歴史に顯はれたる人々の中で、最も公を好み、且つ敬慕して止まぬのであります。

人々の中には、公が四條畷に於て潔く戰死せられたのを以て、累卵の危ふきにも比すべき南朝の運命を、一手に引受けて居ながら、僅か一時の失敗に討死にしたる意志薄弱の徒だ、などゝ批難を加へる方もありますが、之は實に謂れなき事であります。人も知る通り、公は幼少の頃から極めて身躰脆弱の人で、萬一病床に犬死を遂げるやうな事があらば、父の遺訓に對してすまぬ、と常にそればかりを掛念して居られたのであります。だから師直との決戰に於て、勝利なきを見て、他日萬一犬死でもして父の遺志に背き、且つ家名を傷けてはならぬと思うて、遂に自刄せられた次第で、その境遇から見れば決して無理ならぬ事であります。

公齢未だ弱冠なるに拘らず、數度の合戰に敵の大軍を擊破し、敵將をして顏色無からしめた智勇は、古今稀に見る所で、爲めに凋落し果てたる南朝の氣勢を興奮せしめ、宸襟を安め奉つたる勳功は、赫々たるものであります。又、敗れ傷きたる敵兵をいたはり、或は溺れたる敵兵を救うて、之に衣服を給與せられたる優しき慈善の行は、人々のあまねく稱揚するところで、その事蹟は青史に燦然たる光輝を放つて、讀む每に神々しいやうな氣がしまする。しかし、私の最も敬慕する點は之等の事蹟ではなくて、公が時の御帝より辨の内侍を賜はらんとした時、「とても世に……」と詠じて斷然之を拒絶せられた一事にあるのです。

この世の中に生とし生けるものゝ中で、情の無いものは恐らくはありますまい。況して、人間といふものは、他物に比して、この愛情を多く有つて居るもので上下賢愚の差別はありませぬ。古から今に至るまで、勇もあり義もある立派な大丈夫でも、この愛情の爲めに、大切な、自分の一生を過つた人は、決して少なくはあ

りませぬ、實に恐るべきものであります、公とて情の人、殊に多恨の人であります。己れに畢生の愛を注ぐ花の如き婦人の愛に對しては、どうしてか心を動かさずに居られませう。然し、身を處するに重き公は、よく人情の弱點を看破し、古人失敗の跡を尋ねて、自分も婦人の愛にひかされて、己が一生を誤るやうな事になりはすまいかと、深く思慮を凝らされたのであります。そして、遂に理を以て情を抑へて、これに左右せらるゝ事なく、その天職を全うせられたのであります。この一事こそ實に明皎々たる月の光の如き公の歷史に、青潭々たる水を配したやうなものであつて、古今の名將中此の如き歷史を有する人物は一人もない、と斷言するに憚りませぬ。

（雨評）說くところは新しきものにはあらねど、論するところの條は先づ立ちたりと申すべし。

◎おち葉

茨城縣　小泉はま子

◎愚かなる者とて侮ること勿れ、人には各一藝の有るものにこそ。



女學生風俗（其廿四）

◎生物を屠殺するは、善事か惡事か。人は活物なり。生物を食はずんば、一日も生存するを得ず。苟くも生存保全が人間目的の一ならば、食獸を屠殺するは大の善事と云ふへきか。されど、動物なりとて、人に食はれんがために生き來りしにもあらざるべし。若し彼の食獸にして、其の智人間よりも勝れりとせば、彼れ等は、種屬保全などゝ自分勝手の理屈を言ひて、人間を屠り食ふなるべし。其の智劣れりとて、無闇に屠されては堪りしものにあらず。然らば、即人間が食獸を屠殺するは、惡しきことゝ謂ふべきか。コヽの理屈、識者に聞かまほしき事にこそ。

◎少しばかりの金の爲めに、醜躰を外人の面前に曝すの妓女もありとか。羅紗に眼眩めきて淫を四人に鬻ぐの女學生もありとか。これ小事と雖も、亦苦神州の風致を汚すもの。祠官樣の御祈禱なくてやは。

◎國家の健全は、國民の健全にあり。個人として身躰虛弱ならんか、天下經綸の才ありと雖も、又施すなからむ。妾は今代社會の弊風を見て、賢母より健母を推すなり。徒に痩骨蒼顏神經過敏症の男子を擧げんより、神經少しく遲鈍たりとも、むしろ豪骨なる强男兒を擧げよ。人生五十の壽、今や相場下落して、三十に垂んとするにあらずや。さても、我が國の前途、轉た心痛に堪へざるなり。然るに世未だ纖妍細腰貧血症深窓的處女を渴望して、肥肉多血臼腰大の婦人を嫌ふは、そも何ぞや。健全の國家を造らんと欲せば、之が根源たる健母に賴れ。

◎人生朝露の如し、而かも、たれか溘乎として消ゆるを欲するものあらんや。見よ、かの朝露の消えんとするや、燦然として人目を快にするものあるにあらずや。我れ等また消ゆるの時、爛々たる光輝を放つを得ずとなさんや。

◎人は大低長所に破る。短所に敗るゝは至つてすくなし。注意すべきことにこそ。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

特別第三賞

○ハルピンの露（刑塲の沖、橫川二氏）

長野市狐池　天紘女史

「命なり笑みて眠せずや」
つと眼をあげて見返れば、
額にひゞきし御聲に
吁、東に白雲は行く、

脚下にたゞずむ聖僧が
誦文かすかに絶ゆる時
白き御衣に引導の
命なり笑みて眠るべし、

登るはおなじ十字架と
男子三十身は死して
ナザレの人を胸に呼ぶ
名は社會に生くる幸願はゞ、

胡地の大野に日は落ちぬ
逝かん哉夫れ微笑みて
瞑路は遠し、さらば沖！
我や東土の勇士なり、

襟を正して二千里の
右手に劍のなき子等が
彼方皇帝の幸祝がん
斯の死の光榮を許しませ、

架上の人よ今こそ、と
晩鐘野を低う渡りきて
誇りの色に僧去れば
さすがに胸をいましむ、

暗はむくろを包み行く
風聲もなく聲もなし
北支那の原十濟里
あゝ何者か血をすゝる、

悲壯沈痛得易からざるの作。

天

○夕の森

下野下都賀郡小山町大字神鳥谷　新井琴子

夕の森の木下暗千古に繁る老杉の
梢と溢れて白銀の泉湧く音の低い哉
翼真白き天の子が胸に輝く寶玉の
假に現世に生受けし百合の姿の崇高い哉
神あもらすか薫風に葉ゆらぐ樂の音清く
自然の秘曲綴うして天の緒琴はさゞめきぬ
仰げば大理の石白う女神の像の微笑みや

梢を漏るゝ新星の瞬いかに閑き給ふ
こゝに平和の啓示ありこゝに希望の光明あり
煩悶に惱む罪の子よ訪ひて思を冷やさずや。

一贅語よく、一冗句なく、句々緊頭、語々練艶、今回の雄篇。

地

○大和川夕暮

大和國郡山町
北郡山二七三　野菊女史

入日の名殘七彩の
遙に宿ると見れば大川の
音無き瀬々は歌もなく
たま〱起るさゞなみは、
闇、水上を葬りて
星は雲の片そと閉けて
刧初に得たる美し名を
あゝ靜けさは神の界の

雲湧き出でゝ、美しう
水は大古に歸るごと、
夕風それもやはらかに
造化か靜けさほゝ笑みよ
やゝにせまるや、天上の
夜の平和を守るかな
とはにおくりて清けさは
夕に似たり、大和川

星の光に眠れるが如き風や波ややがて、この歌の、しらべならむかし。

人

○紅葉の錦

武藏南多摩郡
堺川村小野路　小島登美子

秋宮の階踏みて、
姫御子が化粧の爲めに、
御子が手の劒より降る、
取り落す紅の一皿。
銀の星ちりばめし、
地へ落ち草葉に宿り、
輝ける丹摺一彩、
此れ秋の紅葉の錦。

登り行く女官一人、
解きし臙脂捧げて來しが、
霜の威の崇きにおぢて、
床を漏り地へと落つる、
木に止まり川へと滴りて、
見ゆ所見らるゝところ、

想像の豊かなる、用筆の巧なる、比類鮮なかるべし。

秀逸

○葡萄

紀伊　靜女史

秋風たかきみ園生に、
葡萄の房の玉ごとに、
自然の髭に氣高くも、
かの朝雲の起るごと、
翠の音妙へに高殿の、
群るたまを洗ひつゝ、

月の光は滿ちみちて、
映るにほひの淸き哉。
天の濃漿たゝへつゝ、
ことしもそめぬ濃紫。
絹の帷幄をもるゝ時、
たるゝ雫の美はしさ。

やがて琴の音調絶えて、窓を掲げし小女子の、
彷徨ひ出ぬ庭の面に、み空の月を戀ふらむか。
亂れてかゝる黑髮を、搔き上げながら佇むは、
あゝ大理石に刻まれし、時の女神の精かそも。
光をやどす露の資を、母のみ膝に供へんと、
眞白き腕さし延べて、お指の房に觸るゝとき。
見よ其頬に添へたる、笑みは靜かに輝きて、
滴る愛の眼の中に、永劫つきぬ情あるを。

かの胡蝶の一句全篇の眼目なり

○暗の野に

東京　思范子

雨は冷やか雲わく所、戀を明せし野にさ迷へば、
小鳥の歌も悲しむや、小川は涸れて愁の調べ、
そと吹き來る秋にきけば、あゝあの人は星となりにき。
野の末くれて夕雲落ちて、星の光も見えざる時、
行いて涙を灑ぎつゝも、戀せる君が名我は呼へど、
風は亂れて道は細う、花なき暗のあはれあやなき

統一には欠くるところあれと用筆凡ならず。

○萩の汀

下谷　太田あきつ

なやみの胸をかき抱き　萩の汀に我立てば
映すともなく水に落つる　我影さても瘠せたりな
晴るゝ由なき憂愁の　眉の曇りに誰か知る
過ぎこし春は夢にして　いまだ面も若かりき
高き理想にあくがれて　はてなき希望抱きつゝ
我世たのしとうたひしは、消えて儚き泡なりき
夕べ淋しき秋の空　雲のみだれを望む時
頬に上る愁の影　大天地のさびしさを
小さき花に傳へきて　萩より起る秋の風
あやしく胸にしみ渡る

さめやすきは行樂、起りやすきは憂愁。夕秋風は、心して、水邊の人を吹く勿れ。

○巖頭に立ちて

本郷區　田中萩雨

龍女が夢の騷がしう、稚兒が淵浪逆卷くや、
こゝにも絕えぬ戰か、勝利に誇りの巨人のごと、
藻草を髮の大童、偉なる巖の姿見ずや。
根ぎし目懸けてひた寄せの、濤、狂瀾の雄たけびは、
世を滅さんず呪ひ言か、さりとも淸き湖見れば、
たゞあとなき煩悶に、若き血汐の躍るかな。
紫紺の底は永劫の、美と平和の國の頌、

運命幸なき人の子に、
　慰藉はつきぬ貞、善、美、
小さき藻草の花にだに、
　神秘の榮は罩もれるを。
山あり水ある里に來て、
　友もある子が追懷の、
寂しと胸を抱かじな、
　新らし光明趁はん身は、
戰の世に幸おほき
　戰の子のすゞろ笑まるゝ。

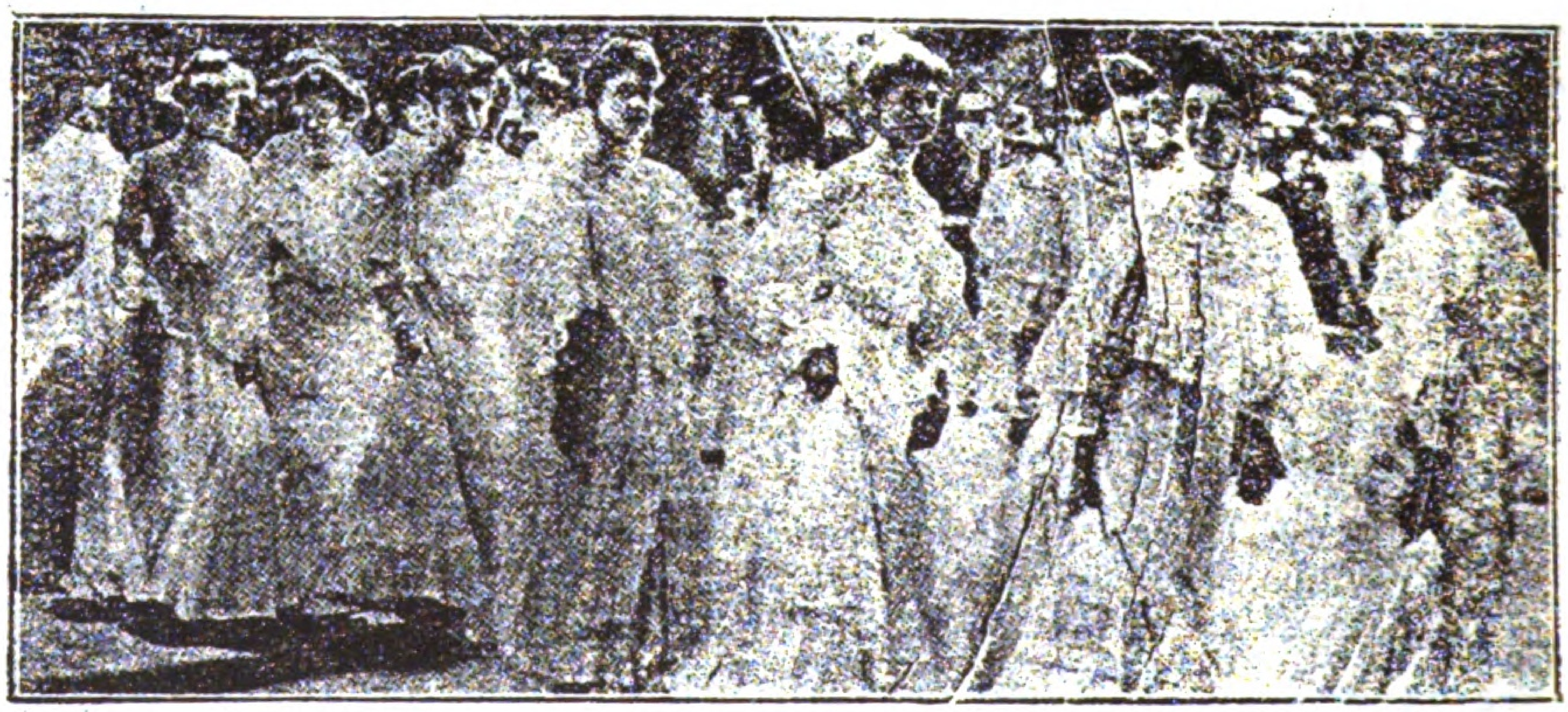
最後の勝利は、幸おほき戰の子君が手におちむ。

○亡き友
（澁谷九十九孃）

越路もだえ子

古沼にむすぶ氷にも、
　ましてつめたき人の子の、
欲にみちたる世を忌みて。
　君入りましゝ湖の、
きよけき水の面ふきて、
　はしなくこゝに來し風か。
窓にかたみの白萩の、
　花をこぼして、わがこゝに、
奏づる笛の曲をみだすよ。

力は最後の一句にこもりたり。



○海邊に立ちて

東京　重田春子

榮華の極みあとたえて、
　虚飾の色は消え失せて、
只洋々の波の遠、
　自然のたくみこゝにあり。
松風急に波緩う、
　海原ひろく岩小さし、
大いなるかな海の領、
　默示の輿はこゝにあり。
波や美妙の琴の調、
　風や讃美の笛の音、
とはにつきせぬ合奏や、
　わが世の詩はこゝにあり。

虚榮侈奢打ちすてて、　位と富もかへりみず、
詩神の心の龍を得て、　あゝ我とはにこゝに住まばや、

意は、今にしては、凡たるを免かれず。されど第二、三節の妙なるはいなむべからず。

○孤影

神戸　吉田霞江

浮世の波に漂へと　とり殘されし現身を
包むにつらき藤衣　襟重ぬれど薄くして
み柩送る花野路
新墓めぐる香烟の　行方も知らぬ遠かたや
偲ぶに袖の濡れもする　桔梗一枝を手向にて
心ゆくまで供養せん
大地に印す孤影淋しく　いとま申してかへる路
涙の狭霧拂ふも憂しや　淺茅を渡る秋の風の
われのみに吹く心地哉。

哀音、聞くに堪へず。たゞし。第二三節、第一節と調をかへられたるは何の意ぞ。

○谷の若草

下野　芝蘭女史

我は悲しき谷の草、　日影淋しき山陰に
鳥のなく音は音づるれど、　外に語らふ友はなし
春風ぬるく世にふけば、　ねよけに見ゆる若草の
我にも色は萠ゆれども、　人も知らねば甲斐もなし
春のすさびの山櫻、　さすが淋しき山陰も
櫻尋ぬる人もきて、　やさしき君を我はみき
やさしき君を見てよりは、　水も流れて谷をいで
鳥も山をばとび行きぬ、　見しその人の戀しとて
我は悲しき草の身の、　猶も淋しき谷かげに
のこりて今は友もなし、　袖ふりはなちし其の人に
名のみばかりの思して、　今も逢はれぬ悲しさよ
浮世の運命泣くべきか

よみ終りて、何となく、涙流るゝこゝちす。

○秋韻（旅中）

下野　木村露子

毛の國出てて常陸路や、　八溝の山ひがしなる、
三里の峠越えくれば、　日は漸くになゝめなり。
なかば破れたる辻堂に、　草鞋の紐は緊めたれど、
くも手の如き岐れ路に、　行きなやみたる夕暮を、
薪背負ひし少女子に、　逢ひて何れと道問へば、
我行く方へ來ませよと、　かへりみしては微笑みぬ。
さらばと二人道連れの、　紅道散りしく岨づたひ、
峽より峽にこだまする、　鹿の鳴く音を聞きながら、
急ぐともなきさまよひに、　旅の衣のかるうして、

詩の思ひの與そゝろ、　ひそかに誦する「逝秋賦」。
やよ少女子よなれもまた、　優しき聲を張り上げて、
里にならしの鄙うたの、　妙なる節をうたはずや。

清麗閑雅

○多島海を憶ふ

能登　池野　いさみ子

淺みどりなる西の海、　もとより詩の領なれば、
波のまに〳〵流れよと、　吹く涼風に送くられて、
吾と君との一ッ舟。
天のとぼそをもれにけん、　音をも立てぬ薫風の、
小島〳〵をめぐりては、　われと君との頬なでつ、
綠色濃き橄欖や、　天の樂なす鳥の音や、
昔ありつる姫神の、　くしき神話を憶ひつゝ、
湖の香しめる舟の上、　身をしづやかに横たへば、
涼風ゆるう吹くまゝに、　花の香くしう流れきて、
頬にくづれし姫百合は、　天なる詩のかんむりか、
あゝ湖の香や花の香や、　風のしらべや鳥の音や、
昔ながらの姿にて、　とはにと神の秘めませる、
つきせぬ秘密封とけて、　愛と情のみなぎれる、
二人の顔は醉心地、　家の遠きも忘らるゝかな。

詩想の豐かなる奨やむべし。されど、結末は、いまだし、まいだし。

○秋はきぬ

能登　久保かの子

秋はきぬ――夢のくにより、野こえ山こえ川こえて、
多恨の人の胸さして、
秋はきぬ――夢のくにより、野こえ山こえ川こへて、
白き小萩の袖ゆりて、
秋はきぬ――夢のくにより、野こえ山こえ川こえて、
まどのとぼそに音信れて、
秋はきぬ――夢のくにより、野こえ山こえ川こえて、
着更ない子をさわがせて、

着意をかしけれど、反復に過ぎたるは、ゆかしからず。

○笛の音

德島　大久保桂子

ともにうけにし花の香は、　ふりにし袖にのこらねど、
園をめぐりて吹く笛の、　つきぬ韻を誰か知る。
窓にかげさす吳竹の、　しのぶにあまる夢の跡、
手植の人の面影は、　あゝ幽明を隔てつる。

短かき夢のさめやすう、
神にさゝげし魂ながら、
思の色の移ろへば、
あやづる糸のうらめしく。

うらみをこめし一節に、
あゝかの人は何處にて、
月も朧にかすみたり、
わが吹く笛に泣くらんか。

纏綿情緒笛の音とともに長し。

○春日山

秋田　出羽雪子

春日の山の秋ふかう
七百年の公孫樹は
黄金色なす百萬の
夕西風の音づれて
あはれ裸木となりにけり
葉の小扇のさと散りて

夢かとばかり亂れては、
夢おどろかす紅葉ばや、
紅うけるみ手洗を
神のみ庭に臥す鹿の
苔冷やかに二葉三葉
小鳥の影のつと過ぎぬ

秋さびたる社頭の景趣、見ろとは多くして、歌ふ人は少なし。

○濱の夕

茨城　滑川華雨子

夕陽彩る大津濱、
眼も遙かなる海原や、
浮める白帆影しろく、
夕栄色こき其の邊り、
飛ぶよ白鷗の二羽三羽、
白きは永久に淸らなれ。

夕陽は沈み果てにけり、
焚たく濱の藻鹽火や、
松原三里影淡う、
漁火波にゆらめきて、
藻草香高く風清く、
浪烟にかすむ二ッ島。

微笑む月に憧憬れて、
思と詩にやせし軀の、
そゞろ濱邊を逍遙へば、
地に引く影はいと長く、
悲愁はあらぬ海士の歌、
胸血めぐらぬおもひあり。

浦邊の景をうつして、頗る趣あり。着想は平凡ながら。

○白萩

小石川　小百合女

そとつみとりし水引に
つかぬる髮のそらどけを
聲なくなぶる夕風の
ゆくての水の白萩の花

いはゆる新短詩か。淡中滋味の妙なり。

○秋の夕（うらぶれの子にかはりて）

越後　會田若楓子

あゝ幼なくて國を出で
東の磯邊西の濱
さても繋がぬ舟のごと
たゞよひゆきて夢長き

あゝ故郷を來て見れば
碧の空はかはらねど
昔の門はあれはてゝ
胸にせまれる寂寞や

門に立ち出てたゞひとり
夕の空をながむれば

吹く風いとゞ冷やかに
あしたゆふべの逍遥に
遠山寺の鐘の音に
流落の身に伴ふは、たゞ涙のみならむ。
星も思を傷ましむ
紅燃ゆる夕雲に
永久に涙を流さんか

○夏の神

徳島　小川なみ子

光りの御靈(みたま)警蹕の
み園の合歡の莟揺りて
天の雫の地に落ちて
なさがら沈の馨あり。
いとも尊ときみ姿や
原にみ手あげ麾(しませば)、
峯より颪す青嵐。
峯に朱檀の鞭とりて
森羅萬象收りて
ふたゝび鞭に麾しませば
物皆、聖く甦へり
『生命』を吸ひて鳥たちぬ。
河原を馳する小川に
夏神の幸に笑み伏しぬ。

響とゆらぐ瓔珞や
空の茜も濃紫
淸けく咲きし白百合に
燦たる光、太刀佩きて
雲、金色の旗かゞけ
御聲爽(さ)やかに敕宣(ちよくのり)れば
夏の魅魍(ちもう)は皆、慴(よ)しぬ。
綠の木陰水湧きて
翅かるげに美はしく
草歡びの葉に生ひて



○蝶のむくろ

金澤　はなわ

佳句多けれども、欠點もまた少なきぞ。

めてにしけけしははや散りうせて
たてる水仙、花またさかず
淡むらさきのつゆ草のみの
　いたづらに多きさ庭の夕
枝折袖がき土つくあたり
　ふとみいでたる胡蝶のむくろ
黑ゆあや袖つとかきあはせ
　威あるべきひげたゞなえはてゝぬ
世はくれそめて銀の星
　神告示してまたゝきそめぬ
いつかいでたるかはほり二つ
　ねむれる胡蝶が小さき魂を
　わがいけにへにのろはんとてや
　妙なるひかり打かすめては
むくろの上をもつれてとびぬ

など適にその餘ををさめざる。

○目ざめしや

小石川　海老澤　トク子

夢見けりあゝわれ夢見し、
うなされて心くるへり

ほまれの音高く耳にし、
夜明くるにや日くるゝにや、
鳥なきわたる、

金色の光まばゆし
鐘の音の強くひゞきて
目ざめしや現ならぬ長き眠より

茨城　井原正子

○遊

塵の此の世のさゝやきか
やさしき色の衣をば
深き香をかをらせて
涵りて池のそが中に
まといてさける花蓮

靜岡　花田紅葉

○怪む勿れ

嵐は雲を吹きやりて、
雲は嵐を呼びつれて、
雲と嵐は寃の使、
月はかゝるにまかせたり、
一朶の雲のあればとて、
嵐は雲を吹きやりて、

月の影をば遮れり
咲ける花をば散すなり
月と花とは神のみ子
花は散るにぞまかせたり
永劫に月をば隠すべき
光さやけき時はあり、

茨城　大部春浪子

○雪を見て

ながれ盡きせぬ徳川も、
榮華の夢のさめしたる、
雪を血汐に染めてけり、
末は凋てもみなもとの、
松の操にくらぶべき、
雪をふみわけ徘徊ひき、
あゝ安政のそのむかし、
消えて果敢なく失しかど、
さくらだもんの名と共に、
あゝ源平のそのむかし、
いつしかとけて消しかど、
松のみさをの長へに、

時めく春の花散りて、
櫻だもんに消滅は、
江戸のもる人何と見し、
いさゝ流を絶さじと、
操を立てし常盤女は、
時のもろひと何と見し、
血汐に染みし白雪は、
國を思ぶのまごゝろは、
后の世までも傳はらむ、
笠につもりし白雪は、
家を興せしいさをしは、
末の世までも傳はらむ、

神戸　今村すが子

○追懷

月なき夜べも、やみの夜も。
晨、夕べに、さすらひし。
その古郷の、野を山を。
心のこまにむちあげて。
そは過ぎたりし、七年の。
さるも空しく、老ひはてゝ。
床しき里にかへり來つ。
伴ふ人も、あらずして。
七年ぶりのさすらひを。
一入秋の、興のふけて。
音にかはらできこゆなれ。

心強くもあとにして。
東の空に上りしは。
昔し門出の時なりし。
飾る錦もあらなくて。
今月はゆる、秋の夜に。
物思ふ身の只ひとり。
さすがに神の、栗の野は。
牧場もる子の、草ぶえも。

島根　永井芳子

○水のゆくへ

水のゆくへをたづぬれば、
岩に砕け岸に散り、
霰吹露と變りては、
霞と立ち出て霧となり、
いとほがらかに生育し、
人の心を安らかに、

水には水のつとめあり、
霧と化しては雲となり、
人を慰め人と和す。
雨となりては萬物を、
かつは宇宙を清めては、
濁の世をばぬぐふなる。

金澤　森井せき子

○野路

淋しきまゝに立ち出てゝ
鬢のおく毛かきあげつ
月影冴えてなく虫の
小萩糸萩をみなへし
川添小路うづもれて
月の光にながむれば
色香をめでゝ女の神の
きらめく露の三つ二つ

ゆるき流の板橋に
ひとり無心にたゝずめば
聲ひとしきり澄みゆきぬ
今を盛りと咲きみだれ
足ふみ入れむすべもなし。
一もと清き白菊の
つけませしうるほひか
そか花ひらに宿りつゝ。

香川縣　村上雅子

○秋淋し

一

月さえかへる欄干に思になやむ少女子が
情の雫散れる時孤雁一聲、秋淋し。

二

溺れる迄の翠たえて草木も眠る秋の夜中に
誰が戸に叩く木魚の音かきれつ續きつ、秋淋し。

三

今宵十六夜の月影も霧たちこめて光淡く、
枯木の陰幽なるに鐘の音しめりて、秋淋し。

○夕暮　群馬縣　汀柳女史

入相つぐる鐘の音に
塒に急く村烏
夕ばえの色もはやさめて
うたの聞ゆる山の邊は
黒く聳ゆる山松に

くれ行く空をながむれば
こゝやかしこに三つ二つ
家路をたどる子供らの
夕の畑たちなびき
星の光は見えそめぬ

○渡守　呉服縣　利子

渡る野川はやすけれど
逝きてかへらぬこの水に

よる年波のひまもなし
棹さすこともいつ迄ぞ。

○歸らぬ君　愛知縣　北脇柳村

つばめは來り雁はゆき、
花のあしたに月のよひ、
おもひはつきず玉鉾の、
きみの姿は見えれども、
朝に髪をかいなでゝ、
痩せたり晩な我すがた、
言はれじ言はじ告げもせじ、

爲だにもとは忘れぬに、
なにとて君は歸らざる、
道を眺めて門にたてば、
我うきのみは増りきぬ、
鏡にむかひうち見れば、
痩せたり辿も問ひますな、
唯知るものは月なるを。

○洗ひ髪　岡山縣　松本もと

やう〳〵のびし黒髪を
紫リボンそとときぬ
雪より白き肌ぬぎて
妹十二の美しさ
しづく滴る黒髪を
三すじさがりて頬白し
涼しき眸見はつたる

今日晩はんと妹は
鏡にむかひほゝゑみの
つとかきあげてほつれ毛の
妹が姿の姿見に
うつりて又もほゝゑみぬ。

○秋江　本所區　田中粱女

秋中旬のたそがれや
霜がれたりな垣の外
秋江波のせゝらぎに
片帆に榮ゆる夕日影
夕靄そゞろせまり來て
水の邊きに羽うらて行く、

芒に啼つ虫の曲
雲去り行きし此の夕
歸り路いそぐさゝ舟の
日の影こゝにうすれては
飢に餌あさる雁がれの

○橋上の人　横濱　數島小萩

春の水ゆく江戸川の、
やせし腕をおばしまに、
歌ひて流す、絶え〳〵に、
鉀へる燕、旅の鳥、
うれひてみゆる人やある
それと告げかし、なが締に、

夕しづけき橋のうへ、
かけて心の悲みを、
いづれの國の吾の如
天の使の鳥ならば、

○露　三重縣　奥瀬かすみどり

よべむら雲におそはれて、
從者なる星に打ち別れ、
おゝ其の時よ一雫、

優し姿の月姫が
月宮殿に入りませし、
ほろりと落ちて淵の露、

○相思　仙臺　さゝ波女

蔽へる雲はあつくとも
吹來る風はあらくとも
荒める風はまだそ止む
雲は散り風やみて
見ずやみ空の月影は
ゆめな嘆きそ悲みそ
戯ふは雲の習ひにて
清き心しかはらずば

月の光りは變らぬを
海の心はかはらぬを
などてか雲の晴ずやは
世は靜かなるその夕べ
千尋の海に宿り來ぬ
隔てられつる今の身を
荒むは風の常ぞ唯
相見ん時のなからめや

み空の月は高くとも

〇水藻

うき世ばかりの草枕、
人の命は春の夜の、
やまべに匂ふさくら花、
嵐は露と散し行き、
身を浮き草のよるべなく、
水はすめども我胸に、

〇古城跡を訪ひて

高くきづきし石の垣
宵の守りの篝火も
夏草茂る古城の
草ふみ分けてながめやる
清きながめに我が庭は
ふじの高峯を軒端にぞ
高き勲も忍びつゝ

〇露

今朝あけわたる東の、
葉末にたまる白露の、
きらめきわたる蜘蛛のいを、
暫しうつろふ空の色、

〇磯の夕

靜かに淸き風たてば
凝りたる酒は秋の露、
哀れ淋しき夕かな
礒なれ松の影くろう
折りしも三日の月影は
淡き光をなげかけて

千尋の海は深くとも

茨城縣　小泉はま子

むすぶもあはれ露のひま、
只た手枕のゆめなれや、
花の盛りもまたずして、
殘るは青葉二三ひら、
まよふもうしや世の海の、
にごりは絶えずいかにせむ。

神田區　小枝子

雲にそびゆる高矢櫓
今跡たえて影もなし
跡こひしくも訪ひきつゝ
あふげば高き富士の峯の
松原遠く海近し
見るとうたひし武士の
むすぶ秋の涙かな

陸中　黑澤美津子

聖き栗の影うつす、
よべの名殘のうつくしき、
葉末の露のぬらすとき、
さがしき虫もためらひつ、

金澤　森井せき子

盃白き朝顏の
水ともならてこぼれけり、
とひちる波の白くして
玉藻の香り身にそしむ
彼方越路の山の端に
沖に浮びし漁火の

三つ四つ二つまたゝきぬ

〇病軀

湯上り衣しとけなく
オレンヂ色の夕榮に
そよと吹き來る妹風に
後れ毛輕く喰ひ留めし
觀骨高く頬はこけて
淸きは天の汗の如
聞くや戀人花と散り
生命の緒をひかへつゝ

〇紅一點

太古の璧の跡斷ろ、
くだけとうちて[illegible]と、
散りては舞ひつ蹤がへる、
巖の苔の露なてゝ、

〇ほのめき

詩の御姫の、うつくしき
朝、やはらかき春雨に、
にほとけては、うつゝなく
あや罌はしき、陽炎と、
戀をかざれる胸の彩糸。

哀れ淋しき夕かな

山形縣　高橋信子

袖折り垂れて欄のはし
懸想を商く手弱女や。
油氣なき髮に波見えて
懷さ極むる面の色。
膸に浮ける玉水の
笑凹ももとの影ならず。
此君またも惡きに病み
かくて溫泉宿に籠るなり。

福岡　美江女

獅子にも似たる巨巖を
水煙迷ふ瀧の音。
一葉は秋姫の纖指か
渦にしたがふ紅一點。

露子

翔なつながむ銀絲と、
幼千草か、笑き夢の
理想の園にもつれては、
覗いかな、君とわが



叙事文

日本女子大學教授　櫻井文學士選

天

○夕立

神奈川縣高座郡相原村小山　霧生かめ子

池の周圍に、萩や山吹が青々と、何れも勢よく茂つて居る。その下かげに、今まで隠れて居つた青い小さな蛙は、何と思つたのか、不意に飛び出したが、やがて青々と苔むして居る石燈籠の上にはひ上つて、さも愉快さうに、庭一面を見下して居つたが、淸らかな聲に、キャッキャッと二聲三聲なひた。さうすると、其の下の小池に遊んで居つた多くの蛙が、一聲にガヤ、ゝとなき出した。

南の山の端に一團の黒雲が起つたと見る中に、天は萬斛の墨汁流したやうにおほはれてしまつて、軒の雀は塒に歸り、梢の蟬は聲を止め、なまぬるい風が南の方からふいて來ると思ふと、まもなく南の山の頂から北へかけて、恰も萬火の一時に燃え上つた樣、電光閃くや、天地も覆へすやうな勢で、雷なり渡り、葡萄大の雨粒は、五點、十點、百點、千點、一萬點、盆を覆へすやうな勢、土を飛ばし埃をとばし不時の黄霞をたなびかせた。

畑中に餌をあさつて居つた鷄は、軒下にかけ込み、水喧嘩に餘念なかつた、農夫の不平も洗ひ流され、小急ぎに家へ皈つて來る。今まで愉快な野遊びに、夕立の襲來も氣がつかなかつたであらうか、竹刀佩びたまゝ一目散に走りゆく小供もあれば、笊をかぶつて疾走する小僧もある。菅笠に富士講と書いた白衣者の、鈴の音も勇ましく走るのもある、馬も走る、魚屋も走る豆腐屋も走る、油屋も走る。舌うちならしながら半濕りの干物をとり入れる下女もあれば、午睡の夢さめて驚きあわたゞしく戸を閉める下男もある。今しも通りかゝつた一人の旅僧は「御免下さい」と云ふより先に軒下にかけ込んだ。雨滴の水は量をまして、小溝に仕掛けてあつたおもちやの水車は、塵や埃の爲めにまはらなくなつた。それを繕はうと、衣の濡れるのも知らないで、母のとむるもきかぬ兒童もある。蚊帳の中に

もぐり込んで、桑原々々ととなふるもの、耳を確と抑へて萬歳樂々々と云ふもの、上を下への大混雜、雨は愈はげしく、雷は鳴りはためく。

旅僧の身の上話のあらましを聞き終つた頃、なるかみは漸く聲を收めて雨も小降りになつた、銀線のやうな細かい雨が、斜にふつて居つたが、それも少しの間。今は全くやんで、西の方には碧りの空が見える。西の山際眞紅に輝いて、美しい虹は遙か稻田のあたりに染められたが、しばしの間に一陣さつとふき來た涼風に、群雲はふきはらはれ、虹橋は次第に消え失せた。「ありがたう御坐いました」と云ふ聲を後にして出で行く旅僧の笠に、夕日が輝いて、影法師が斜に長く引いた。

夕暮告ぐる鐘の音と共に、清い研ぎすましたやうな月は、高く山の端に現れ出で、松の葉末の白露や、池の淵なる蓮葉の露、萩の白露、恐く玉をさゝげた。軒端の風鈴の音は、小川の流れと相和して、一層の涼しさをました。

(蘭評)　夕立の景、うつし得たり。旅僧の道具を風ひ來たりて、其の身の上ばなしのあらましをきく間に夕立のすぎさりたりといふより、出て行く旅僧の姿に雨後の景を描きたるなど、此の旅僧を用ひたる趣向面白し。此の叙景文の陳腐をまぬかれて、一かど新しきを得たるは、誠にこゝにありと言ふべし。筆も立ちたり。天とす。又曰く、末段の數節は削る方面白からむ。旅僧の後影にてとゞめたる方妙ならむと思へば。

地

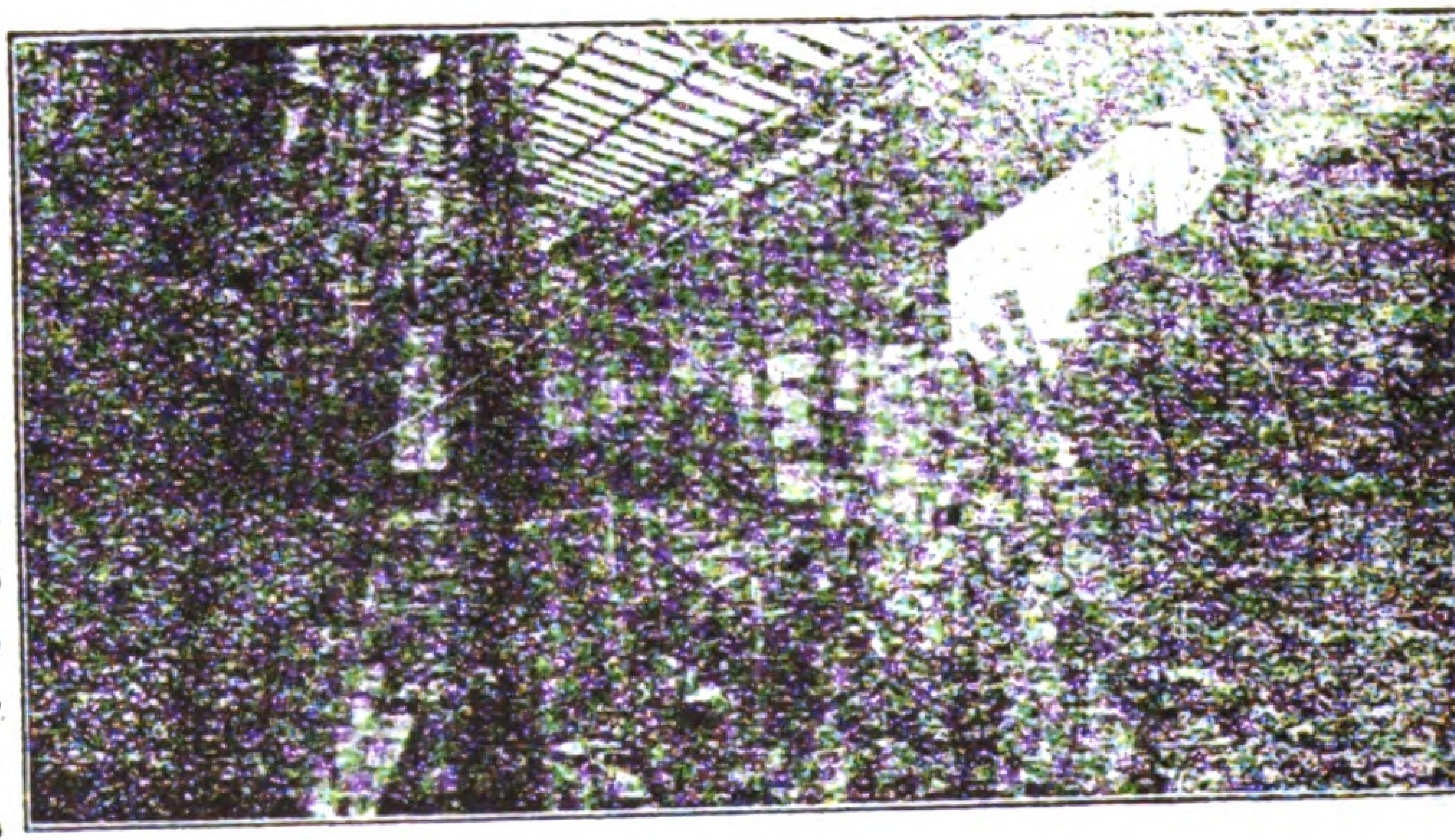
○安樂溫泉行

鹿兒島市　春子

「今日の日に、限りたることもあるまじきに」と、祖母樣止め給へど、思ひ立ちては、やむこと好み給はぬ父上、かばかりの雨に、汽車も馬車もあるものを、と、はや旅行カバンなど、取り出し給ふに、わらはも嬉しさに、支度するまも夢心地、何くれの用意に忙しき母上を、早う〳〵とせき立てゝ、そぼ降る雨の中に家をいで、停車場へ行きぬ。

走り行く錦江の濱邊、白帆のかげ遙かに眺めやらるべき沖合は、薄雲立ちこめて、雨にうたるゝ磯松の、岩根を洗ふ浪のまに、水鳥一つ二つ、淋しげにとびかふのみ。雪の冠頂きし櫻島の、みぎはには、とまやの棟の、をちこち、綠の木の間にほの見ゆるも床し。重富、加治木を過ぎゆくまゝに、景色よき海は、やう〳〵遠

ざかりて、半ば見え隱れせし櫻島も、今は全く雲の中に消えぬ。國分停車場へ下り、待ち設けつる、安樂溫泉行の馬車をかりて出づ。一里許り、人家稀なる野道を來しと思ふところに、日當山溫泉場あり。旅館にもるゝ合奏のひゞき、いと涼しげなるに、我が行く先の思はれて、嬉しきこと限りなし。青々と、豐かになびく、千町田の、稻の上風心地よう、進みゆく程に、目もさむる許りの佳境は、笑めるごと、我れ等を迎へぬ。淸きことよ、この流れ岩にくだくる美しさ。その瀧、あの山など打ちさわぐに、父上、母上、げにこそとて、同じく眺め入り給ふ。かたへの山ぎはには、荻あるは名も知れぬ草花、露おびたるまゝを、劣らじと、咲きみだれつるも、可愛し。變りゆく山の姿、水のながれ、あかず見つゝ、何時しか、三里の道を、目ざす里へ着きぬ。前には望む淸き谷川、雨中の夏山は、さながら畵の如く、後の山より落ちくる瀧は、池に入りて、アヒル浮び遊ぶ。雨はをやみて、西の空、やう〳〵あかりそめぬ。如何ならむ、今宵の月かげ、虫の音。



團子阪の菊人形

（雨評）景あり、情あり。うれしき旅行の途の記、詞も筆も、誠に心より出でたるあと見えて、ゆかし。才氣もところ〴〵こぼれて、ゆかしきものあり。地とす。

人

○鏡が浦

上總國山武郡千代田村　林　葭江

あゝ、鏡が浦の海の色、空の碧、思へば、幾年の夢に入りしも、あだならじ。われはこゝにひとり巖に上りて、其の天地の風光を恣にしたり。懷かしのながめ哉。

初秋の空、名殘りなく晴れて、雲鮮やかに風暖たか。見渡せば、鏡浦一帶の海潮、ゆるう旋りて、藍碧の色は天と共に永しなへなり。鹿野淸澄の秋の峯、さすがにうるはしきに、西には天城箱根を從へて芙蓉の峯、玲瓏雪白く蒼天に秀でゝ、たゞ永劫の威嚴と艶美の姿、

今更たゞへむやうもあらず。沖には沖の島、鷹の島を控へて、一帶の翠黛水に映じ天に映じて、さながら詩の如く繪にも似たりな。

さらぬだに寄せては返す浪の響きも、ひとり子の夢を誘ふて懐しきに、折々は鷗眠げに鳴き渡りつ、沖の白帆の雲と共に流れ行くさま、いかなればかくも靜けき景色ぞや。そこには平和の光と愛の微笑みとあるのみ。思へば、神はそも誰が爲めに、かくも美しき世を創りたりけむ。愁ひと惱みのために、世をも人をも煩はしと喞ちし身の、今更に恥かしく思はれて、たゞこのまゝに露ともなりて、この大なる天の光の中に、消えも入りたき心地ぞする。

空は限りなく靜かなり、潮はたゞに返るのみ。沖行く雲の流れと共に、われはたゞ思ひ沈みぬ。夢にも似たる來し方を顧れば、昔ながらの涙のみ滴れ／＼て、秋の胡蝶と共に葬むりて永はに棄てよと誓ひたりし愁の跡も、今更に惜しう偲ばれて、愛しと思ひし我が世の命の、なか／＼に慕はしう覺ゆるよ。

『生にも死にも憧れて、涙のみそゞろ滴れぬ。』

磯寺の鐘は夕を告げて、日は暮れかゝりぬ。雲の流れ、潮の音、芙蓉も天城も一つ色に包まれながら、聲もなき夕暮に眠り入りつゝ、我が世の靜けさは說きあかさむやうもあらず。

空に輝く星の光こそ、人の耳には響きがたき、神の眠りの歌なるべき。われはそゞろ、無言の、聖なき祈を捧げぬ。

（雨評）文また銚が浦の秋の、何んとなう心地よくさわやかなるものあり。人とす。

秀逸

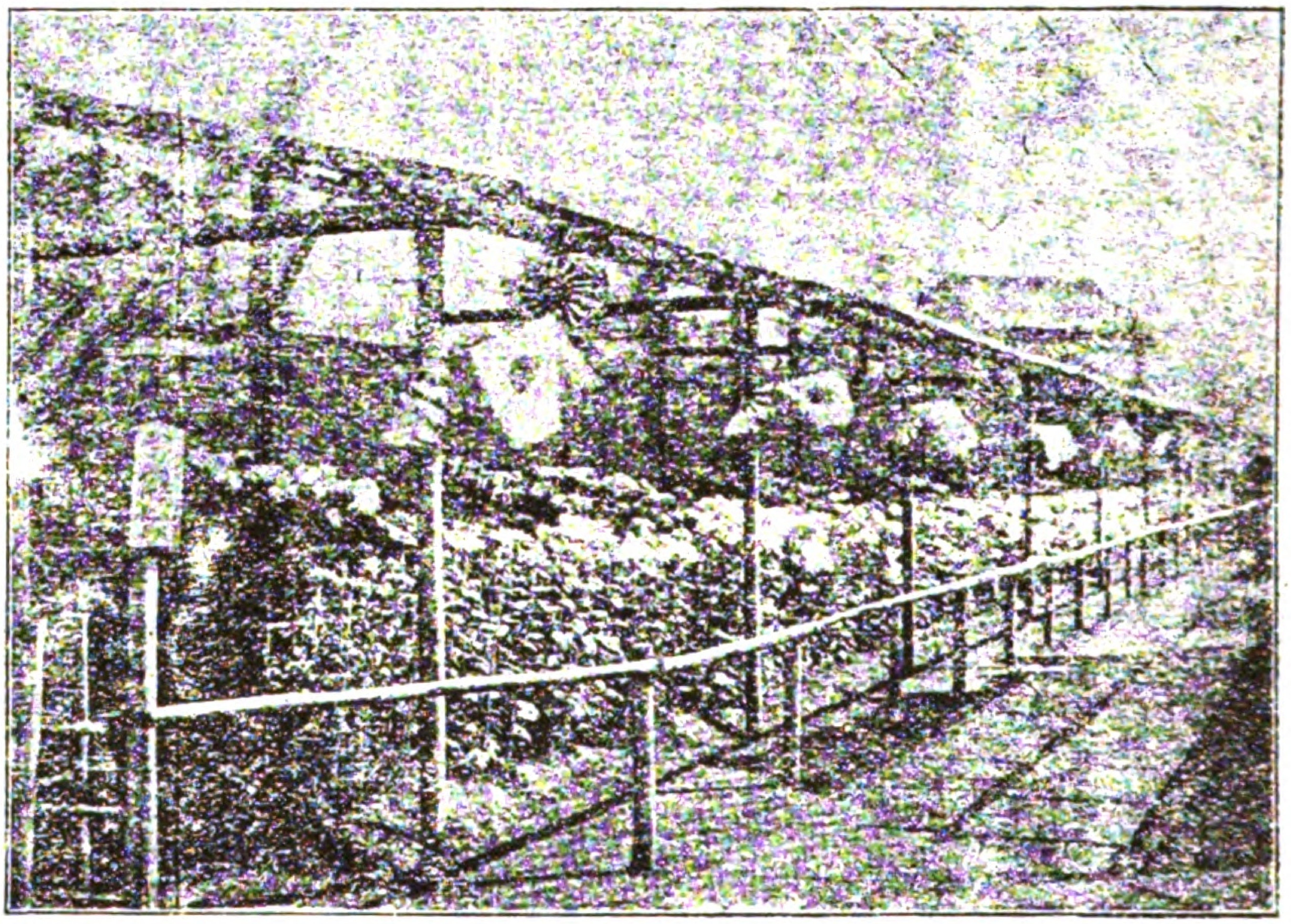
○朝の勤

三河西鴨郡石ヶ瀬村　澤田忠三郎方
澤田つま子

お日樣の上らぬ前に床を離れ、曉の星や、涼しい朝風を、身に浴びながら、妾は例のやうに三尺許りの竹の先に木鋏をつけ、晒の手拭を姐樣冠にして、裾を甲斐甲斐しう端折り、襷掛て跣足の儘、裏の畑へ干瓢の空花取りに行くの‥‥。

蚊帳釣草や、釣鐘草や、薺、蓬などの、しどろに露をあびた間を分けて、背戸の野菜畑へ出ると、紺紫の滴る樣な茄子や、雌黃で刷いた樣な胡瓜や、さては、紫蘇、唐辛、小角豆などの、夏端の野菜が作られて、遲

蒔の苣は、また三四基の短ひ臺が立つた許り。其の間では、絶々に咽ぶ樣な細い地虫の聲がして〃時々青ひ羽虫が、重さうに据へ飛びつく。隙間もなうかけ渡された低い棚一面の夕顏は、星の樣な露の玉を綴つた廣葉を覆ひ返して、昨夜の花は萎れもせずに、ぎつしりと綿の如く咲いて居る。妾は、其中から子房の無いのを摘み捨てるので、手の屆かぬ所は、木鋏て戞々やる。すると、休暇て歸つての兄樣が、散歩しながら『俺も些と手傳つて上げよう』と露にぬれるもひとはず、手傳つて下さる。やがて、裾も袂も露でしとゞになつたので、手足を淨がうと、前



團子阪の菊

の小川に行くと、其所には、姉樣が、畠の隅の畝に眠つて居る合觀の根元から、拔いて殊た夏大根を、土の儘ざんぶりと水に漬けて、太股の邊まで裾を褰し上げ、水晶を溶した樣な清ひ流に、白い脛を浸しながら、草の把稿て精々と洗つて居なさる。小川の岸には、瑠璃色の月草が犇と咲いて、雫の滴る大根がのせらるる毎に、ホロ〳〵と露が葉末を辷つて、草の根に浸み入るのである。

光琳風な禿山の上に、鳩羽に橙色の覆輪を取つた朽木形の横雲が靉いて、燃ゆる樣な旭は、炳然と赤く射し映へた光線に、空を澤々しい乳色にぼかした。將棋の子を散した樣な其所此所の茸茅の家よりは

朝餉の煙が太く細く立ち昇りて、桔槹の響や、薪割る音や、朝の勤行に叩き出した尼寺の木魚や、犬や雞や、一所に交つて、さも豊そうに村の平和を語つて居る。て、姉樣と大根をさげて、母屋に向ふと、頭の上の合歡の眉刷毛の樣な薄紅の花の梢からは、元氣よく蟬が鳴き出して、臺所の引窓から、白煙が淡う立ち昇つて居るのである。

（雨評）作者の文いつも優美なる畫の如きところは、一かどの得たるものありと言ふべし。

○湖畔の月夜

在小石川東青柳二近藤方　松本しのゝめ

金鐵もとくる三伏の日巳に沒すれども、炎熱猶流れざる茅蘆の裡の、堪へ難さに、凉を尋ねて、白嶺湖畔に到りぬ。潮は落ちて、櫓聲遠く、月は昇りて、山色近し。汀に伏せる蛋戸蟹舍波に這へる萩渚蘆洲、或は黑く或は白く素絹の間に彩られて、濡たり洒たり、一幅の活畫。あはれ餘波の月にひろはれきら〳〵として漣漪たてるを、一步すれば銀波碎け、再步すれば金浪破れて、そこゝとなく水紋散る。知らず明月の詩を誦し、識らず窈窕の章を歌ひて、心身漸く塵寰を脫し、飄々平として仙境に逍遙ふ。月影愈々冴え、星光轉た清く、夜凉天に漲りて、爽氣肌に徹り、また季の暑たるを覺えざるなり。時に黑雲忽ち起り、南を臨んで翼を張る。乃倉皇踵を回らし、獨り波間に月をのこしぬ。

（雨評）筆簡にして力あるところ、見るべし。

○夕立

能登輪島町勝田方　池野こひ子

遠い連山は、已に雨が降つて居るので、朦朧として居るが、時のうつるに隨ひ、大粒の雨が、矢尻を落す樣にやつて來たので、橋下に、網打ち人が、微茫として見ゆる。

川の形はS字形だので、宛然白布をしいた樣に、うね〳〵して、はては青楊の間に消へてしまふ。其處には、一本の老松が高くひよろ〳〵と、夕立ちを浴びながら立つて居る。橋の上には寸人尺馬、松の上には山寺の屋根、夕立を浴びながら薄れて見ゆる處、正に是れ畫中のものである。人こめ、馬こめ、松こめ、寺こめ、川こめて、大きく四角にとつた好活畫である。

頭をめぐらせば、まことや、『晝顏のうなだれて咲く野の小路、小路うね〳〵君が家見えず』との薰園氏の詩

に似て居る野の小路、今や驟雨を浴びて、一段の詩趣がある、二三の茅屋葉末にちらつと見えて、白烟ほのぼのと立ち昇る處、詩趣掬す可きに、烏の群がほのかにうすれて見ゆる。鐘の音が低く顫へて來た。天にそゝり立つ鴨巣山に雲のかゝつて居るのは、富士の山とも見ゆる、三里つゞける礁の松原薄霧が立ち渡つて、あれ、烏の聲がします。

雨がて降りになつて來た。と見るまに、西の空には眞紅な雲が、むら〱湧いて、川面に映つた。其の美くしさ、花やかさ、まるで桃花のしづくが流るゝ樣、ふちも瀬も、其れから柳の葉のひたつて居るあたりも、みな、艶々しい女神の衣を洒した樣に見ゆる。其の美はしい桃色の水がめぐつて居る中洲のある一端には、網打ち人が、菅笠と簑のみなりで立つて居る、そして、下流には欄干のある橋が、はるかに見ゆる。春の夜の夢、櫻の雲が爛熳として咲いて居る彼方、霞の上に浮いて居る玉樓をのぞんだ如く、恍惚せざるを得ない。遠の音が低くきこえて來た。

（醉評）文に一寸詩趣あるを愛す。

○夕暮の散歩

上野國碓水郡東横野村　五十貝すゑ子

長閑なる田園の一日、今や晩霞のうちに暮れなんとする夕、久々にて歸省せる兄と共に、郊外を散歩しぬ。野邊には萩桔梗、女郎花、其の他名もしらぬ千草咲き亂れたる中を分け、露にぬれつゝ彼方にゆけば、潺々として晝夜流れて止まざる碓水の流れ、兄は懷古の情に堪へざる如く、暫し橋上に立ちて、自然の景色を眺めぬ。

夕陽は、今し沈まんとして、數百條の光線を雲間より放射し、森を越え、丘を踰え、藪を通し、最後に碓水川の漣に閃いて居る。瀬毎に鳴る水の音は、恰も琴の音を遠く聞くやうで、何となく四邊がしめやかで、我が魂が遠くなる樣な、儚ない思ひがする。兄はまだ夕日の美觀を眺めつゝ新體詩を吟じてゐる。やがて、夕日は碓氷嶺の蔭に落ち、深紅燃ゆるが如き、彩雲次第に淡くなり、やかて青くなり、白くなりて、終に消え果てつ。遠寺の鐘につれ、今迄野にありし人々も、鍬を肩に、追分節うたひつゝ、家路に辿りぬ。折りから、何に驚いたか、露と共に、一叢の芒の中より舞ひだした秋の蝶、痩せた影寂しげに、舞ひゆくかと見えて、水に流れたのが、うす暗くみえた。やがて、圓々たる

十六夜月は、東山の頂より出て、この平和なる夜を限なく照らしぬ。……兄はやがて腰より一管の明笛をとり出し、飾愉快に奏つる征露の曲。我れも學校にて習ひし歌なれば、唱ひて之に和しぬ。餘韻遠く響き渡り、月は益々清く、我等を照らし、萬里の空愈々澄みぬ。吁々長兄今遠く、天涯萬里の滿洲の野にあり。草のしとねに銃を枕の身、今宵の月をみて、如何なる感をなすならむ。定めし故郷の空を望み、歸心萬里、矢の如くなる可し。老いませる父母の念頭、常に思に堪へざるもの…………。

夜風露を含みて、坐ろ身にしむ。仰げば、月は浮雲に鎖され、孤雁南より月影をかすめて、西に翔り行きぬ。

（頭評）客なる「兄」を今少しはたらかして、結末の道具立てにも用ひたき心地す。

○落葉集

岩代若松市大町三四豎　田中紫女

（一）

秋來ぬと眼にはさやかに見えねども、千町の小田に稲の波高う、濕り冷き朝風のいみじき薫りにも、それと知られて心地よく、初袷の袖の長うち敷きて、露の玉置く庭石に倚り、やゝに痩せ行く朝顔垣の花を數へて、日記に記しぬ。

（二）

紅の紐は切れ、萠黄の色は褪せたれど、戀しき我が小蚊帳たゝむ手も、來ん年までの別れと思へば、何となう物憂くて淋しく、過ぎにし夏の片身とてか、螢の骸一つ出でければ捨てんもをしく、其の儘に仕舞ひやりぬ。

（三）

落し水に水かさまさりて、捨石も見えずなりし我が垣根のせゝらぎづたひ、畫を鳴く尾曳雞の雄と雌、飛び行く蟲を逐ひ迫りて、低う垂れし白萩を搖るがせば、水面に降る散花の雪、それもしばしにて流れ去り、後は赤蜻蛉のをり〳〵、岸の枯蘆をおとづるゝのみ。

（四）

九十九曲の山路を薪脊にして歸り來る乙女の、顔は夕日を浴びて赤けれど、涼しき眸に無限の歡びは現れたり、重げに提げたる手籠の中を、そと見れば、胡桃に栗に山葡萄、珊瑚に似しは豆柿とやら、あゝ數々の山土産、老いたる家母への心盡しとてか、さりとは床しき心かな。

(五)

さらぬだに淋しきものを秋の夕、千草に狹き畦道を、吊旗おし樹て、送る柩に、哀れを添ふる遠寺の鐘の音、柩の主はそも誰ぞ、國の爲劍を取つて滿州の野に斃れし人には非ざるか、さあらんには、其の妻子の思ひや如何にと、思はず涙を下す時、川風の一しきり、尾花の末を渡りて、我亂れ髮に戰ぐ。

（雨評）多少の趣味ある落葉集に候

○さつまいも

福岡　櫻溪女史

『只今』と挨拶して、兄上は、部屋に入りて、中學の制服ぬぎすて、づぼんは膝のほとりにしかとしめ、紺絣の筒袖裾はし折りて、はだしとなり鍬を肩に、籠さげて、畑にいでましぬ。時に急ぐ晩鴉の三ッ、四ッ、二ッ夕餉の烟ほそう縫ひて消え行く頃、兄上は歸りきましぬ。籠さしのぞけば、こぶし大のさつまいもなり。『豊さん、これは僕の丹精をこめて作つたものだよ。アハ、、、、』『オホ、、、、おいしさうです事ね。』うちつどひて、樂しき夕餉のまとゐにつきぬ。やがてむされたるさつまいもは、各の膳に上りぬ。兄上『父樣、母樣、豊さんも、どうぞ召し上つて下さい。これは僕が丹精をこめて作つた、所謂、これは僕の最愛の孃です。』『オホ、、、兄樣お嫁さんは、いついらつしやつて。』『そりやあ、これは女子の最好物だらう。だから、おいもは、女性だ。そして僕の丹精をこめて作つたものだから、とりもなほさず、僕の令孃さ。』アハ、、、、オホ、、、、』と、一時に起る笑ひ聲。

父上、母上、兄上みな箸とり給ひぬ。妾もとりぬ。兄上の孃ちやんと思へば、おいしさも一しほなり。父上『鐵夫。どうも結構だな。』母上『ほんとうに結構ですこと。』妾『兄上樣おいしうございますことね、妾初ものですわ。』兄上

　ほめられて嬉しさうなり薩摩芋。

又々どつと笑ひぬ。

『お父樣世の中に百姓位、愉快なものはありませぬね。私は、漸く田園生活の妙味を、解しました。からだの爲にもなるし、愉快ではあるし、殊に、作物の成長するのが、どんなに樂しいか知れませぬ。えゝ、僕も嫌ひでしたが、今はもうこんな樂しいものはないと思ひます。だから、中學卒業したら、農科大學にいれて戴きたいのです。』父上、母上共に頼もしげに、眼を兄上

に注ぎ給ひぬ。妾もほゝゑみつゝ、兄上を見上ぐれば、さきつほどより、妾に眼注ぎ給ひし兄上、『豊さん何が嬉しいの。』『妾もね、兄様におてつだひしようと思ひましたら、嬉しくつてたまりませぬの。』『アハヽヽヽ一時に、二人のお百姓が出來たかね』と、父上どつと笑ひ給へば、母上、兄上、妾までも笑ひ興じぬ。

（雨評）此の文の味ひも、何んとなうまつま卒にかよひたる心地す。

○海の夕

美作英田郡古町一七二〇　高畑みち子

蝉の子が白羽の征矢を引きしぼつて切つて放ちし夕立の雨、などりなう霽れて、露ちる若葉の頷ゆかしき日の夕なりき。われは里川堤づたひ、せゝらぎ流るゝ水音に、微吟の聲をあはせ、ほのかに匂ふ玉藻の香を、かろく袂にはらはせて、薩摩潟紫匂ふ錦江の海に艤ひしぬ。

清朗の風徐ろに夕凪の海面を渡り、藍碧に紫を混じたらん如き波は、遠く霞にむせびかへり、深宮の帷をかゝげられ、紅の裳を翻しつゝ、將にくれなんとする夕の空に別れを告げ給ふ日の女神は、樂しげなる笑をたゝへ、ふさ〳〵しき黄金の髮を、さゝ波の上にうつしたまへりと見しは、一時。やゝに迫り來る暮の色に、さしもはなやかなりし夕照も、褪せゆきて、一抹の白染畫けるやうにたなびけり。舟はやう〳〵進みて、今や櫻島の翠嵐を、左に望みつゝ走るなり。煙波渺茫として風光頗る蒼然、扁舟依稀として揖歌ゆるく去來し、遠帆宛がら坐するが如く、近帆は將に朦朧夢の如き島かげに消えなんとす。野薔薇色にそめられたる雲のたゝずまひ、崖上に並立つ松のけはひ、そは西の國の繪師がものせし南歐の夕の海にも似通ひたらむ麗明の風色、幽幻の眺矚。いひ知らぬ美妙の思ひの、わが感興の絃にふれて、微妙き聲の胸裡に鳴りいづるをおぼえつ。

やがて幽暗の帷は深く海にたれ罩めて、泛べる白帆も島山の影も、幻の如く黝ずみゆき、淡彩雅墨の畫の如き大島燈臺の上、夕づゝの光り稚きゑみを洩しつ。大氣沈靜、四顧閑寂、たゞ舷側に打ち寄する男波女波が、永劫のひめごと囁くのみ。

あゝ沈みゆく夕日の影よ。

そはたへにいみじき聖才が、前途にかゞやく一縷の光明を仰ぎ、神世ながらの樂土を慕ひ、胸には溢るゝ慰安のかげをたゞへ、心しづかにはゑある鹿島立する

終焉のさまにも似たらずや。かしこみの心ゆくりなく起り、敬虔の思ひいつしかと、身はこれ俗界の人ならで、おもむろに偉大崇高なる理想の郷に遊び、そゞろに詩美の幻境にさ迷ひぬるよりから、船頭が謳ひ出す欵乃の聲に驚きつ、われに歸りて頭を上ぐれば、あな美しの此の一瞬よ。一分、二分、三分、今やまた〳〵大海を呑み了りし十六夜の月は、溢るゝごとき平和の光りを、下界に投げつ。澄徹水の如き清空には、星斗點々として、銀砂を鏤めたらむやう。淡烟ほのかに立ち罩めたる波の上に、やうに落ちゆく死の陰よりよび醒まされしごとく、蒼茫たる夜氣につゝまれて照らされ出でし島山のかげ、さながら夢に見る小仙寰。あゝ優麗の夜よ、典雅の夜よ。

舟は今この雪ならぬ銀世界を走るなり。棹は波上の月を碎き、舳は海中の天を穿ち、櫓痕一路金龍銀蛇を走らせつゝ……。月は早や高うなりぬ。夜網の篝火、汽船の舷頭など、夾綴に多く彼方此方に漂ひ出でつ、何人の風流兒ぞ、百合さく岸べに身を倚たへて、銀笛を吹きすさぶは。あゝ其笛のねよ、松に響き波に通ひて、泣くが如く訴ふがごとく……。いかに餘韻ある月明の夜なるぞ。

既にして大戸濱に着きければ、こゝにて舟を捨てつ。沙白き濱邊の渚傳ひに、水の如き滿天の清光に浴しつゝ歩む。顧れば、舟路は宛も睡れるが如く、松籟の清韻長しへに夜の賦を謳ふに似たり。舟は既に漕ぎ出でたるらし、『高島沖から帆をまき上げて……』と美音を絞る船頭の節のみぞ、櫓の音に和して細く……遠く……更にまた幽かに。

（雨評）多少の風致は見えたり。

○夕立

大阪府河内國　山田女史

朝まだきより空はくもりて、そよ吹く風のおとなひもなく、折々聞ゆる鳴神のおとに、いよ〳〵暑さのまさるのみなれば、所狹き伏屋には何かは堪へん、さながら甑の中に蒸されたらんかごとく、あな暑し、あなくるしとて、端近うたち出づれば、かれ〳〵の遣水に庭の魚の打あへき、梢にしげき蟬の聲、なえふしたる庭の木草など、いとゞいぶせさのまさるのみなれば、扇の風、氷水なども、無とくになりゆきぬ。

かくてあらんよりは、契りおきつる麻布の里の友かり

に注ぎ給ひぬ。妾もほゝゑみつゝ、兄上を見上ぐれば、さきつほどより、妾に眼注ぎ給ひし兄上、『豊さん何が嬉しいの。』『妾もね、兄様におてつだひしようと思ひましたら、嬉しくつてたまりませぬの。』『アハヽヽヽ、一時に、二人のお百姓が出來たかね』と、父上どつと笑ひ給へば、母上、兄上、妾までも笑ひ興じぬ。

（雨評）此の文の味ひも、何んとなうるつま琴にかよひたる心地す。

○海の夕

美作英田郡古町一七二〇　高畑みち子

神の子が白羽の征矢を引きしぼつて切つて放ちし夕立の雨、なごりなう霽れて、露ちる若葉の韻ゆかしき日の夕なりき。われは里川堤づたひ、せゝらぎ流るゝ水音に、微吟の聲をあはせ、ほのかに匂ふ玉藻の香を、かろく袂にはらはせて、薩摩潟紫匂ふ錦江の海に饑ひしぬ。

清朗の風徐ろに夕凪の海面を渡り、藍碧に紫を混じたらん如き波は、遠く霞にむせびかへり、深宮の帷をかゝげられ、紅の裳を翻しつゝ、將にくれなんとする夕の空に別れを告げ給ふ日の女神は、樂しげなる笑をたゞへ、ふさ〳〵しき黄金の髮を、さゞ波の上にうつしたまへりと見しは、一時。やゝに迫り來る暮の色に、さしもはなやかなりし夕照も、褪せゆきて、一抹の白朶聳けるやうにたなびけり。舟はやう〳〵進みて、今や櫻島の翠嵐を、左に望みつゝ走るなり。煙波渺茫として風光頗る蒼然、扁舟依稀として揖歌ゆるく去來し、遠帆宛から坐するが如く、近帆は將に朦朧夢の如き島かげに消えなんとす。野葡萄色にそめられたる雲のたゝずまひ、崖上に並立つ松のけはひ、そは西の國の繪師がものせし南歐の夕の海にも似通ひたらむ麗明の風色、幽幻の眺矚。いひ知らぬ美妙の思ひの、わが感興の絃にふれて、微妙き聲の胸裡に鳴りいづるをおぼえつ。

やがて幽暗の帷は深く海にたれ罩めて、泛べる白帆も島山の影も、幻の如く融ずみゆき、淡彩薄墨の畫の如き大島燈臺の上、夕づゝの光り稚きゑみを洩しつ。大氣沈靜、四顧閑寂、たゞ舷側に打ち寄する男波女波が、永刧のひめごと囁くのみ。

あゝ沈みゆく夕日の影よ。

そはたへにいみじき聖才が、前途にかゞやく一線の光明を仰ぎ、神世ながらの樂土を慕ひ、胸には溢るゝ慰安のかげをたゞへ、心しづかにはえある鹿島立する

終焉のさまにも似たらずや。

かしこみの心ゆくりなく起り、敬虔の思ひいつしかと、身はこれ俗界の人ならで、おもむろに偉大崇高なる理想の郷に遊び、そゞろに詩美の幻境にさ迷ひぬるそりから、船頭が謳ひ出す欸乃の聲に驚きつ、われに歸りて頭を上ぐれば、あな美しの此の一瞬よ。

一分、二分、三分、今やまた〳〵大海を呑み了りし十六夜の月は、溢るゝごとき平和の光りを、下界に投げつ。澄徹水の如き淸空には、星斗點々として、銀砂を鏤めたらむやう。淡烟ほのかに立ち罩めたる波の上に、やうに落ちゆく死の陰よりよび醒まされしごとく、蒼茫たる夜氣につゝまれて照らされ出てし島山のかげ、さながら夢に見る小仙寰。あゝ優麗の夜よ、典雅の夜よ。

舟は今この雪ならぬ銀世界を走るなり。棹は波上の月を砕き、舳は海中の天を穿ち、棹痕一路金龍銀蛇を走らせつゝ……。月は早や高うなりぬ。夜網の篝火、汽船の舷頭など、水際に多く彼方此方に漂ひ出てつ、何人の風流兒ぞ、百合さく岸べに身を横たへて、銀笛を吹きすさぶは。あゝ其笛のねよ、松に響き波に通ひて、泣くが如く訴ふがごとく……。いかに餘韻ある月明の夜なるぞ。

既にして大戸濱に着きければ、こゝにて舟を捨てつ。沙白き濱邊の渚傳ひに、水の如き滿天の淸光に浴しつゝ歩む。顧れば、舟路は宛も睡れるが如く、松籟の韻長しへに夜の賦を謳ふに似たり。舟は既に漕ぎ出てたるらし『高島沖から帆をまき上げて……』と美音を絞る船頭の節のみぞ、櫓の音に和して細く……遠く……更にまた幽かに。

（評） 多少の風致は見えたり。

○夕立

大阪府河内國　山田女史

朝まだきより空はくもりて、そよ吹く風のおとなひもなく、折々聞ゆる鳴神のおとに、いよ〳〵暑さのまさるのみなれば、所狹き伏屋には何かは堪へん、さながら飯の中に蒸されたらんかごとく、あな暑し、あなくるしとて、端近うたち出づれば、かれ〳〵の遣水に底の魚の打あへぎ、梢にしげき蟬の聲、なえふしたる庭の木草など、いとゞいぶせさのまさるのみなれば、扇の風、氷水なども、無とくになりゆきぬ。

かくてあらんよりは、契りおきつる麻布の里の友かり

たづねて、石川の邊の舟逍遙もと、衣あらためて出て立つ。

道すがら暑さいよ／＼はげしきに、例の神の音なひそはりゆくと思ふほどこそあれ、さと吹きはらふ風に、はら／＼と袖にかゝれるは、雨なり。

あはれ、しばしか程に、かくも天氣のかはるものかと見る中に、いよゝ近くやなりにけん、ひらめく電光烈しくて、どよめく音いとゞおどろしければ、かたへの家の門へと走りつきぬ。

からうじて光りもすらぎ、鳴く音も遠うなりぬ。

空はやう／＼雲はれゆきて、吹く風いと涼しう、夕日の影ほのめくばかりになりぬ。

今は立ち出んとて見れば、衣はいたくぬれにぬれたり。

　　はだへまでとほりてぬれぬ夏衣
　　　麻布の里の夕だちのあめ

しばしが程に、道もあしくなりぬ。衣はぬれて友かりゆかんも、便あし。かくては家にあらんかた、中々に勝りたらましをと、くやめど甲斐なし。

よし、このぬれ衣は雨にこそおほすべけれと、ひとりごちて、石川橋のたもとにくるほど、いよ／＼涼しくて、衣手寒きばかりになりぬ。

秋やかへりてなど杉の下陰ならねど、口ずさまれて、まことゝゝをこそ立ちはなれ難かりしが。

　　夕立のふる川の邊のあたりとて
　　　ゆふだきに秋の風はふきけり

(雨評)　今一層の文にて候。

○逍遙

堺　金澤しぐれ

東の川の堤緣を北へ、些少かな石橋を渡つて、畔路の草を分けて、東へ行けば、前程、晴れたばかりの雨時は、未だ露を亂して、裾は、擦るやう。

高野鐵道の孤燈の光りは、力なく、黑い千町田に、投げて居る。何所からともなく、吹く風は、黑い稻の葉に、波を作らして、衣と肌との、間を撫てる快よさ。

今、雲間から、出かけた、三日月の光て、山も、村も森も、幽かに、墨繪のやうに、見えて居る。

高野線を横切つた所は、少し小高い所なので、野なれば、山陽の山脈も、淡路島も、血沼の海も、陵も、金剛山も、唯一目て、見ゆる所なのてある。西を向へば、少し灰色を帶びた雲は、刻、一刻と黑ろさが増して、輝燭、尾影が、北に、東に。

雲を除けて、瞬く星が増す毎に、虫の聲も増してくる。小川を覗て居る、野菊の蓋から、蛙の飛ぶのも見える南北一里の、我堺市は、眞黑に不規則な、線を取つて市役所の屋根も、寺も、塔も、松も、高く、低く、恰も、一枚の黑い紙を、亂切して立てたやうに、森から林にまで、續て居る。

紡績の煙突は、聳えて、今を盛に、黑い煙を吐いて、黑い町の上を掠めて、左から眞一文字に、長く。

短歌

佐々木信綱選

天

○

つよきこと言ひて別れし故郷の
　たらちね戀ひし秋の夕暮

下野國下都賀郡野木村字友沼　木村しずゐ

〔評〕故郷有母秋風涙といへる古き詩の句も思ひ出されてかなしき歌。

地

○

はなちやりし鳩のゆくへを眺めやる
　人うら若し白萩の窓

越の大布川の邊にて　ゆき子

〔評〕うつくしき歌。

人

○

鹿笛に吹きささそはれてなきいでし
　まことのこゑを哀れとぞおもふ

下谷池ノ端茅町二ノ三　辻なほ子

〔評〕あはれのうた。

秀逸

○ 弘前市　佐野みどり

堪へ兼ぬる思抱きて夕ぐれの
　戸に倚る袖を秋の風吹く

○ 南總　美代子女史

錦着てかへらんといひし兄君の
　おくつきどころ紅葉散るなり

○ 千葉縣　小川文子

鐘の音もくもりかち黄昏れて
　小雨しづけき葉櫻の宿

○ 津市　坂ふみ子

窓あけて機織る少女歌ほそし
　萩の花さく籬かげの家

○ 豐後　平山紫泉女

何となく君を戀ひなく此夕べ

雨にくづるゝ耕牡丹の花　能登　秋花女史

○
萩小路踏み行く人に傘かして
行え見送る秋の夕暮　出雲　岩井じん子

○
さりげなく水にうつせし我が姿
あまりにやせて春なそがれぬ　一宮　桂子

○
子供らが魚釣る小舟すぎゆきて
藻の花ゆらぐ里川の水　越後　伊與部千草子

○
夕霧に胸の秘め歌低う踊して
佇む森に百合の香高き　徳島縣　大久保桂子

○
音たてし松の實落つる谷の堂
夕の雨の人いたまする　本所　井口いね子

萩
ふる里の古きまがきの萩が花
いかに咲きてかわれを待らむ　京橋　黒ゆり子

○
山門を閉ざせるまゝに秋更けて
小萩こぼるゝ荒れ寺の庭　荏原郡　西野春世

○
四つ手に小屋雨に破れて人居らず
芦の花さく晩れ秋の風　遠江　静枝

○
病む母に藥すゝむるま夜中を
庭の芭蕉に秋の雨ふる　千葉縣　關谷たけ子

○
別れをば惜みてなきし松かげに
唯一人たちて君をしそ思ふ　信州　岩間花子

○
わが歌に月の宮人下り來て
そとのぞきます白萩のやど

●
つるくさに庵の小路とざゝれてわれ一人居の夕べ雨ふる　上毛　小網女史

●
秋花の小野ふみ分けて來ませ君月夜よろしき鈴虫の聲　上總　林露紅

●
琵琶法師秋の夕を杖とめて胸にしみ入る虫の聲きく　豊後　中内露子

●
東の遠野流るゝ彩雲にわが背の歌の美はしき秋　栃木縣　菅谷よしゑ

●
年わかき尼が讀經の聲たえて御室しづけき夕ぐれの雨　茨城縣　外山しん子

●
白鷗の小笹かたげてならびゐる雨のおばしま紅ちるなり　陸中　鼠澤奕江子

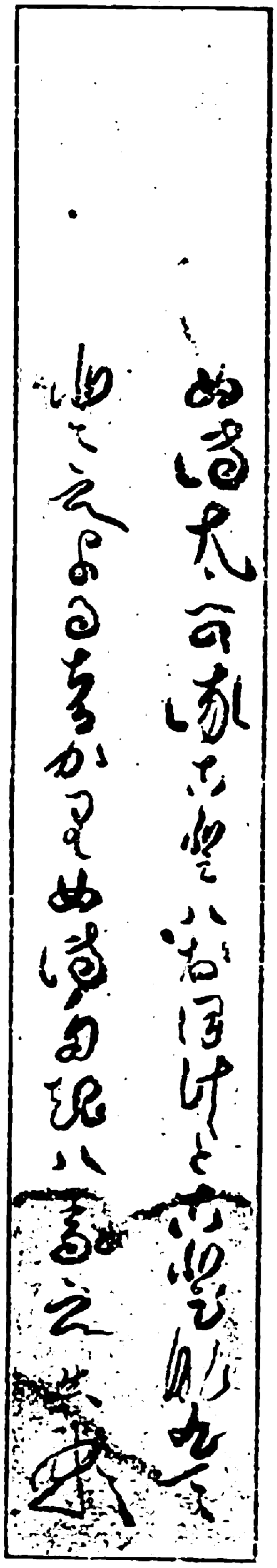
春水
青柳の糸より染むる里川の水瀬の色そ春深くして　佐賀　野　菊

●
葉をへて學びの庭を去るその日うれしくも亦名殘の惜しき　陸前　小野寺はる

初秋の月
楓の葉の一葉二葉は散りそめし頃より見るゝ三日月のかげ　宮城縣　さた子

●
さよ千鳥枕に近く音づれてねざめさびしき濱の上宿　福岡　園島幽子

黒川文學博士筆



●
果てしなき小川ながるゝ浮きくさのとじめもあへぬ我思いかな　常陸　河原井操

曉の月
とくなきてのこんの月をながむればしばしが程は神の代にして　長野縣　池田和代子

●
老ましゝ母を扶けて朝な〳〵神詣でせし昔こひしき　上毛　花はちす

●
鳥の子を數ふる窓に身をよせて風ぞせまる夕雲を見る　弘前　佐野てる子

●
み手とりて何とわかれのことの葉もなき夜かなしき虫のこゑ〳〵　近江　鈴木すみれ

病む母のはかなくなりし秋の夜を秋海棠に小雨そぼふる　信濃　神津貞子

●
語る人もなき身の悲しさをしる人ぞなき秋の夕暮　岐阜　千葉式子

●
月今宵戀しき君と手を取りて二人さまよふ松原小道　信濃　川口ちか子

●
夕ばえの流れてもゆるいさゝ川妹は菜あらひ背は鍬を洗ふ　宮城縣　齋藤たまな

●
美くしや月はみ空に萩は地によそへる桔梗に露しら玉の如

[illegible]　奈良　眞清子

●
秋萩に臥せるを見ればいかり猪も飼ひ馴すへく思はるゝ哉　茨城縣　秋山暦子

●
京へ三里旅人憩ふ掛茶屋の谷川添に白百合のさく　東京　柳町さかえ子

●
霧淡き片山里の花の夕暮にひとりの友おもふかな　津　山田ひろ子

●
をちこちに鈴虫啾ふすゝきはら夕べ淋ひしく秋の雨ふる　千葉　竹園女史

●
離りて幾日もあらぬ親の墓に誰がたむけたる桔梗の花　させほ　横山汎愛子

●
たひころもたびかされても思ふかなふるさとの母ふるさとの山

訪はんといひし友の過ぎに
たちついつしづ心なく待わぶをつれなき君よとく訪ひませな　下谷　太田あきつ

折にふれて
うれいあるむれをつゝみて秋の夕やめる兵士のいくさかたりきく　小石川　荻野　蘭子

●

冴え渡る月に心や殘るらん曉かけて郭公鳴く　松江　蒲生　敬子

湖上の月
河北潟戸吹く風の靜まりて幾重ともなる波の上の月　加賀　三井　棠園

●

消ぬ深き小路わけ入る萩原や入相のかれに花こぼれたる　熊本　中村つれ子

●

月影はすゝき野十里くまもなし虫の音遠く遠くかすかに　京都　田島かほる子

虫
はし居してピアノ彈づるそば近く皆や面白きすゞ虫のこゑ　麻布　田中　櫻子

●

浜風も靜かなる夜はすみよしのうらべにむれて舞ふ千鳥哉　伊豆　尾崎方しん子

●

やるせなき身の悲しさも忘れけり情こもれる君のことばに　東京　桂　むめ子

野の夕
牧童の草笛ゆるう野に流れて小花がつゆに星はやどりぬ　長野　山櫻　花子

折にふれて
なぐさむるものもあらなん病人にせめて今宵の月をまつかな　廣島　藤本　藤枝

●

天地に二人なき子を召し出され一人老母は星に稻刈る　上總　小川　幸子

鳥
老人の眉ひそめつゝ語るなり鳥なきこうゝき事やある　常陸　太田　幸子

●

蟲啼いて川を瀨遠く更くる夜に亡き姉の雛すさび見る　山口縣　あやぎ女

●

日の本に仇なす醜草刈り積みて露の都を焼き拂らはばや　山形縣　高橋　辰子

●

星一つ紅葉に殘る鶴逍箱靜かに牛の背にねむる　廣島　中村　東雲

●

虫のねのたえまをわたるそよ風に笛の音ゆれて月上りけり　山口　白上ゆく子

●

前庭の木の葉は散りて秋老いて小さき胡蝶の力なく飛ぶ　尾張　入　重子

●

から車ひきゆく車夫の影やせておく霜さむき冬の夜牛かな　紀州　保田　愛子

夕顔
賤が家のまがきに咲ける夕顔に白玉やどる夕まぐれかな　廣島　深　母

秋の夜
時めきし大臣が館の跡ふりて萩の影に虫なきしきる　岩代　寺島　千代

●

秋風の今所にも立ちぬ奥羽城をうつむ落葉に夕日影赤き　岩代　伊藤よし子

他郷の秋
秋の夜牛古里を見し夢さめてはるけき汽車の音もかなしき　麻布　おうは

●

詩ならず物思ひ兇るおばしまや四夕榮に黒き塔見る　備中　濵田　郁子

●

七峰に雄鹿のなく音あとたえて眞水にうつる秋の夜の月　大阪　貫島　春子

●

ほろ〳〵と散るやま萩のつみくみにこひしき友におとつれやせん　相摸　大谷津峰子

折にふれて
身をからちありし昔を忍ぶれば涯める月夜もくもりけるかな　奈良　秋　子

●

うら若き尼の行くなる萩小道靜づかに月の木の間洩れ來る　美濃　下川　政子

●

秋の夜の窓打つ風の音たえてさびしさもらす鈴虫の聲　磐城　原田　若月女史

戀の歌の中に
君よきみ知るやしらずや我かこゝろいひいてかれてあはれとはみよ　名古屋　原田　こと

●

我がせこが君に誠をさゝげつゝ入阪の潮路の舟出しにけり　信濃　池田かい子

●　堺　金澤しぐれ
露ふかき恨をそへて草原の片影月に小男鹿の啼く
●朝霧　上毛　糸柳女子
見渡せば峰のみ晴れて山里はまだ消殘る秋のあさぎり
●　淬　山田いづみ女史
流りし小館小鳩を河になげてはかなく消ゆるうたかたを見る
●閑庭虫　富山　長瀬歌子
さゝかにの糸引庭の夕月夜はたなる虫の聲もしつけり
●　廣島　えい子
一人子の戰にうせし秋の夜を入拾の銘に笑み分たすや

故勝伯令嬢　妙子筆



●　秋田　清子
夕榮の雲恐ろしき川瀬の場さびして散る柳散
●　廣島　荒木榮子
天の秋色塊の秋聲くれて晩鐘に二十の餘御園こひて泣く
●赤心報國　大阪　しら浦
君かため命を捨てしますらをのあかき心は千代に照るらん
●　神奈川　篠原ふぢ子
山淡く月まだ出てぬ波白きなぎさをいそぐ旅僧一人
●　岩代　服部良子
夕つゞのほゝ笑み纒う眞柴垣虫の音ながら秋の夜ふけぬ
●　千葉　小川ちくし女

忍びあひし戀ゆるされて嫁ぐ今日嬉しくもまた悲しくもあらず
●　上總　すみれ
露をふむ心地こそすれ萩のはのそよとてらする秋の初風
●　千葉　さゝなみ女
桃の花風に散しく賤が家に絹糸ひく姿い日れもす
●　秋田　清子女史
籠さげて蹈ゐ賤女が宿ならん花野つゞきに夕烟たつ
●　千葉　みどり子
虫の音にいつか園生の夜はふけてともしびゆらぐ渡殿の風
折にふれて　甲府　榮竹女史
千町田の垂穗の稲に月落ちて秋風寒し山の下庵
●　豐後　平山龍子女史
何となく君が喚ぶらん心地して出づれば暮の鐘の音細き
●　秋田　美佐子
曉の女の花籠さげて露深き田圃一里を唄ひくるかな
●　麹町　増田きく
天地に我れひとりすむ想ひかな母が御墓にぬかづく身には
寫眞　大阪　高濱ひで
寫し得る影きゆるとも壯夫か赤きこゝろは千代につたへむ
●　大阪　つゆ子
富かんに氣高き姿汚さまし歌ふに路なき花の少女子

雨にくづるゝ緋牡丹の花　能登　秋花女史

○

萩小路踏み行く人に傘かして
行え見送る秋の夕暮　出雲　岩井じん子

○

さりげなく水にうつせし我が姿
あまりにやせて春なそがれぬ　一宮　桂子

○

子供らが魚釣る小舟すぎゆきて
藻の花ゆらぐ里川の水　越後　伊與部千草子

○

夕霧に胸の秘め歌低う誦して
佇む森に百合の香高き　德島縣　大久保桂子

○

音たてし松の實落つる谷の堂
夕の雨の人いたまする　本所　井口いね子

萩

ふる里の古きまかきの萩が花
いかに咲きてかわれを待らむ　京橋　黒ゆり子

○

山門を閉ざせるまゝに秋更けて
小萩こぼるゝ荒れ寺の庭　荏原郡　西野春世

○

四つ手に小屋雨に破れて人居らず
芦の花さく晩れ秋の風　遠江　靜枝

○

病む母に藥すゝむるま夜中を
庭の芭蕉に秋の雨ふる　千葉縣　關谷たけ子

○

別れをば惜みてなきし松かげに
唯一人たちて君をしぞ思ふ　信州　岩間花子

○

わが歌に月の宮人下り來て
そとのぞきます白萩のやど

●

つるくさに庵の小路とざゝれてわれ一人居の夕べ雨ふる　上毛　小鄉女史

●

秋花の小野ふみ分けて來ませ君月夜よろしき鈴虫の聲　上總　林霞江

●

琵琶法師秋の夕を投とめて胸にしみ入る虫の聲きく　豐後　中内蝶子

●

東の遠野流るゝ彩雲にわが背の歌の美はしき秋　栃木縣　菅谷よしゐ

●

年わかき尼が讀經の聲たえて御室しづけき夕ぐれの雨　茨城縣　外山しん子

● 白妙の小百合かたけてならびゐる雨のおばしま紅ちるなり　陸中　黒澤奘江子

春水

● 青柳の糸より染むる里川の水瀬の色そ春深くして　佐賀野　菊

● 業なへて学びの庭を去るその日うれしくも亦名残の惜しき　陸前　小野寺はる

初秋の月

● 桐の葉の一葉二葉は散りそめし隙より洩るゝ三日月のかげ　宮城縣　さた子

● さよ千鳥枕に近く音づれてねざめさびしき浪の上哉　福岡　園島静子

● 病む母のはかなくなりし秋の夜を秋海棠に小雨そぼふる　信濃　酔津良子

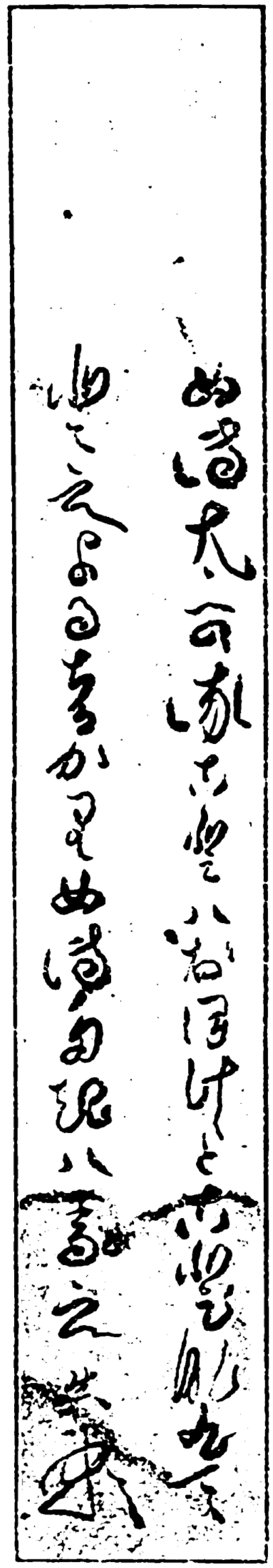
● 語る人もなき身の悲しさをしる人そなき秋の夕暮　岐阜　千葉弐子

● 月今宵懇しき君と手を取りて二人さまよふ松原小道　信濃　川口ちか子

● 夕ばえの流れてもゆるいさゝ川妹は菜あらひ背は飯を洗ふ　宮城縣　齋藤たまを

● 美くしや月はみ空に萩は地によそへる桔梗に露しら玉の如　霧　奈良　淸子

黒川文學博士筆



● 果てしなき小川ながるゝ浮きくさのとじめもあへぬ我思いかな　常陸　河原井操

暁の月

● とくおきてのこんの月をながむればしばしが程は神の代にして　長野縣　池田和代子

● 老ましゝ母を扶けて朝なく詣でせし昔こひしき　上毛　花はらす

● 島の子を数ふる窓に身をよせて愚ぞせまる夕霞を見る　弘前　佐藤てる子

● み手とりて何とわかれのことの葉もなき夜かなしき虫のこゑく　大阪　西部薫子

● たひころもたびかされても忍ふかなふるさとの母ふるさとの山　遠江　鈴木すみれ

● 秋萩に臥せるを見ればいかり猪も飼ひ馴すへく思はるゝ哉　茨城縣　秋山鏖子

● 京へ三里旅人憩ふ掛茶屋の谷川添に白百合のさく　東京　柳町さかえ子

● 都遠き片山里の花の夕暮にひとりの友おもふかな　津　山田ひろ子

● をちこちに姉虫歌ふすゝきはら夕べ淋ひしく秋の雨ふる　千葉　竹薗女史

● 葬りて幾日もあらぬ数の墓に唯がたむけたる桔梗の花　させほ　横山汎受子

短歌

訪はんといひし友の遇きに
たちついつしづ心なく待わぶをつれなき君よとく訪ひませな　下谷　太田あきつ

折にふれて
うれいあるむれをつゝみて秋の夕やめる兵士のいくさかたりきく　小石川　荻野靜子

●
冴え渡る月に心や殘るらん曉かけて郭公鳴く　松江　蒲生敬子

湖上の月
河北潟戸吹く風の靜まりて幾重ともなる波の上の月　加賀　三井栄園

●
消め深き小路わけ入る萩原や入相のかれに花こぼれたる　熊本　中村つれ子

●
月影はすゝき野十里くまもなし虫の音遠く遠くかすかに　京都　田島かほる子

虫
はし居してピアノ奏づるそば近く謡や面白きすゞ虫のこゑ　麻布　田中梅子

●
浜風も靜かなる夜はすみよしのうらべにむれて舞ふ千鳥哉　伊豆　尾崎方しん子

●
やるせなき身の悲しさも忘れけり情こもれる君のことばに　東京　桂　むめ子

野の夕
牧童の草笛ゆるう野に流れて小花がつゆに虫はやどりぬ　長野　山櫻花子

折にふれて
なぐさむるものもあらなん病人にせめて今宵の月をまつかな　廣島　藤本藤枝

●
天地に二人なき子を召し出され一人老母は星に稲刈る　上総　小川幸子

鳥
老人の眉ひそめつゝ語るなり鳥なきこうゝき事やある　常陸　太田幸子

●
蟲啼いて川を瀬遠く更くる夜に亡き姉の雛すさび見る　山口縣　あをやぎ女

●
日の本に仇なす穢草刈り積みて露の都を焼き拂らはばや　廣島　中村東盤

●
星一つ紅葉に殘る鷺道絡靜かに牛の背にれむる　山口　白上ゆく子

●
虫のれのたえまをわたるそよ風に笛の音ゆれて月上りけり　尾張　入直子

●
前庭の木の葉は散りて秋老いて小さき胡蝶の力なく飛ぶ　紀州　保田愛子

●
から車ひきゆく車夫の影やせておく霜さむき冬の夜半かな　廣島　深母

夕顔
賤が家のまがきに咲ける夕顔に白玉やどる夕まぐれかな　岩代　寺島千代

秋の夜
時めきし大臣が館の跡ふりて萩の影に虫なきしきる　岩代　伊藤よし子

●
秋風の今所にも立ちぬ奥津城をうつむ落葉に夕日影赤き　麻布　おうは

他郷の秋
秋の夜牛古里を見し夢さめてはるけき汽車の音もかなしき　備中　濵田郁子

●
詩ならず物思ひ凭るおばしまや四夕栄に黒き塔見る　大阪　貴島春子

●
七峯に雄鹿のなく音あとたえて眞水にうつる秋の夜の月　相模　大谷津峰子

●
ほろ〳〵と散るやま萩のつみくみにこひしき友におとつれやせん　奈良　秋子

折にふれて
身をからちありし昔を忍ぶれば涙める月夜もくもりけるかな　美濃　下川政子

●
うら若き尼の行くなる萩小道靜づかに月の木の間洩れ來る　磐城　原田若月女史

●
秋の夜の窓打つ風の音たえてさびしさもらす鈴虫の聲　名古屋　原田こと

戀の歌の中に
君よきみ知るやしらずや我かこゝろいひいてかれてあはれとはみよ　信濃　池田かい子

●
我がせこが岩に灘をさゝげつゝ入顔の潮路の舟出しにけり

露ふかき很をそへて草原の片影月に小男鹿の啼く　金澤　しぐれ

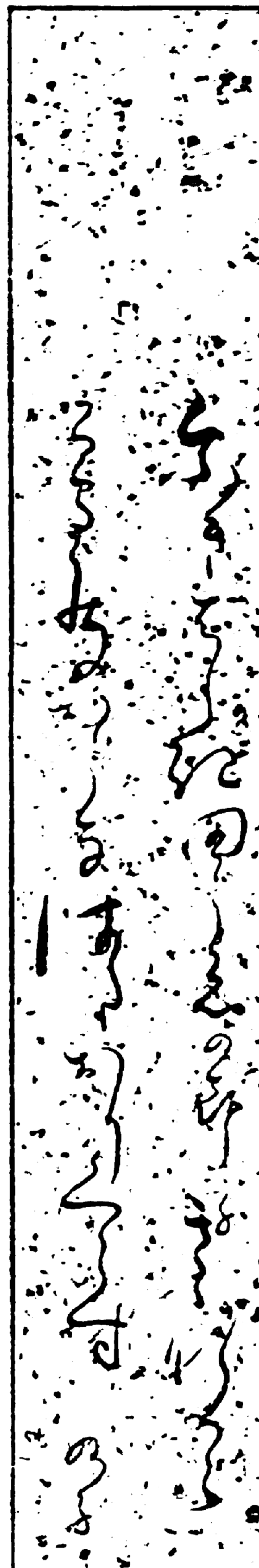
朝霧
見渡せば峰のみ晴れて山里はまだ消殘る秋のあさぎり　上毛　糸柳女子

造りし小舘小舩を河になげてはかなく消ゆるうたかたを見る　山田いづみ女史

閑庭虫
さゝかにの糸引庭の夕月夜はたをる虫の聲もしつけり　富山　長瀬啟子

一人子の戰にうせし秋の夜を入捨の賭に笑み分たすや　廣島　えい子

故伯爵令嬢
妙子筆



夕暮の雲恐ろしき川添の堤さびしく散る柳散　秋田　清子

天の秋色境の秋聲くれて晚鐘に二十の憐御墨こひて泣く　廣島　荒木榮子

赤心報國
君かため命を捨てしますらをのあかきむは千代に照るらん　大阪　しら雄

山淡く月まだ出てぬ波白きなぎさないそぐ旅僧一人　神奈川　篠原ふぢ子

夕つゞのほゝ笑み笑う亂栄垣虫の音ながら秋の夜ふけぬ　岩代　服部良子

忍びあひし戀ゆるされて嫁ぐ今日嬉しくもまた悲しくもあらず　千葉　小川ちくし女

露をふむ心地こそすれ萩のはのそよとてらする秋の初風　上總　すみれ

桃の花風に散しく賤が家に糸ひく夜い日れもす　千葉　さゝなみ女

籠さげて路ゐ賤女が宿ならん花野つゞきに夕烟たつ　秋田　清子女史

虫の音にいつか園生の夜はふけてともしびゆらぐ渡殿の風　千葉　みどり子

折にふれて
千町田の垂穗の稲に月落ちて秋風寒し山の下庵　甲府　榮竹女史

何となく君が喚ぶらん心地して出づれば暮の鐘の音細き　豐後　平山龍子女史

賤の女の花籠さけて霧深き田圃一里を唄ひくろかな　秋田　美佐子

天地に我れひとりすむ想ひかな母が御墓にぬかづく身には　麴町　濱田きく

寫眞
寫し得る影きゆるとも壯夫か赤きこゝろは千代につたへむ　大阪　高濱ひて

畫かんに氣高き衣汚さまし歌ふに路なき花の少女子　大阪　つゆ子

鹿の音のはたとたえて水上の松もれて來る遠砧哉　秋田　美惠子
病む姉を慰めかねて只一人淋しみ居れば暮の鐘なる　大阪　田中　靜子
ほろ／＼と萩散る夕べ静けさを野川向ふに打つ砧哉　秋田　高子
疾風
風わたる軒のいよすのさら／＼に夏なき年と思ひけるかな　日本橋　鈴木　康子
病葉
玉あられとひにし冬は夢なれや遊葉に宿る露のしら玉　伯耆　なてし子
わかれ
御手とりて御面影仰ぎてうつむきてさても別れの言の葉のなき　千葉　貞子女史
砂の上にねむりし夏ははやすぎて汐風すゞし大磯の浪　和泉　ひろ子
橄欖や小鹿の花をふくむ見えて昔床かしきクリートの島　能登　久保　かの子
山里の合歡音もなう散りはてゝ思出多き秋は來にけり　陸奥　前田　すみれ
十五夜の月を見て
秋の夜のさやけき月を見るにつけまつしのはるゝありしむかしを　麹町　長田　花枝
秋風に衣吹かせて旅僧のひとり過ぎゆく稲田中道　兵庫　宮下　みどり子
秋風に桐の一葉の水の上夕ぐれ近く小雨そぼふる　本郷　木下　久子
はつかしき人を小萩の影に見て渡りかれたる野路のさゝ川　鳥取　上山　千重子
波路遠く夕霧こめて松浦がたうすれゆくなり沖の島山　佐賀　まつら子
何事もいはじきかじと誓ひしを君のなさけのつらくもあるかな　出雲　じん子
京橋　高橋　桂子

病院に臥し給ひつる君如何に身の暇なくて訪はれぬぞ憂き
牛込　悠世子
別れてもいつか相逢ふ時あらむえにしは深し兄と妹
紅葉
筑館　白鴎女史
千尺の崖の紅葉に夕日映えて白衣の行者釣橋渡る
常州　四萠子
月見れば今日見る月は月ならで昨日見し月忍ばるゝかな
駿州　村上　節枝
戦の庭にちりしく花一ッこれぞ大和の國の光ぞ
神戸　村田　鈴子
末を遠く思にかける四疊半夜は静かに鈴虫の鳴く
折にふれて
長州　花　芳子
ふさはしと姉がほゝゑむ髪の上かざすさゆりに小蝶たはぶる
茨城　小泉　はま子
藻塩やく烟に秋の風見えて夕日静けき沖のしまやま
芝　尾瀬　青松女史
草木猶眠ると言へる眞夜中にこれの呪ひの釘は打ちけん
磐城　深山女史
姫君の琴のしらべもたえ／＼に秋の花散る秋の夕ぐれ
山形　沖　根子
澄み渡る月は昔のまゝなれど變りやすきは人の身の上
京橋　尾上　駒子
閼伽桶に沈む樒を手に取りて御墓撫づるに君御聲なき
静岡縣　ばいお
家づとになにをしてまし歸るべき時は來つるを功なき身は
磯
熊本　田中　としほ
濱千鳥一聲とほく消えゆきて磯のかなたをふなうた高し
根室　佐々木　八重
時雨さむき磯の秋をいとほしみしらぎく姫に傘まゐらする
愛媛縣　天野　八重子
いかばかり母や待つらん二年を戦のにはに僞うちし身を

新墓を照らす月影ものすごくぬかつく蟋にきり／＼すなく　越後　五十嵐美波

●この頃は空鳴き渡るかりがれの聲もさびしき秋の夕ぐれ　茨城縣　坂本ふじ

●匪浸う磯邊の波に洗はれて暮れゆく秋の雲をながめし　石見　せゝらぎ

●菊の花咲きし園べをさまよへは薫りはみちて身は天のもの　茨城　栗山松波子

●夕ぐれは月より外に汲む人の影さへ見えぬ山の谷水　相模　紫女

●限もなき今宵の月を出征の我が夫如何に詠め給はん　鳥取　萩野つゆ子

●たとふれば夕日が丘にちる紅葉風のまゝなるわが身ならずや　京都　白薔

●夕月夜ませに亂るゝ糸萩になか／＼秋の哀れをぞ知る　周防　小澤千嘉方

●末期きし病の床に過世をば御神御佛をろがみ侍ひぬ　麹町　重田靜子

●ながむればながむるまゝに朧ろなり悲し病床によむ君がふみ　能登　杉下ふみを子



大河内子爵
令妹松子筆

慰藉
夜もすがら夢も結ばずあかす夜は寢つ起きつ待つあかつきの鐘　熊本　中村さわ子

●麗しき詩吟の聲は聞へけり影は朧に月踏んで行く　大阪　田村絹枝

●朝野に身をひれふして慰安の雲に懺悔の聲のさやけき　下野　新井學子

●蘆の花流るゝ川に舟うけて哀れもふかき琵琶の歌聞く　鹿児島　河野れい

●慰めど物問ひぬれどぬかづけど答はあらじうつしゑの人　赤坂　森ふさ子

●亡き君が形見の鏡とり見れば瘦せし姿に思ひ出多き　京都　瀧子

●今日もまた九十三度の我が里をとんぼと共に燕むれとぶ　廣島縣　いさみ女

●あけくれのながめわびしき山ずみの浮世の外にしかの聲きく　長野　飯塚ぎん

●月落ちて庭の朝顏咲きにけり露のいのちを我いかにせむ　山口縣　千代子

●雨はれて梢にかゝる新月を母と見る夜のいとゞ樂しき　福岡　筑紫女

折りにふれて
神の子が誘ひましゝか秋の蝶行にしあとは夕日淋しき　豊後　むらさき

自然に對ひて　逗子濱の子
山は高く水は澄みたり其のかみの人の心もかくやありけむ

折りにふれて　はる子
山近く水亦近き此里や山吹かれて紅葉色づく

●　徳島　英子
秋風に桐の葉おつる谷さびてやめる少女のほゝ色あせぬ

野鹿　廣島　和志廣子
さらでだにあはれあつおる秋の野を笛によりくる鹿のこゑ〳〵

初秋露　福岡　石田茂子
あつき日もいつしか秋の色こめていな葉にむすふ露のすゞしさ

●　大阪市　杉田孤泉
今宵こゝにいまはのきはの父君の顔につめたき秋の夜の月

●　滋賀　辰井季子
はかなくも梢はなれしもみじ葉をうけて淋々しき白菊の花

●　大阪市　福井津留子
野に山に手づな取たる兄君はこよいいづこに旅やとるらん

朝顔　熊本　瀧谷すみ
幼子があさな〳〵のねさめにもまつ思はるゝ花の色かな

●　植西なか
曇りなく田舍旧畑をてらすまし向うのもりを出る月かげ

蝗とり　大阪市　森奈耳榮
追かけてとび立つ蝗とらばやと稲の中行く少女のすがた

勉強　神奈川　志賀つぎ子
あつめたる窓のほたるのひかりこそよをてらすべきかゝみなりけれ

折にふれて　大阪市　狩場外威子
戰ひにたふれし君のゆめさめてをさな寝顔に涙ふりかけぬ

谷　上野　堀越律子
吹きしきる風のゆくへは此處ならん紅葉にうづむ谷のしば橋

●　東京　天津子
夕暮れや赤に丹摺に野も森も映えて今宵は月もよからん

●　牛込　小島濱子
歩み遅く賣らるゝ牛の痩せ牛のゆふべさみしき秋の野をゆく

●　四ッ谷　山下宮子
罪としらてふと犯したる罪の子の罪ぞまことにうつくしき罪

折にふれて　武藏　眞藤杜宇子
山寺に墓參の人の影たえて萩の小路にまた蟲のなく

●　岐阜　山田はぎ
夜な〳〵に燈籠防ふる蟋蟀の髭切れはてゝ秋暮れんとす

●　下野　木村つゆ子
沐浴終へてぬれ髮あぐる化粧室花瓶の眞萩の風なきに散る

秋のはじめ　上毛　柳澤潤子
心なく知らでや秋を志のばましその泣く身こそ我は歎かむ

東照宮模造を拜觀して　相摸　山口春子
十四年室にこもりてたくみせし人の心の忍ばるゝかな

友垣　下總　伊佐子
山に月に飛ぬる末の幾年も同じ心で御代につかへむ

同し文壇の友に都の夏を音信まゐらするとて　京都市　石川なか子
水あみし兒等かのこりの一人二人石竹すゞし鴨川の磧

ゆく君　茨城　近津白菊
ゆく君は歸らぬ旅ときくからにむれもはり裂く心地こそすれ

●　越後　すゞしろ
あさかほの花のゑまひのうすれゆき我みの秋も思ひやらるゝ

初鴈　神田　山本光子
ぬば玉の黑井を渡る初鴈の聲きく度にめづらしきかな

●　徳島市　住友登喜子
花さかむ世をばたのしと思ひしは花散らぬまの心なりけり

満洲にゐます兄上にかわりて　秋田縣　松田せい子
武士の夢のあととふ虫の音も更けて淋しき遼陽の野原

●　秋田縣　塙主桂子
鶯の鳴く音のどかにくれそめて目にも親む野路の梅かな

●　をみな石
行末は花にほゝゑむ我ならば冷えし夕べの石はいだかじ

越後　三浦美以子
いとゞしくあはれをさそふ山の音に草ならぬわも露を宿しぬ

●

うらぼん　山梨　敏子
なき姉のみたまの前にひれふして又袖ぬらすうら盆の月

●

芝區　むらさき
貴人の世棄てこもりし小扉のあたり秋告げ顔に尾花さやぎぬ

●

茨城　翠嵐女史
圖らずも蟲なく墓にめぐり來て祖母思ひ出てゝ花奉つる

◎

秋田　志満子
音信づるゝ人なき破屋に露の軒端を這ふ白萩の枝に

出征軍人を想ふて　本郷　羽井松子
虎吼ゆる荒野につゝを枕して如何に見るらんシベリヤの月

●

信濃　神津小舟
烟火のそれさへ懐きこの夕べ旅僧一人靄に暮れ行

●

小石川　しんろ子
江の月夜舟にたがふく笛の音か水にもつれて花散らす

●

徳島　浦上登志子
詩に倦みて障子開けば月冴えて菊の香ゆるうゑみて椽に散る

●

越後　内藤晨子
清の山神つ岡山遥見えて新高山のよき朝ぼらけ

夕立　福島　芳子
たばしまた瀧なすあせをぬぐふときたもとすゞしく夕立のふる

●

淺草　さつき子
かたかはは沼まじりの峠みち落武者たすけし枯尾花かな

折にふれて　常陸　川並芙蓉子
月すみて蟲なきしきる秋の野路をうたあさりつゝわれひとり行く

●

兵庫縣　飛早女
みだれ髪朝の杜へと脱け行けば夢現たに栗の花ちる

夏日　弘前　花月
たへかれし暑さもさりて風そよきやとるも涼し夏の夜の月

思ひ草を讀みて師の君へ　神田　近野榮子
夕霞のひくふ彩る岬の蔭に君が詩歌ふ若人二人

●

廣島　彩井秋子
何となく心いざよふ夕暮を野菊花の香きりに消えゆく

●

水戸市　竹子
池のはの眞萩白萩枝たれて緋鯉のせなに花ぞみだるゝ

●

千葉縣　並木とめ子
彩雲の低う尾花に流れゆく夕野のかなた君ゐますところ

●

淡路　伊藤綾子
つれづれの君と散歩の庭の梧桐の葉がくれ夕つゞの影

百合　伊勢　小林俊子
人魂の別れていつてふ古寺の苔の小庭の白百合の咲く

◎

和歌山　田中孝子
満州の露と消えにし武夫の魂いつこに迷ひ居るらん

◎

神戸　黒田涼子
わが夫のかたみの袖をかたしきてゆめまどろめば秋さめのふる

◎

神戸　河野さつき
咲けほこる眞萩の枝にたゞ一つ光りもやらず光る螢火

◎

石見　後藤かつ子
山吹や花に興なき此ゆうべ病む月を雨の音無う降りぬ

◎

上毛　鎌田芳子
朝な夕木枯さむく奥山の紅葉染めはす秋の村雨

●

横濱　寺田光子
この秋は萩にとはんといひし君君世にまさばまさばとぞ思ふ

亡き母の寫眞を見て　三河　白萩女史
見る毎に世にましまさぬたらちねの又今更になつかしきかな

●

小石川　近藤愛子
湯浴みして月の小徑をうたひゆけば夜風にかをる木犀の花

●

秋田縣　破雛子
たかどのをもれくる琴の音絶えて一人たゝずむ菊園の中

萩の花　廣島　なでしこ
みほとけのあもります日をまちがほに花のうてなに露の玉しく

抒情文

日本女子大學教授　興井文學士選評

特別第一賞

○不運の少女を弔ふ

熊本縣　久富とく子

秋風荐りに新愁を吹いて、夢の漸く稀ならんするに、一夜、枕頭あやしき少女と語りて、其の面影の消え難く、いとほしさのいや優るがまゝに、少女が身投げせしと言ふ七瀧の邊りに、其の迷魂を弔ふ可く、吾は半日を瀑頭の巖際に過ごしぬ。

節は秋にして、所は山の奥なり。萬木凋落して山骨瘦せ、白雲低く飛んで、山風の轉た冷かなるに、凋れたれども全山の落を合せて流れ來る御船川は、此處に仙俗の境を界して、落ち落ちて七級をなし、其の響滿溪に震うて、悽愴の音、景と與に人間の墮落を罵るあるが如し。巖角に佇みて俯瞰すれば、斷壁蒼苔を敲りて直立數十仞、其の下、藍碧の深泓飛泉に撥せられて、白波岩を噛み、水氣霧の如く立ち上りて、崖上の樹枝風なきに搖ふ。若し夫れ、晩春孟夏の際、滿山の雪解けて、碧高きこと今に倍せんの時や、蓋し人間の耳は聾し目は盲せんのみ。盤石の上に踞して、瀧の音に耳を澄ませば、轆轤の響は同じくこれ秋の聲なりけり。秋の聲は悲しき聲なり、ことにうら若き少女が、悲痛なやる瀬なき思ひを懷うて、其の聲なき悲みを聽くは、更に悲しきなり。かの不幸薄命の少女、今は希望のパラダイスに行樂して、絕えて物の哀れを懷ふとなからむ、然れども、其の道ゆきは餘りに慘なりしにあらずや。濁りに濁る人の世に行きくれて、闇の帷の、おのれをも捲かんとするに驚き、逝るゝ路を求め得て、哀れにも形を遺して帷をくゞりし少女が心は純潔なりき、吾れ其の心花を慕ひて、今茲に、弔屈の祭にあらぬ弔をするなり。

可憐の少女よ、幼くして父母を失ひ、あめつちの間に寄邊なき孤兒となりし君は、あやしき人間の緣に救はれて、伯父君の庭に、あはれ一本の花と咲く可く、こゝに幾たびの春を迎へし、伯父君は熊本の桃門なりとか。其の豊に打ち廻はした

る黒塀の内には、長へに幸ある春風の薫じて、洋々たる和樂の睦を充てるならんとは、世間の人の疑はざる所なり。げに伯父君の庭には、君が從姉なる數多の子女あり。正に喜憂相分ちて、君が無限の愁を慰す可きなり。嗟呼、されど、君が孤心は惘として樂まざりき。不幸にして君は生れ得て美人なりき。同じ年の從姉は醜くかりき。從姉は君と共に高等小學を卒へたり。爾來、君は多くの人に懇望せられて、嫁となるべき多くの機會を有したるに、從姉には未だ一指の向ふものあらざるなり、伯母君豈に心悅ばんや、從姉豈心平かならんや。從姉は女學校に入學して、日に高等の智識を蓄へ。或は敢て君



一幹千伯菊

が聰明を奪はんとするに、君は下婢の如くに廚の內に日を送りて、復習の暇さへあらざるなり。從姉が南窓の下に聲高く英語を誦するときに、君は雜巾を抱いて其の席を淸めざるべからず。從姉が綺麗なる編物を遊ぶときに、君は荊棘を折つて烟に咽はざる可からず。從姉が多くの學友と郊外に行樂するときに、君は籠を提げて店頭を走らさるべからざるなり。かくして君は今茲十八の春を迎へぬ。天禀の麗質は飾らざるに光りを添へて、多くの緣談はまた君を圍繞せり。伯父君豈に心に關せざるなからんや。下婢の職は君に輕しとして、君は今春、花

に負いて、終に麥稈工女となされぬ。從順なる君は、命のまゝに働けば、其の技は大に進みぬ。あゝ、されど、君は所詮良家の令孃なり、はしたなき女工等と伍せんには、其の骨あまりに秀で、其の氣あまりに清かりき。君何ぞ其の職に堪へんや。君は私に境の非なるを見て、自ら惘濁の上に蟬脫せんとし、茲に小學教師となりて、天眞僞なき兒童と樂まんと志せり。されど、あゝ、君に自由なし。學問は君と百尺の壁を築きぬ。人生に心を寄せて、愛を求むれども得ず。たゞ笑つて君を迎ふるものは、かの黃泉の父母のみ。天地の間に自由を求めて、自由終に來たらず。たゞ自由の境は、時と所と兩ながら權なしといふ冥府の里に見るべきのみ。嗚呼行かん哉、行かん哉、かの希望のバラダイスに行かん哉、君が心は決せり。笑つて巖頭に立ちて、哀れに短かき君が生涯は、七瀧のうたかたと共に消えぬ。嗟吁、無情は天の心なるか。徒らに美色を與へて、早く其の命を奪ふ、悲慘の事跡、あゝこの人生を如何。汚きは人の心なるか。嫉妬やるかたなく、遂に殺さずんば止まず。醜穢の心情、あゝ、この人生を如何。

嗟吁憐なる少女よ、君がこの巖頭に立ちて見下ろしし時に、蒼然たる暮色につゝまれし翠闇き潭底には、果して如何の文字の讀まれしや。あゝ、君が懷沙の念は既に長く君が心に宿りつるなり。さるからに、君は死後の耻までも思ひやりて、はる〴〵七里の道を、か弱き足に踏み破りて、雄々しくも獨り此の山奥に辿れるなり。思ふ、當時君が心を決して、それとはなしに家門を辭せんとするや、愛らしき養犬は君が後を慕ひ來て、かの仲ノ瀬橋畔に悲しき離別あらざりしか。更に山道に間關して、涙に空の曇りし時、天地の盡きぬ流れの、如何に悲しかりけん。

嗚呼、人間の孤獨なる、その悲涙を擔うて、自ら悽慘の淵に行かざるべからざるか。君一たび此處に沈んでより、流水長へに涙ならん。崖上君が影の消えてより、鳥啼悉く悲しからん。嗚呼、孤身賤しきに慣れて、世を觀ずること、或は僻するあらんも、君が可憐の心は、天も泣き地も亦哭すべし。あゝ、吾又何をか言はん。惘悵として獨り悲み、運命の私し難きを嗟するのみ矣。

（雨評）雄健にして趣味あるの筆、修辭苦心の迹からさるあと見えてゆかし。特別の天位におく

特別第二賞

○失望

周防　楓子

「記者さん、まづい物ですが、投書しますから、どし／＼沒書して下さい」と、口にこそ云へ、誰れしも同じ心の底、沒書はわが生涯の師と思ひながらも、凡なる身の悲しさ、わが滿腔の熱誠を籠めたる詩文の、塵あくたと共に反古籠に投げ込まれしと、思へば、いかで嬉しかるべき。

朝に影淡き殘月を戴いて出で、夕に麗しき新星の光りを仰いで歸る身の、なほこの一枝の筆捨てかねて、弧燈影暗き下、せめてもの思ひを綴つて文才拙きをもかへり見ず、さはれ一字一句に力を籠めて、幾度となく繰り返し繰り返したる甲斐もなや。針持ちて衣縫ふ時、鍬持ちて畑打つの時、寸時心は安まらで、一日千秋の思ひに待ちし月末の夕べ、歸れば果して机上の女子文壇、おのゝく胸を抑へて繰れども／＼、あゝ、遂に我が名は見當らず、何となしに得堪へぬ悲しさ。夕餉の膳もそこそこに、破机に對すれど、筆持つ勇氣もなくて、徒らに罪なき鉛まで、前齒に碎いて、我れながら淺ましく狂ひし事もありにしが、僅かに「精神一到何事か成らざらむや」の一句を使つて、筆を續くること、こゝに半歳。月毎に新らしき友は誌上を賑せど、遂に一たびも我が名は見えざるなり。あゝ筆持ちて迚も甲斐なきこの腕、と思ひ初めては綻び掛し征衣、繕はんに由なく、徒らに天を仰いで嘆聲のみ漏しつ。かくも悶え苦しまむより、むしろ筆を捨てゝ、田園の生活にのみ甘んぜんとは思へども、あはれ如何せむ。仰がじとはすれど、夜毎日毎、城山の端に懸る殘月、松の梢にまたゝく新星のなほこの心を誘ふをば、あゝ。

（雨評）意匠面白し。文もすなをにして、しかも、優美なるふしの多き、愛すべし。特別の地位におく。

天

○秋の夜

靜岡　たか子

少し熱心に讀んだせいか、例の頭痛が始まつたので、一寸栞を挿んで、後を見ると、ふきこんだ椽側にさし入る月は、黄金の水が流れるやう。あゝ今夜は十五夜

であつた。あゝ、十五夜、十五夜、樂しかつたあの十五夜。指折りかぞへて見ると、十年昔の秋の今宵。あの時は、父君も母樣も御揃ひで、丁度今夜のやうな明月に、お月樣に上げるとて、栗やおだんごや柿などを、ずらりと並べて、あまりを皆でたべたが、あゝあの時だつた、お月樣に一番よい栗の上げてあるのを見た弟の「今夜は僕がお月樣になりたいなあ、」と皆を笑はしたのも。あの時だつた、母樣が、「お前の十五の年の十五夜には、もつともつとおいしい御馳走を上げて、お月樣のやうなきれいな心の人になれるやうに願ひませう」とおつしやつたのも。けれども、あの氣高い御言葉は、とうとうお形見になつてしまつた。十五夜は幾度來ても、再び伺ふことは出來ない、あゝ。あの晩は實に樂しかつた。常々あまりお笑ひなさらぬ母樣が、始終笑つて居らしつたり、父樣が何とか云つた難しいもの…多分詩だつたらう…高聲で御歌ひなされたり、弟と私といろんなお話をしたり、實に樂しかつた、あの晩は御月樣までが笑つて居らしつた。けれども、だめ、十年前の事だもの、十年昔の夢だもの…萩をふく風にハッと氣がついて立つた。あゝ又つまらぬ事を思つて、ほんとに病氣にでもなつたら、姉思ひの弟を一層苦勞させるやうなもの、あゝすまなかつた。氣を取り直して、四邊を見れば、夜もふけたのだらう、人間は皆靜まつて、全く氣高い神の世界になつた。神を讃美するのか、名も知らぬ虫どもが、露に濡れたやうなあはれな聲で、しみじみと歌つてゐる。御月樣は、十年前と同じく美しくお笑ひなされて、丁度母樣のお形見のお言葉を忘れるなと仰せられるやうに。氣も心も淸々して頭痛などは今は忘れたやう。おや二階では未だ弟が勉強して居る。

（雨評）　月前の懷舊は別にめづらしき內容にはあらねど、其の昔、十五夜の月下の母の言葉が、形見になつてしまつたりと、前に言ひ置きて、末段に今も變はらぬ其の月色が、其の形見を忘るなといふやうなりと言ひ、氣も心も淸々したりと結びたるは、涙を以て結びたるより、面白きものあり。すべて趣向もよく整ひ、辭もすなほにやさしく整ひたり。天とす。

地

○名なし草

備前御津郡石井村島田　松本もと子

われは野末の名なし草、佐保姫の野に降りまして、し

とく〳〵とふる春雨に、若芽の萌え出しにぞある。いさゝ小川の水清きほとり、朝雲雀の高き歌を聞き、夕水の低きさゝやきを聞きながら、生ひゆくまゝに、葉も茎ものびたれど、あはれ、われに小さき花も開かざりき。

隣に住み給ふ菫の君は、こき紫の美しの色、高き芳しき香のあるに……水にうつるわが影みては、われいくたびか泣きたりけむ。

空に舞ふ胡蝶は、いくたびかわが上を飛びたりけむ。さはれ、一度もわれを訪はざりき。菫の君にやさしき夢を宿したれど、一度もわれを訪ひくれざりき。きたなき草よ、見苦しの草よと云はぬばかりの顔して飛びゆくさまのにくらしやと、思へど、われに花なきを如何せむ。



田中紫水君筆

そゞろありきの若き詩人は、いくたびかわが傍をすぎたりけむ。さあれ、一度もわれを訪はざりき。隣の菫を摘みては、親しく接吻し給ひ、詩集にはさみもすれどわれをば見向きもせで行きたまふ。にくらしの人よと思へど、われに花なきを如何せむ。

胡蝶はこずなりぬ。詩人はこずなりぬ。日の神の光強うなりて、今迄光栄を我がものとせる菫草の、萎れゆくに引きかへ、われは驚くばかり長延びて、世はわれらのものとなりぬ。胡蝶はきたらずとも、蜻蛉はきたれり。きたりて、われを慰めぬ。詩人はきたらずとも、露は夜なく〳〵われに宿れり。宿りて、我れとおきあか

しぬ。さるに〳〵、われは飽くまでも幸うすかりき。今朝牧童の鋭き鎌に、小羊の餌と刈られ了んぬ。幸うすきかな、われ名なしぐさ。

（評）年まだしきところはあれど、趣向一寸面白く整ひ得たるものあり。不遜なる名なし草、何んとなう選者はすてかぬるものあるを以て、地とす。

人

○月の夜

出雲杵築　漁女

都の姉樣、今頃はどうしていらつしやる。學校のきれいなお窓から、今あそこに出てゐる、きれいなお月樣を眺めて、田舍の妹のことなど、思つていらつしやるだらうか。でも、姉樣は、いつも都は忙しい處だといつて、お手紙を下さるのだつたもの、どうして月なんか……あゝ、そんなら私が此處でお月樣にいくら姉樣のことを伺つたつて、知らないとおいひであらう。

あゝ、私はなぜ、あんなに姉樣がこひしいでせう。お母樣のまだいらつしやつたときは、毎年の夏休みにも、歸つて下すつて、三人で樂しい話や、悲しい話もいたしましたのに。姉樣が女學校がすんで、今の學校へおはいりのことは、今から何年やら前の、丁度、今夜でしたよ。その夜の月は、やはり今夜のであるのに。わたしは、よく覺えてゐます。姉樣、あの時私もお母樣にお願ひ申しました。けれども、二人一所には、むづかしいつて。私は今はそんなことは、ちつとも思ひませぬ。夢にも思ひはいたしませぬ。ただ毎日お母さんのお墓を守つてるのが、何よりの樂しみなんですよ。けれども、これが姉樣と二人であつたなら、どんなに樂しからうと、これが今の私の理想なんでございます。あはれ、姉樣よ。おもしろい教草にもつみあき給へるとき、可憐の妹の身の上を思つても下さるなら、きつと今夜のお月を見て、一滴の雫を月にそゝいでいらつしやらうけれど……都は晝夜のけぢめなく、夜もなほ、晝の如き有樣だとは、姉樣の都話の内にありました。また私もよつく存じてゐます。それでも、あの、きれいなきれいな、神樣のやうなお月樣、あれが姉樣のお目にいらないことは、ないでせう。それなら、なぜ、昔の事を思ひだして、田舍には一人の妹が、と思つて、一所に月を眺めては下さらないでせう。

あゝ、姉樣はもう、すつかり、故鄕のことをお忘れでございますか。都は二つとない、大切の大切の、故鄕を忘れる樣な、そんないゝ所でございますか。姉樣、私は、都はどんなにいゝ處か存じませぬ。けれども、けれども、世の中に、田舍ほど人情も、けしきも綺麗でいゝ所はないと思つてますよ。あの鏡の樣な小川、あれは、姉樣と顏をうつして、淸い含笑をかはしたところ。其の橋は、あゝ忘れもせじ、二人の過去ゆくすゑをかたり、かたみに希望をもさゝやいたところ。こゝらはなほ昔のまゝに、姉樣の淸いみ姿を見るのをまつてゐますものを。

これを思ひ、かれを考へては、せまき胸もはりさける樣。どう考へても、姉樣のみ心がわからない。あゝ都にはどんな惡魔がゐるであらう。故鄕を忘れしめるやうな、そんな惡魔がゐるであらう？。それでなくては、あの優しかつた姉樣が、あはれな妹を見すてるつて事はどうして。

今しも三五の月は、中空にたかく澄み渡つて、恰も、鏡の樣である。あゝ、もしこれが、眞の鏡であつたなら、二人の姿をうつして、鈴虫のあはれにすだいてゐるお母樣のみ墓を照したなら、どんなに‥‥姉樣もさすがに、故鄕こひしの念が起るであらうものを。あはれ、空たかく澄める月よ‥‥

（雨評）姉を思うて盡きざる可憐の妹の情見えたり。人とす。

秀逸

○古小袖

三河西鴨郡石ヶ瀬
澤田忠三郎方　澤田つま

今日はよき日和ぞ、土用干せばやと、朝餉の席に母上のみ言葉。鄙の地の心やすだてには、誰れに遠慮もなう、垣根の上、靑桐の枝などへ、蜘蛛手に懸け渡す物干竿に、簞笥の奧、長持の底に秘めぬる幾重の衣を、すきもなうかけわたしぬ。

一掉は死裝束や土用干。黑羽二重に片鋏の紋白きは、父上のみ衣！。お納戸、風通、黑縮緬、何れも沈める色のみなるは、母上の御召物！。襟裏袖縁はまだ若き紅色に矢絣、絞縮緬、龜甲形の派手なる柄は妾の衣服！。緋の友仙花やかに、繪模樣美しき縮緬の衣は妹の‥‥と掛け連ねては、紅、紫の華やかなる、栗梅、花葡萄のくすみたる、互に映り榮えて目さむる許りなる

に、紅絹紐の裳長う垂れて、緋縮緬のしごきの衣の間より地に引けるも、美しとも美しや。

さるを、母上の最後に掛けたし玉へる小袖の、色も鼠に銹びて、裳の綿も露れ、裾摸樣なる梅花の繍の斑に消えたるに、與さめて、倘干すべき衣も多く侍るを、などかかる古小袖をと訝れば、母上の宣へる、「こは唯一つの昔形身よ。哀れ嫁ぎ來し折は、か許り貧しくも非りしが、吾が夫の良からぬ遊びに費し玉へるより、新嫁の名殘は唯此の小袖一つに殘りてなむ。思へば、姑様のみ心猛くて、吾夫の良からぬ行ひを、皆われの足らはぬ故ぞと罵り玉へるに、涙に明かす夜も多かりしが、何時か吾夫の悔い改めさせ玉ふ事も有らんかと、歸れと宣ふ里へも行かで、心の限り身の限り姑様に事へ、わが夫を諫めしを、神佛も哀れませ玉ひけむ、かく安らかなる世途に、そなた妹姉をも設けて、家の榮にも逢ひしなる」と語り玉ひて、流石に昔の悲しかりし事ども、はた今の樂しき事など思ひ出でさせ玉ひてか、涙をさへ浮べたまひぬ。

哀れ麗しかりし衣の色は、癖める心なく親夫に事へ給へるみ姓の麗しきをあらはし、香滑な梅の摸樣は、いかなる苦にも忍び玉へるみ心の雄々しさを示せる者ぞと思ひては、女の道は皆此の中に籠れるやうに思はれて、今更に古小袖の床しさ貴さも一しほにて、唯虚飾にのみ心を用ひ、氣儘にのみ打ち過し、己が行ひも忍ばれて身の恥しさのうちまさりてなむ。

（兩評）文、抑揚の如く、誠に綺麗なりと申すべし。

○玉章

京都　伊東幸子

友にや棄てられけむ、雪井遙に咽ぶ雁がねの聲、いとゞ哀れなるに、そゞろに別れし友の忍ばれて、そと取りいでしは、數通の玉章。嗚呼懷しき此の玉章よ、戀しき玉章よ。あはれ、此の玉章、如何に此の袖ぬらさしむるよ、如何にありし昔を忍ばしむるよ、あはれ、此の玉章の中には、いとも深き友の情は籠るなり。慕はしの友よと、上なるより取りいづれば、豐野の君よりの御玉章、「君去り給ひてより、御懷しさは堪へがたう、日々東の空のみ打ち眺めて、袖潤し居り候ふ……。」嗚呼情ある此のみ言の葉や。妾も君と袖分ちてよりは、君戀しさに西の空のみ打ち眺めて、去し昔を思ひおらさぬ日とてはあらじ。君と揃ひの水あさぎのリボン今もなほ箱の中に藏めてはあれど、再び君とかざし、共

に學び屋へ通ふ日はありや。あれば、そは醒めて果敢なき夢にてこそあらめ。次なるは、我れと姉妹と迄誓ひしつう子の君の御玉章「無二の友なる君と別れし捨小舟、美しの花も誰れと眺めん、清き月影も誰れと愛てん……此の身哀れと思召給はゞ、去にし日の契りはゆめ忘れな給ひぞ、われは死ぬ迄替らじ……。」嗚呼、さても嬉しきは此の御筆の跡よ。我れは忘れじ、何時迄も。君の死ぬ迄もとの給へば、我れは死してより後迄も……。涙と共に後讀みいづれは、バタリと落ちし菫の一束「此の菫は雲雀囀る野邊にて摘み取りしものに候ふを、我が身ともおぼして愛し給ひてよ。」あはれ、あの折り惠み給ひし、色はあせ香は失せど、やさしき君が御心は、たゞ永久（とこしへ）に替らじな。

次なるは、操の君の御玉章、同情ある御言葉もて、此の身慰め給ふ嬉しさ。「あまたの親しき君に別れ給ひ、語り合ふ友もなき御淋しさに、袖うるほし給ふならむと、いかにも御察し申上候ふ……。」あはれ、此の御文書き給ふ折りよ、思ひやり深き君が黑目がちなる御眼には、露の玉やどし給ひしならむとさへ思はれて。

嗚呼、我れは此の玉章手にしながら、友慕はしさはいやまして、遂に泣けるなり。雨の袖は露の雫にぬらされぬ。あゝ、此の君達と、共に樂しく睦み語らひしも、果敢なき夢とはなれるなり。かたみに文は通へども、共に相見るよしもなく、日毎にまさるは此の涙。我れは最早や此の玉章見る事能はじ。あはれ此の身に幸ありて、今一度此の君達の面晤に接する事得ましかば。

（評）趣向一寸面白し。文も先つすなほに整ひたり。

○葡萄の一

河州天野山の邊　ひろ子

うらの花園に、紫の雫したゝらんばかり實つてゐる、美味さうな葡萄の房、妾はこれを見るたび、思ふたび、哀れな、悲しい想ひに沈むのであります。

雪ちやん、それは妾の妹で、今年やつと六歳で、まことに愛らしい子なんでした。雪ちやんは、つい先つ頃、病ひのために死んだのであります。

雪ちやんの死んだとき、妾はどれくらい悲しかつたでせう。雪ちやんの死んで行くその日でした。うらの花園の美味そうな葡萄を眺めて。

「兄さん一つ採つて來て下さい」と云ふので、どうするの、と問ひますと、一つ食べたいの、とのことに、

早速採つて來てやらうと、立ち上りましたが、醫師の果物は一さい禁ぜられたことを思ひ出して、

「雪ちやん、あれはお前食べては惡いから……」と云ひますと「そんなら誰が食べるの」

「やつぱり雪ちやんが食べるんだが、病氣がなほらねば食べては惡いの……」

「あゝ姉さんもそんなこと云うて……」

と眼をとぢたその哀れさ。母ちやんにもこんなことを頼つたのでありませう。

「雪ちやん、よくなればいくらも食べられるんだからね、早うようなるやうにお藥を呑んでね」

雪ちやんは、その夕、とう／＼逝つてしまつたんです。食べたいと思ふた葡萄も食べずして……。

妾はこのことを、母ちやんに話しまして、死んで行くのなら、一つぐらい食べさしてやればよかつたに、と、共に泣きました。

雪ちやんは、とう／＼逝つてしまつたんです、食べたい葡萄もようたべないで……。

妾は、花園の葡萄を見るたび、思ひ出されて泣くのであります。

そして、毎日、葡萄の一房づゝ持つて、雪ちやんのお墓へ詣り、それを手向けて、生前のことをあやまりますのであります。

葡萄はいつ行つてもなくなつてゐます、雪ちやんが食べるのか分らんが、妾を許してやると云ひませぬのです。

あゝ雪ちやんはまだ妾を怨んでゐますてしやうか？

（雨評）姉に詞に今一層の苦心をせば、其の想、はじめて人を泣かしむるものあるを得べし。

○御祖父樣

麴町區元園町二十二番地　迫田きく子

御祖父樣。

私は此の短かい單語を聞てさへも、兩の眼の濕ふのを覺るので御坐います。御祖父樣、御祖父樣。なぜ私は涙が出るのでせう。我れ乍らそれを知る事が出きないので御坐います。けれど、けれど、只一つ思ひ出しますと、追懷の念に堪へない事があるので御坐います。祖父は、私の十二の時、私の頭をなでながら、眠る樣にあの世の人となつたので御坐います。最後の祖父のかすかに口から迸る言葉を、小さな耳をつけてきいたのも、私で御坐いました。他の人、御父樣や御母樣や

兄様姉様などは、皆しく〳〵ないて居られましたけれ共、涙一滴落さなかつたのも、私獨りでした。私は祖父が死顔も見ましても、其の死たくなつたのだとは思はなかつたので御坐います。閉ではいましても生きた樣な御眼、つやのある色のいゝ御顔、私はどう考へても、御祖父樣は生きてらつしやるとしか思はれなかつたので御坐います。

けれど、けれど、其の最後、其の斷末魔の時に、微かに御目を御開きになつて

「花子」とやゝ紅の褪せた御唇が動いて、

「花子、おとなしくするのだよ」

私は何んだか俄にムラ〳〵と悲しい思ひの胸をついて來て、御返事さへもする事ができませぬでした。

御躰を棺に入れる時、初めて御祖父樣は御かくれになつたと思つてから爾來、五年の星霜、秋の音立てゝ落つる桐の葉、一つは一つ、一とせは一とせと、御祖父樣戀しの念にかられて、寄舍靑燈に秋の氣のひし〳〵と身に迫る夜、追懷に堪へかねて泣かずには居られなくなるので御坐います。

吁、私は今一度、御祖父樣の御口から、「花子」の一言を御きゝ申したいので御いますo

（評）文は先づ整ひたり。然に既にさまて其の情の未だ動かぬを惜しむ。

○煩悶

麹町區下二番町廿六　榊原千重子

月に日に荒れのみまさる世の中に、美はしく咲く花も御座いますものを、嗚如何にしたならば、此の胸の悶えの癒ゆるでございませう。あした曉の月の光に、黄昏秋野の啼虫に、見るにつけ、聞くにつけ、悶煩は煩悶を増すのみで御座います。そー、しばしが程なりとも慰籍を得べく、塵を他なる花野を辿りしうらぶれたる私の、いかに術べない思ひに沈みましたでせう。夕べの名殘！夕べの悲歌！一として私の悶えの種でないものは御座いませぬ。こし方行末の事、もう〳〵おきゝ下さいますな！

私の此の儚い一生は、運命の神のみ手に握られて、あゝも！詮方がない、諦め樣と決心つた事も、幾度か……されど、愚人の常、猶人知れず袖を絞るのは、何故でございませう？今更にその情緒の何たるかは申し上げますまい。おゝ此の小川のほとり、去にし夕、み手よ手よかたみに燃ゆらん希望を語つた事も御ざいま

した。行く秋の譜のあはれに泣いた事もございました。あれやこれや皆夢、ゆめでございます。私は、この里を三年の故郷として、また、懐舊の里として、長く〳〵忘れる事は出來ないのでございます。あゝ今宵！小川の調べいとうやせて、いにし夕べの月はまだ若うございました。

思ひは思ひを辿りつゝ、……ひとり孤燈の影に身をひそめつゝ泣くもこゝ幾夜……！

世に幸深う居ます君。この切ない胸の煩悶え、やさしいみ胸に……おゆるし遊ばして……！。

（雨評）言ひまはしに一寸趣味ある文と申すべし。「やさしい胸におゆるし遊ばして」の結末は、うけとり難し。

○亡き祖父を思ひ出で

兵庫縣美囊郡　藤田喜子

思へば早一昔、頃しも秋の末つ方、いとど戀しき我が祖父は、無情の風に誘はれて、歸らぬ旅に赴けり。是れを思へば、人の身も、露よりもろきものなりと、世の果敢さをさとりても、忘れかぬるは我が祖父の、みまかり給ひしことなりき。花は散れども來ん春に、また咲くこともあるなるに、月は缺くれど時來れば、再び盈つることあるに、またこぬものは我が祖父の、あの世に行きしことぞかし。此の世に在す其の折は、寢ても起きても片時も、我れをはなししことぞなく、また常々ものたまひき。我が樂は其許の、學びの道を勵みつゝ、早く絕れし人となり、此の世にいづるをまつばかり。これぞ一つの願ひぞと、切にいはれし其の言葉、幼なけれども今になほ、胸に刻みて覺えたり。いかに覺えて忘れねど、歸らぬものを奈何にせん。來らぬものを何かせん。之を想へばいとどなほ、過ぎにし昔偲ばれて、忍べぬものは涙なり。谷間をいでし黄鳥も、軒端の梅に囀づりて、春はきてりと告ぐれども、ひとりはれざる我が心、あゝ思はじな〳〵。嘆けどかひはあらざれど、何時しか心の迷ひにて、時しも渡る雁が音に、空を仰げと便りなく、閨の戸敲く風の聲、若しやそれかと出て見れど、訪なふものは誰もなし。夢の浮世と諦めて、枕につけば、鳴る鐘は、哀れを牽いて露涙、袖より袖の夕時雨、やがて聞ゆるものとては、軒の筧の音ばかり。窓の隙より眺むれば、空に殘る月影に、邊りに冴ゆる曉の、星の光りも二つ三つ。

（雨評）七五調の流暢なるところに、一種の味ひはある文とのみ申すべし。

俳句

巖谷小波選

特別第一賞

豐後國竹田町　中内蝶子

六波羅の草の錦や晝の月

【評】六波羅の榮華の跡に對しては晝の月殊に想深し、絶唱。

特別第二賞

京橋區木挽町九丁目　梅浦星香女史

白萩の頻りに飜れ稻妻す

【評】二種なれど着想は動かず、殊に中七の斬新なるを覺ゆ。

特別第三賞

越後國中頸城郡水上村字吉水　堀河弘子

茸狩や人の聲する次の藪

【評】次の藪に人の聲を聞く、茸狩の實境也。

天

千葉縣安房郡大山村　佐久間しげ子

雲一つ眞上に見えて枝蛙

【評】幽玄の味を得たり。

地

千葉縣長生郡新治村上太田　森みち子

星の合ふ頃を柱に眠りけり

【評】洒脱の俳見る如し。

人

栃木縣那須郡境村　池澤湖春女史

啼くや蚯蚓ともし居かぬ八重葎

【評】纖巧々々。

秀逸

鬼灯の盗人抱いて屆けけり　美濃　長尾文子

さして來る汐先白し秋の風　大和　木田から子

や丶寒むの桶新らしき朝かな　麹町　迫田菊子

草刈も分けて手に持つ野菊かな　大阪　義枝子

初汐や上へ流る丶桐一葉　小樽　梶水仙子

狼の遠音に尾花月夜哉　安藝　たか子

生ぬるき五右衛門風呂の夜寒哉　神戸市　吉田政江
紫苑の花咲くや夕日のいさゝ川　備前　英洵子
時々は動いてほしき案山子哉　岩代　むらさき女
天の川征露軍歌の聲遠し　安藝　池之子千鳥
枕辺に風鈴つって秋の夜かな　神戸　池田ぬい子
蟲二つ啼くや一つは垣の外　千葉縣　小高濟
翁忌や心あまりて見る枯野　横濱　數島花子
斥候の川にごし行く月夜哉　三重縣　徳田榮子
鴈鳴くや未だ明け切らぬ湖の上　津市　松尾花子
名月や萩とすゝきの間より　神戸　吉谷こだち
鈴虫のなくなり宵は留守の茶屋　栃木縣　春海女史
文月や歌屑拾ふ長廊下　埼玉縣　喜代子
負ふた兒の手々殺せてみる紅葉哉　秋田市　庄司錦子
澁柿の珠數にしてあり山の坊　埼玉縣　井上たか子
律院や夕日斜に萩の花　豊後　田仲保子
銀鞍に笛ふいて行く花野哉　泉州　天洲美亞子
琴の音の松を漏れけり初嵐　羽後　木内はな子
遠く見る名古屋の城や稲の花　羽後　渡邊ひさ子
肌寒や木曾川下る丸太船　神戸市　村田鈴子
君が行く越は馬肥ゆ花野かな　美濃　臼井しげ子
草に駒放つ江村の暮色かな　岐阜市　日比舒子
オリーブのりぼんはあせて夏くるゝ　長野縣　山里彩子
椽先の簾はずすり夏の月　伊豆　尾崎方しん子
芒さく御殿の庭や虫の聲　京都　田島かほる子
夜は船をつなぎし岸の柳かな　千葉縣　鈴木靜枝子
見せに來る子供心や初袷　宮城　さた子
涼しさや月を汲出す山の井　備前　瀧津瀬
山寺や蚊帳の空ふく秋の風　京橋區　萩野雅子
塵塚に小さき菊の一つかな　廣島縣　中村京霞
萩にさす夕陽赤し城の跡　美濃　臼井安子
月青う屍を照らす露營かな　大隅　山崎とよ子
蟬なくや針の運びの覺束な　下谷區　志濃初美

一日の雨に傾く菊の花　福岡縣　柴田艶子
蟲聞くや錦を袈裟にかへてより　神戸市　水越照子
温泉戻の頬美しき月夜かな　上毛　木暮松枝
木枯しに隣見せけり山の家　熊本縣　西野梅月女史
御座近ふ琵琶師召されぬ今日の月　長崎　濱子
蟬なくや此所に寺あり御説教　大阪　はる子
行く春や落花に記す歌もなし　武州　ふみ子
すい物の蓋を開けても紅葉かな　京都　渡部愛子
太閤も未だ日吉なり青瓢　神戸　田部幸子
夕暮な夫と歸るや茸狩　備前　横谷郁子
潮浴や歸省の兒と連れ立ちて　信州　高島すみ
芒野や色黒き僧に出あひけり　横濱市　寺田光子
紅葉狩京の灯見ゆる下り道　近江國　鈴木睦子
朝顔や紺屋のあいの瓶の上　相模　倉橋よしえ
四五本は見ながらかへる花火哉　神奈川　あやめ子
我心梅に托して別れけり　津市　坂ふみ
石段を下へ下への落葉かな　三重縣　山田寛子
朝風に電線うなる冬木立　千葉縣　靜香女史
行く秋の菊に寝せし嵯峨の寺　岩代　伊藤よし子
夕雲にまじるや夏の劔ヶ峰　陸奥　すみれ子
寒月や食ひ付きそうな鬼瓦　岐阜市　田中悦子
段切やこゝらにほしき村渡し　牛込　いづみ子
子を連れて母のぬれけり村時雨　岐阜縣　山田はぎ
海棠や靜にかゝる雨の音　上總　小川芳枝女
松の中萩咲く須磨の小家かな　福井　高柴小靜
いな妻のこぼれて知るや橋の人　愛知　柳月
朝寒や六十にして鹽を賣る　三河　澤田つま子
唐がらしばかりとなりし畑かな　府下　良江
子規殘月淡き小松原　大阪市　澤井すが
秋日和テニスの球の高く飛ぶ　美濃　宮部俊子
夕月をほろほろ散りぬ草の露　王子　朴子
納涼や柳の下に船出哉　埼玉縣　武島くに子
萩の花や町を見下ろす丘の家　美濃　大野秀枝
風ちらちら紅葉かつちるリボンかな　伴野ともゑ
夕月に眉なき女房美しき　金澤市　みどり

消息文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

特別第二賞

○十五夜に友を招く文

岩代須賀川本町　服部貞子

今宵しも十五夜に候へば、あばら屋にての觀月もまた一興と、芋も堀りて、枝豆も取りてと、今日の半日は過して候。何はなくとも三五の月、ひとり眺めんは、惜しう候へば、是非々々、夕方よりお越し下され度、早ければとて、お日樣も苦情は申し候まじ。すゝき切るとて、右の小指を切り候ものを、母とするめたる團子の加減もおほめにあづかり度く候ものを、今宵の御勉强は罪に候ぞ。たゞ何事も月の如く丸うお聞きさずみ下され度く、今宵を限りに放ちやる兎に別れのお歌袋、お忘れ遊ばさぬ樣・・・・かしこ。

（評）一言の餘計なるものなく、一語の不足なるものなく、しかも才華爛發、誠に面白くも整ひ得たる尺簡文と申すべし。特別の地位に推さんとす。

天

○都なる弟へ（姉より）

三河西鴨郡石瀬下村　澤田つま

月の清さに誘はれて、筆とり申し候、秋立てる都大路の昨日今日、如何お過しなされ候か。田舍も此の頃は流石に秋めきて、野に七草の花の裝、夕鈴虫の樂堂の調べなど中々に興深う、御身の愛でられし白菊も、父上樣のみ形見なるわさ萩の傍に、小さき蕾持ちて候。夫につけても、學の業は如何に進ませられ候か。片田舍とて、大江山ならぬいくのゝ道の遠ければ、まだふみもみぬ都の空に勉め給へる事と、空しく案じ暮らすにて候。元より賢から生れ付きて、物の道理も辨へ居給ふ事なれば、今更めかしく言ふべきにもあらねど、

唯老いませる母上様のみ心に添ひまつる様、心せられべく候。牡丹の艶なる、女郎花の媚めきたる、ふと心引かるゝ者に候へども、夫も白菊の清く氣高きには及びもつかぬ者に候を、物學びに他し心なかるべき御身の、若き心の移り易く惡き友なんどに誘はれたらん時には、清く愛すべき花と自も愛でられたる白菊の、風霜にも撓まぬ雄々しさに鑑みて、夢汚れし振舞なされまじく候。若し幾年の月日重ねながら、人がましき者となり得給はざる如き事あらんには、母上様にも二度とは逢ひ給はず、たとへ孟母の賢は及ばずとも、斷機の敎へは守る覺悟なりなど仰せ給へば、只一心に出精なされべき様、旦暮祈り居り候。都の地には不自由もなかるめれど、手綴の腹巻一筋參らせ候へば、姉がす志ぞと受け納め下さるべく候かしこ。

（雨評）華實美にしてすなほに、姉のやさしき情も見えたり。天とす。

地

○婦美子さんに或る時

長野縣諏訪　山里彩子

婦美子さん、ほんとに私、嬉しいですよ。おゝ、此の清い〳〵月、……あゝ、移り移ろふ世の中に、かはらぬものは、あなたの御心と、此のお月様よ。此の後とも一層親しくしませうね。そして、相はげまし相助け、それ〳〵神様の、あたへて下すつた境遇に満足して、出來る限り働きませうね、これからは、お互ひ、世の、荒海へこぎ出すですもの、隨分、つらい事も、悲しい事も、また、嬉しい事もあるでせう。運命の神は、どのやうに私共をあやつって下さるでせう……が、たゞ、世の艱難戰爭にまけぬやう、忍耐の旗の下にふるひ戰つて、理想の岸へ進みませう。

婦美子さん、なにもかも、もう、お歎き遊ばさず……ね天は自ら助くる者を助く、忍耐の光に照らされて、やがて、快樂の春はめぐつてまゐります。……

あゝ清い、月の光り……婦美子さんの窓も、此様に、ほゝ笑みてお照らし成さるてせう。

（雨評）さつぱりとして、しつかりとして、いやみなく、其の人がらも見えてゆかしき文なり。地とす。

人

○父を亡ひし友の許に

丹後久美濱町　小枝子

御玉章下され、嬉しさの余り、取り上ぐる手遲しと、拜見致し候に。讀みゆくまゝに、手あやしう振へ、胸せまり、吾にもあらで、お文の上に泣き伏し候よ。しばしは、夢か幻か夢ならば早くさめよ、幻ならばとく消よと、念ぜし甲斐なく、現なるこそ歎かはしき極みに候へ。承れば、お父樣には束の間の御わづらひの由。あなた樣の御懇なるおみとりも受け給はず、藥石も效を表はす隙あらで、あはれ果敢なくなり給ひしは、一入殘り惜しく、皆々樣の御なげき左こそと御察し申し上げ候。げに世は夢に候よ。思ひ起せば、三年の昔都に物學びて在りし頃、亡きお父上樣には、一方ならぬ御慈愛を蒙り、誠の父上と迄おなつかしう慕ひ參らせしものを。もはや此の世に在さぬとは。業終へて歸郷の折りも、お側はなれがたなう、おなた樣の上いと羨しくて、我れも父あらばと、人知れず袂をぬらしてし事も候ひしかど、やがて同じ不幸に會ひ給はんとは、哀れ神ならぬ身の知るよしなきおん悲しさに候よ。かれやこれ思ふにつけ、なかなかに、涙の種に候。されど、されど、君よ。御心痛の余り、萬一御身躰そこね給ふなどありては、却つて亡き君のよみ路の障りともなるべければ、此の上は宜しく御自愛遊ばす樣、赤心こめ祈り上げ申し候。

（雨評）平凡のやうなれど、しとやかなる筆の間に、同情の涙も溢にこもりて、自からの實情あらはれたるところ、愛すべし。人とす。



夏の銀坐「天賞」京橋區築地二ノ二〇　川本哲子

秀逸

○故鄉の友の許に

下野　草苗子

いつもながら麗はしき御水莖の跡、くりかへし繰り返し拜し參らせ候。剩さへ御封入のすみれの花の美しさ、田舍の春を偲べよとの、御下心にか、今更、野邊の樣など心にうかびて、過し事ども懷しく、歸られぬ妾には、なか〱に、恨めしうも存ぜられ候。さりながら、そは一時の戯れ言、君がやさしき御手もて摘ませ給ひし愛らしの花、などておろそかに、見過し候ふべき、昨年出立の砌り戴しき御本の栞と致し、

朝夕ひもとく毎に、貴きみ敎への言の葉と共に、御情けの程を忘れじと心掛居り候。

思へば、去年も今頃は、共に手を携へて彼の赤瀨川のほとりに參り、土橋の際に立てる一本柳に、二人並びて寄りかゝりに、睦ましき姿を水に寫して、泳げる魚の、思ふ事なき胸に、樂しき空想をゑがきては笑ひ、又は四つの袂を春風に飜して、昔の根の長き日を、花つみに遊びくらせし日も候ひしを、妾のみ漸く遠く離れて、昔摘みにし菫の花を、今は僅かに御情けに由りて心を慰むるのみ、色も香も去年に變らねど、獨り愛づる果敢なさ、うらやましと仰せらるゝ君の方こそ、却りてうらやましく候らへ。さはれ來ん夏休みには、積る話を語りつゝ、彼の土橋の所にも參るべく、緣り冷しき木陰に、古き自然の友をも、音づれんと、今より樂しみに、待つはそれのみ、待たるゝは其の日のみに御座候、あはれ如何に其の折りのうれしく候はんか。

（丙評）其の情はきこえたり。辭はさして難ずべきところのなけれどまたさして取り立つべきよしもなしと申さむ。

○友のもとに

靜岡　たか子

君より給はりし御文のかずかず、さしつぎて縱に致さば、實に天つ御空にも達すべく、横に致さば、實にて一の世界をも一週致すべく候。さて、その御玉章を、一つ一つ拜し上げ參らすれば、いづれも皆世にもあはれなる文字のみ、世にも悲しげなる文のみ、涙のあとの歷々として、世を恨み身をはかなみ給ひしものに候ひしが、今日の御文手にとりて、私は思はず嬉し涙にむせびて候。仰せの如く御筆も亂れて候、御文章も亂れて候。さりながら、御嬉しげなる御樣子は紙面にあふれ候て、良人なる御文字は、實に雙手の悦びにも餘り候よ。その如何に御仲らひ睦しきかをお察し申上げて、あまりの嬉しさに御文かゝへて、笑ひ出し、なき出し、家の人々を驚かせ候。くどくは申し上ぐまじ。只々今日の御文の御樣子、私のこの嬉びの、いつまでもいつまでも續けらるゝやう、ひとへに企望いたし候。筆末ながら、御良人樣へよろしく御傳言願ひ上げ候。かしこ

（丙評）才氣のたのもしきもののある文と申すべし。

○出征中の兄上に

神戸市花隈町　山邊撫子

兄樣、御手紙ありがたう。毎度ながら、兄樣の意氣には、感服してしまひますよ。彈丸や軍刀がなくても、

露兵の五人六人の、首が取れさうですわ。だから、兄樣の御手紙は、家でも非常な歡迎を、受けますの。着くと家内總出、玄關のポチも、臺所のタマも、飛んで來るといふ有樣！　さて、此の頃の宅の樣子つて。別に變つた事もないの。萬事盛んですわ。母樣の事も御安心なさいませ、病軍を擊退して、凱歌をお擧げなすつた、以來、益御壯健で此上はたゞ兄樣の凱歌がきゝたいて、待つていらつしやるの。また敏雄も正雄も、元氣過ぎて困りますの。私もですよ。二人で每日大將だ候補生だて、戰ごつこばかり、私も折々仲間に引き入れられてよ。軍人の兄弟ではこんなものね。おゝ、忘れて居ました、花園ね、よく繁つて參りましたよ。屹度私の丹誠で御凱旋の、曉には、見違へる樣にして置きますわ。こゝに封じ込めた花ね。申さなくても、御存じでせう。兄樣の御好きな花。富士艦の小兄樣の處にも、送つてよ。まだ申し上げたい事もありますが。今日は花園で筆とめて置きます。さよなら、中尉の兄樣

（雨評）　元氣よげなる文、妄りには泣かぬ軍人家族の心を見せたる文と申すべきか。詞づかひはなほ練熟を待つもの多し。



里の道〔地賞〕岩代郡山山田島方　關美根子

○友への返し

新潟縣　秋　月　子

よしみなき御筆遊びもて、御地の事ども、いと細やかに書きおこせ給へる御水莖の跡、手に結びては、此の頃の暑さも打ち忘れ、いといたう樂しく拜し候ひぬ。げに仰せの如く、日にます御暑さの折柄、御邊りは一入のよし。まして、年月越路あたりに過ごさせ給ひし御身の、さぞかししのぎがたう思させ給はんを、御さはりもなう、いと〳〵淸々しう在しまし候は、何よりの御事と存じ上げ候。こなたにても、皆々いとすくよかに暮らし居り候まゝ、御心安う思し給ひてよ。さても、故鄕遠き邊りに移り住ませ給ひ、かつは御交はりの方々も、未だ少う在しますよし、故鄕のこひしうも懷しうも思させ給はんは、さる御事にて候はんも、又夕つ方より磯づたひ、夕風に袂ふかせて、沖行き通ふ舟など見つゝ、そゞろありきし給ふ程の御凉しさ、げに無上の愉快と仰せこし給ひしも、さこそと存じ候。海遠きこの地などに住へる身には、中々御羨ましく、もしさる景色を君と共に、

言葉の花にさかせたらんにはなどゝ、よしなき言もかこたれ候ひぬ。又御地にても、琴茶の湯活花など、みやびの業のもてはやされ候よし。かねての御素養も在しまし候へば、淋しき御中にも、聊は御樂しみの御事と、心安う存じ候。先つ頃にて候ひき、御里方より、み庭に咲きぬとて、色麗はしき秋海棠の花數々たまはり、例のうひ／＼しきながらも、床にさして、朝夕めではやし候につけ、いかに心なき花も、去年迄めづはやし給ひし君のおはせて、さこそ淋しからめなど思へは、又君にもこのやさしき花を懸ひてや在せんと、一輪御目にかけ候。あはれ、萎れたりとて、元の色香を思し出て給ひ、捨させ給はで、み歌の一つなりとさづけ給ひてよ。末筆ながら、御主の君へも宜しく聞え給はりたく、未だ申しあげたき事は、野路の小草のいと繁く候へども、そは次の便にと摘み殘し、御返り事斗りを、あら／＼かしこ。

（評）先づしとやかに整ひたる文と申すべきか。

○妹に返す文（兄に擬して）

（九號保子樣の文を讀みて）

三重縣津市西新町三九　松尾花子

妹、よく言つて呉れた。僕は今日初めて汝の手紙を讀むで、悔心したのた、人間らしい人間になつたのだ。何卒免してくれ、頼む々々、此の通りだ、拜む拜む。あゝ、妹、僕だとて鬼でもない、蛇でもない。御父樣が御病氣だと聞いた時には、何卒一遍御生前に御目に懸つて、枕下で今迄の御詫がしたかつたのだ。歸省らうと思つたのは、一度二度ではなかつたのだ。而し、察して呉れ、僕の今の此樣て、如何しておめ／＼と御父樣に御目に掛れやう。又掛れないのだ、そこで、僕は此方で遙々と御病氣の一日も早く快くなる樣にと祈つて居たのだ。眞實だぞ。あゝ、而し其は今は夢だ。妹御父樣は死ぬ迄、此の不幸な僕の名を御呼びなすつて、而して……あゝ妹、僕の胸中察してくれ。恰て掻きむしられる樣だ。何卒御前に賴む、御父樣の御墓に參つたら、僕の心を告げてくれ。代りに詫をしてくれ。何卒花も立てゝくれ、頼む々々。「今更過ぎ去つた事はくり返しは致しますまい」、妹よく言つてくれた。僕は何より嬉しいのだ、何卒今迄の事は水に流してくれ。而して、母上と僕の成功を待つて居てくれ。僕も悔心した上は、必と勉强して出生する家の名をあげる。又亡くなられた御父を悦ばせて見せる。何卒御母樣は呉々も賴むだぞ宜いか／＼。

あゝ妹、此の手紙の字のにじむで居るのは、僕の悔悟の印だ。涙だ。もう筆が續かぬ。あゝもう筆が續かぬ。何卒察してくれ。

（評）妹よりの手紙に比べては、此の兄のは、遙に弟なり。

○旅中より（友の許へ）

徳島市富田伊賀町　住友登喜子

（一）

昨夜、有名なる琵琶湖上に舟をやとひて遊び申して候ひき。夜はいとゞ靜に、波はいよゝ清らかに、仲秋の名月は湖心に冴えて、寶鏡の如く、比良山の神々しき姿は、そが水面に長く……影を醜して、美はしく……其山形を碎きて途々辷り行く妾が舟……實に面白く、白雲鄉に遊ぶの思ひ致して候ひき。

星近くわたる雁は、蓬萊宮裡の天津乙女が奏づる秘琴に調べを合すが如く、妙音に鳴きて、堅田あたりに飛びゆき申して候ひき。



蟬の聲　〔人賞〕　淺草區須賀町二番地　宮下なつき

猶舟人をむさぶりて舟を上り、露ふかき虫聲を踏みつゝ石山寺に行き申して候。

松杉の間を逍遙へば、四顧寂として天地聲なく、月は愈至純の美と、至純の光とを以て、あくまで此の夜を淨化せしめ、心地よく吹く松風は、平和の讃美歌を奏で候ひき。

世にうらぶれの妾も、そゞろ仙境を辿るの心地致して候ひき。（十五日）

ちりの世のけがれし　さらばよ友、
人の眺めには、
あまりに澄める
石山の月。

（二）

妾は今唐崎の松の下に憩ひ居り候。松の緑は滴らむが如く、……君が千歳を祝ふが如うに

候。

おゝ今幽に鳴りひゞくは三井の晩鐘にや候はむ……日は早、斜に光をなげかけ候。

竹生島あたり紅波を漲らせて、矢走の方へかへり行く幾艘の漁船、櫓拍子につれての舟唄いと面白う候。

わしが思ひは住吉浦と
十七娘がまつだろう……

その餘韻、一層靜かなる夕暮の空氣をゆるがしつゝ遥かみ天に消え行き申て候。（十六日）　かしこ

かへり行く舟子が唄の、やゝに消えて
靜に暮るゝ夕凪の湖。

（雨評）多少の雅致あり

○暴風雨見舞ひの文

備前御津郡石井村　松本もと

昨夜は定めし御驚きなされ候事と存じ候。私は何も知らずに臥し居り候ところ、夜半頃、異様の響に目さませば、絹を裂くが如き風の音、加へて烈しき雨の音、雨戸がたがたと鳴り、屋後の老杉怒るが如く鳴りて、人心地はなく、早く夜の明けかしと、それ許り祈りて、中々眠りどころのことてはこれなく候ひき。あなたさまも、多分ご同様と存じ候。其夜の長かりしは、げに一夜千秋の思にて候ひし。幸にも夜のあけはなると共に、風も止み雨も止みたれば、漸う胸なで下ろし候。見れば朝顔のからみつきたるまゝ、籬は倒れ、瓦四五枚飛びちり、梨は大部分落ち、花壇の花は悉く折れてしまい、殺風景の至りに候。寢亂れの髮かき上げ居れば、弟は籠に一杯梨を拾ひきたり候。

私宅には、只今、朝ご飯を、昨夜の話をしながら、食べ終りたるばかりに候。風あたり強きあなたさまのお宅には、嘸御混雜なされしことゝ察し上候。芳子さんも定めしおん恐れなされたる事に候はん、一寸御見舞申し上候。かしこ。

（雨評）今一層の文なり

○別れて後學び舍にある友に

能登國輪島町　高森いち子

初秋風の吹きそめてより、日増に衣手寒う相成り候を、御許の君には、いよゝみけしき美しう、學びの窓に御勵み遊ばされ候とや、限りなう嬉しう存じ候。將た又羨しくも候かな。さても、學てふ道に縁なくてか、學び半ばに歸りし幸なき妾よ。家事の都合とは申しながら、餘りの口惜しさに、一時は愚しくも、我子良かれと寢ても覺めても祈り玉ふ惠も深き、父母君を怨み候

ひしも、頭髮白き、さても、針目怨むるたらちねの影など拜しては、坐ろ悲しく、是が多少敎育を受けし者の想ひなるかと、果ては我れと我か心を嘲りし事の、そも幾度ぞ、あゝ、されどされど、奈何せん、折節は有りし其かみの偲ばれて、昔戀しの念禁じ難く候ものを、おゝ、彼の懷かしき蝦茶袴は、幼なき妹の帶とも前垂とも化し申して候よ。さはれ最早君と手を交しつゝ樂しく遊び、はた一つみむろに親しく敎を受くる事の叶はず候へ共、二とせ半の長き年月、妾如き不束者をも、露御厭ひなく御交り下され候御眞心は、夢おろそかには存じ申さず候。何卒〳〵此の後とも御見捨なく、せめて文の上にも御交り下され度伏して願ひ上げ候、筆末ながら御身御大切に、學びの業御勵み遊ばされ、春ある月の桂を手折り給はん事、一重に祈り上げか〳〵、都遙かに隔てし片山里にて、君の前途を祈りつゝ。

（評）其の情はきこえたり。文はなほ苦心を待つもの多し。

○砧の里より

大分縣鶴崎町　中村ふみ子

第一信

御月様が愛らしい御姿を山の端にかくす頃、妾は紅塵萬丈の都を後にして、今日、百姓どもが一日の業を終へて、鄙歌朗に歌ひながら歸る頃、砧の里とやらにつき申し候。これよりは、砧の音のまに〳〵御通信申すべく候。

第二信

鎭守の森を右にとりて、細き丸木橋を渡れば、幽かなる燈火の、木の間よりチラ〳〵見ゆる家より、砧の音は漏れ候。妾は砧の音を追ふ爲に、村はづれの一本松の切株に腰下し候に、音は谷間をくゞるいさゝ小川を傳うて、遙か御空になき渡るかりがねの方に、おとなしく音をひそめ候。妾は呆然として雁の行方をのみ眺め候。

第三信

砧の音は靜かなる夜氣を破りて、美しき笑ひ聲をのせて、妾の内の夕顏棚の中に入り候て、すゞ虫と時ならぬ親月の奏樂を初め候。妾はあまりの面白さに、玉琴取り出て、かきならし候も、其の妙なる調におされ候。

第四信

此の所より一しきり、彼の所より一しきりと、砧の音は合して、空中高く舞ひあがり候。此の村は斯樣に每晩異りたる砧の音を聞かれ候は、砧の里の名ある所謂に候。

（評）多少の雅致あり

短篇小説

廣津柳浪選

天

○貞操

下谷區上根岸百二十五　太田あきつ子

晝てさへ往來の餘り繁くない裏通り、夜は尚更寂として凍つた大地に下駄の音も遠くになつた。

「だつて兄様」

六疊の室に猫板の上へ洋燈を載せた長火鉢を隔てゝ兄に對したお春、年よりは少し老けて居るが、眼の清しい髪の濃い一寸目立つ容色、恁云つて凝乎と燈洋の火を瞶めたが。

「勇様の位牌に對したつて…又お姑様だつて妾一人を頼みにしておいてなんだし、弟も姉様々々て慕ふんです物。假令妾に子がないからつて其様な冷たい心に成れやしませんわ」

兄を見上げた瞳は恨と憤に燃へて、耳は熱し頬は熱る

「お前の氣質じやそうだろうよ、だがさ、考へて見ても詰まらないじやないか。未二十四と云ふ若さて一生埋れて仕舞ふてのは」

苦笑した兄の義造、或商店へ通番頭の身である。

「ねへ…そうじやないか」

「…………」

「お前は夫てもいゝのかい…」

「詰まらなくても何でもよう御座んす。妾にやそんな道に違つた事は出來ませんから…」

憤の餘りに聲も強くなる。が兄は依然冷かな態度て。

「名譽の戰死だつて死んで仕舞つちや、から駄目さ」何程情を立てたつて通じる氣遣はなし、其様な堅い事計り云つてちや此浮世が渡られやしない」

「まあ…兄様…」

兄が言葉にお春はあきれたのてあつた。

夫は天晴君國のために勇ましく戰死を遂げ、妻の自分は、戰死者の遺族と云はれて肩身を廣く、只此上は夫の名譽を損はぬよう、自分は如何なる事を忍んでも、夫と血を分けた弟を世に成出させてと、堅く決心したの

て有たが、今日しも兄が呼寄せた譯を何かと思へば、自分を頼む人々を捨てゝ再縁せよとの話、眞肉の兄の今日が日迄恁く情ない人とは思はなかつたにと、不覺悲しくも成て來ていつか涙は目に宿る。

暫は二人共無言で桂時計の音のみ高く、冬の夜の寂莫を破つて今しも俥がら〳〵と行過ぎた。

「えゝ……おい如何したんだい……私だつて一人の妹だからな……悪い事は云はない積だが……」

促す言葉に答へもせず頻と下唇を嚙むだが、やがてはふり落る涙を襦袢の袖て拭いて。



「兄様……」

「何だい」と冷かに。

少し躊躇たが瞭然した聲で。

「兄様……妾の身を其様にまで思つて下さるのは有難う御座んすが、妾は我儘者ですから何卒此儘捨てゝ置いて下さい、一切構はないて下さい。妾は構つて下さらなくても眞逆に兄様に御迷惑を掛けるような事は仕ませんから……」

＊　＊　＊　＊　＊

南山の役に勇ましく戰死をした歩兵上等兵故杉浦勇吉

の妻お春は、姑姉弟によく事し、貧によく闘ひ類稀れな貞婦であると、近所界隈で婦人の摸範として評判するのである。

戰後の家庭には往々有る實談、而かも作者は能く人間を描く秘訣を了して居る、兄の人物が強く、且現社會にありさうなだけ、妹に對する讀者の同情を呼ぶ點が深い、若し之を長篇にしたら作者の技倆は一層振ふべき餘地があつたらう（選者評）

地

○新職業

加賀いほり

爛熳たる花の木蔭に百鳥晴を告げ、軟風暖に胡蝶の夢を守る今四月の下旬、今年高等女學校の業を終へた鳩山君代は、今新しく北陸鐵道に設けられた、越前山中驛に奉職する辭令を受けて、赴任の途に就いたのである。見送りの人は、まづ君代の母であらう一見賢母らしい人と、まるで瓜二つに割つたやうな姉弟と、はや七十の坂も過ぎたかと見える十度計腰のかゞんだ祖母様と、外に同窓の友八九名。やがて汽笛はなる「汽車中は何かに油斷しちやいけないよ」といふ母に引き續いて「お前身躰をのう」と後は早や老の涙に振へてゐる祖母の言にぞ、君代は胸一ぱいの思を一滴の涙に浮べた、親姉弟さては友達にも別れ、獨り知らぬ土地になれぬ職務をとると思へば、實に云ふにいはれぬ思ひがするのであるが、又一方には今行く土地の想像やら、始めて着いた時はどんな挨拶をしたらよいか、驛長様はどんな風に紹介して下さるだらうなど、心は半分先方に行つてゐるので、弟の叫ぶ聲も、友達が振り擧げてゐるハンカチの影も、なれし故郷の山も川も鎭守の森も社も、幻の内に消えて行つたのである。

汽車はだん／＼進んでいつしか加越の界なるトンネルにさしかゝつた、忽ち暗みに忽ち明るく、またゝく間に八つのトンネルを出づれば、新緑美しい峻岳の麓に、線路に沿ふて白壁造りの一棟、太陽の光りに瓦は青くキラキラと輝いてゐる、これぞ君代が目ざす停車場である。前には蒼々たる敦賀灣の碧水を控へ、後は萬丈の絶壁におほはれ、滿山の櫻花は殘らず咲き揃つて今し君代が赴任を待つてゐるやう。八町計離れた處に百二三十戸にもあまる一つの町づくつた港がある、對岸の港と可なりの取引があるので、其爲め今こゝに停車場が据えられたのである。まだ茶屋も無ければ宿屋もなく、集つて來るものは大方荷物で、たまに

四五人も下車る客があつても、さつさと彼の港に走つて行けば寄せてはかへる波の鼓、軒端に通ふ松の琴ならでおとづれるものも無い、都の空に住みなれた君代は、峙つ峯の高さにはや眼はうるほふてゐる、やがて案内せらるゝまゝに事務局に入つた。羽二重の玉の頰に染めし濃き紅のやさしさ、永き間の汽車の動搖に豊かに結んだ前髪の亂れた風情、げに今新設の驛に天女が舞ひ降つたかとうたがはれる程である。夢やら幻やら妄想やら涙やらて、挨拶は何やら紹介も終つて又座も定まつた。すると早速驛長樣助役樣から色々な仕事を命ぜられて、突嗟の間に事務は机の上にうづ高く積み上げられた。

紅のリボンみじかき七才の春、始めて小學校に入り、こゝ十二年が間、暖い先生の眞の涙と眞の情とで朝に導かれ夕にいましめられ、何の問もなかつた君代、さては何から手をつけたらよいか、誰に何といつて聞いたらよいか、人知れず瑠璃の眼を拭ふてゐる。時計は早やも四時を告げる、あはれ今夜はいづこに草の枕を結ばうか。それにつけても戀しいのは父よ母よ、有難いのは兩親がある先生である、なつかしいのは古里である、忘れ難いのは同窓よと。是迄嬉しくも無かつた父母の教訓も、苦しいと思つた學校の規定も先生の命令も、何もかもなつかしくなる。

恐らく斯云ふ點に眼を着けて小說にしたものは初めてあらう、女子が職業に就くと云ふ事は最近の狀態で、其爲には女子の社會が廣くなり、見地も又高くなつた、作者は論題として之を見ず、詩題として之を見た、益し新しい（選者評）



野良歸　〔賞外〕　麹町富士見町　川村やよい子

○燈明台　人

本郷弓町　小島壽美禮

寄せては返し返しては寄する大濤は巖の上を吠え狂ふて逆巻く怒濤の海原は狼の吼ゆる樣な音をさせてズーと渚に沿ふて白濤蹴立てゝ引きも切らずに磯邊に打

ち寄せて來る其大暴風の時にも平然自若と巖の上に聳立ッて常も絶えざる美しい光を放て居るのは私の故郷から一里が程南の燈台である、ほんに星の光の樣に高尙いのです

燈台は丁度此三木町のある灣の北に突出た崎にあつて前の大洋の乘り切つて來た船でも危い暗礁が多いやら潮が干くと澤山裸躰岩が現たりするので容易に此灣には寄れない、況して霧の立罩むだ夜などは燈台の光さへ霧に覆はれる、で此燈臺に付いて一の話があるのです、それは今より二十年も昔未だ今の燈台番人にならぬ前漂流した葡萄牙人の二人の小兒と住むでた時の事或日其番人は小兒を塔に殘して出て行た、其夕急に烈しい暴風は此三木灣を襲ふて次第に其威を猛ましくした、殘された可憐の兄妹は深き怒りの貌はしたれどもけなげや見張の任を執つて居ました

其内にも風は加はり雨は烈しく、暴る暴風は此塔をも倒さんず勢、塔をも呑まん大浪は巖を超えて向ふの海に流れ落ち碎くる狂瀾怒濤は轟々百雷の落つるが如く風は颶颯雨は沛然、壯絶とも悲愴とも譬ふるものがない位、餘りの恐ろしさに可憐の妹は泣き伏した、けれど流石に兄は心强くも云ひました、

「おう妹よ恐るなよ、そこに海にも陸にも眞理の神は居まして此海も神の偉大なる御手の上にあれば我は何をも恐れぬぞ、されば慈悲の爲に今夜も見張るべし多くの水手の爲め此輝く燈びに油も注さん」と、やがて二人は堅く兩手を握り合ひつゝ此物慘い寂しい塔を刻て行た丁度眞夜中に燈の工合を一驗した、而して二人は膝付つて祈を神に捧げました、陸でも海でも今や懸命な危際に逼る人々の悲しみが救はるゝ樣に、祈が終むと兄は霧笛の管を指に掛けた、烈しい風の爲切れ〳〵ではあつたが非常に高く鳴り響いた、暴風になやむ船人が居たなら確かに暗を破て聞いたてあろう、此笛の聲を

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜明けと共にさしもの大暴風も漸く凪ぎて東のほの白む頃には薄鼠色した綿を拗切つた樣な雲は西へ西へと空を流れて明けの明星は見えつかくれつ輝いてる、磯打つ浪は平日より穩かな位昨夜は暴風が有たのかと云はぬばかり、造化の知らぬ顏があきれる程静かで、海鷗の六七羽餌を求めて飛むでいる、其向ふ遙かの沖に彼の風で餘程苦しむだてあらう檣の中ば折れた大船一艘錨を下して今やボートが矢を射る樣に此灣を指し

て進むで來ました。

船底の眞砂にすれると同時に飛び下りた其人は誰だろうか濱を沿ふて燈台の門に走け入り遂いて階段を昇り乍ら幼き二人の名を呼むだ、されど二人は昨夜の苦しき見張の勞れて已がベッドに安らけく眠て黄金映ゆき旭は窓から差し込み除かに彼等の額を輝して居る、さらぬだに美しき金髪は恰も古羅馬の英雄が勝利の冠を着けた樣である、

燈台守が天に小兒等の祝福を祈た時二人は目覺めて、同時に「御父さん」とばかり呼び上げて右と左から抱き據て父が兩の頬に嬉しさ溢るゝキッスをした、燈台守も嬉し涙を瞼に浮ばせ熱く震へる唇にキスを返した、其時兄なる小兒は床に伏して「神よ父を惠み給へ」と祈てさて云ひました、「お父さん、今寝てる内に羽のある美しい美しい天使が笑ひながら枕元に來てね、天の惠は慈悲の爲には苦い勞力も面白い遊びだと思ふ愛の心を持た人に授かるのです、と云ひましたよ」

三木灣に今も白く聳え立つ燈明臺の有名な物語は是なんです（縮譯）

露店（賞外）神戸二ノ宮　徳永　みれ子



譯てあるとすれば、趣向の面白いと、短篇に適した物語てあることは、此處に稱揚する迄もない、只譯者の筆が如何にも熟して、生硬の痕が無く、日本の事てあるかのやうに思はせるのを多とする（選者評）

秀逸

○濱の夕

伊豆　木村さだ子

「畜生ッ矢張おれが捨てられたのだ……何にも自分で好かねえ處へ、無理に往く譯がねえや……。」

長谷町邊から連りに犬の吠え聲が聞えて、踏切を通る上り列車の滊笛が今悲しい響を殘して往つた時に、源太は獨りこう云つたのである。

漁舟が一漕ぎ毎に艫の音次第に高く渚に近く見はれて來た、其れを視た源太は急に面を反向けて、砂地を町の方へさる外人の別莊の前へ出ると、やはり砂の多い

道を此方へ急ぐ人影が見えたので、茫然してゐた源太は偶と立停つて見るともなく、

「マア源太樣ア……」。「おゝお佐代か……」。期せぬ邂逅に二人は思はず手を握り合ひ、お佐代は物云はず男の手を顔に押當て泣き出した。源太は聲を喘ませて「物の三日と離れてゐた事無えのに、今度と云ふ今度は最う十日餘りぢや無えか、己眞箇にお前が何うなつたか懸念で〳〵、生きてる心ア無かつただ、何うして此處へ歸つて來た最う往か無え積りて來たのか、えゝお佐代、それ共再往く氣か、早く其れ聞かして呉れ……」口惜涙もホロ〳〵零して云つてゐる。

「私最う〳〵何處へも往きやしないから、源さん安心してお呉れ、私が惡かつたのは甚麽にもお詫するから、今迄の事は水に流して、萬望惡く思はないでね」、源太は漸と安心した樣に「ム、爾うか、そんなら好かつた……早く往つて老爺にも安心させべえ、老爺毎日お前の事ばつか云ひ暮して泣いてゐたゞ、己も……」と連りに洟を啜つてゐたが、猶ほモヂ〳〵猜疑の眼を変睫いて「お佐代其衣物も拜領したのか、一寸の間にゑらい垢拔けが爲たなア……殿樣が何か爲や爲なかつたかア……其れて歸つて來たんぢや無えのか」、

お佐代はほゝと笑つて「那麼事も無かつたけどもね、育ちが育ちだから、私は矢張此處の活計が一番好いと思つたのよ、お邸に奉公てりや美い着物着て甘い物食べて、些共骨折らずにゐられるから好い樣なものゝ、究屈な言葉使つて、高い聲一つ立てられず、足も思ふ樣に延されないから、氣が詰つて〳〵何うにも我慢が出來なかつたわ、其れよりか氣樂に粟飯でもドッサリ喰べて、大きな聲して好きな唄歌つて、稼げる丈け稼いでる方が甚麽に氣樂で好いか知れないのよ」と云つてお佐代はパッチリと玉をはめた樣な眼を遠淺の海に轉じかけて、夢見る樣に霎時恍惚としてゐたが「幾等毎日の樣に植木屋を呼んで、お金を掛けたつて、東京のお邸の庭なんか眞箇に可笑しい樣だよ」

二人は相並むで濱へ出た、沖吹く風に漁火が見えつ隱れつ、茫として大きいわだづみの夜景、二三人て曳々小舟を引揚げて居る漁夫もあれば、波打際を犬が頻りに求食つて歩く。遙かに、（お前百迄私や九十九まアて……）波の音に和して透き通る樣な美音。

「新樣ぢや無いの？」「新の野郎だ……今夜己も一緒に網引してゐたゞ……」。「爾う……ぢや皆と一緒に酒食にても爲やうぢや無いか、ねえ源樣、矢張生れた處は

何處よりか一番好いわね。」

懐かしげにイソ〳〵と白い手もて縺れ毛を掻き揚げながら、源太が顔を仰ぎ見て嫣然した、脚下には昔の儘の波が騒いで、磯馴松が風に琴彈く鎌倉山の星月夜。

夜の市中〔賞外〕　北豐島郡瀧ノ川　濱口光子

後になるほど筆に興が乘り、掉尾に到つて精彩奕々、短篇には格好の趣向、小說を作る手腕は侮るべからざるものがある、猶後來の進歩に俟つ（選者評）

○うもれ木

新川橋　大澤たか子

「春子さん、御身を御大切に遊ばせよ、東京へ居らしつたら、御手紙をきつと頂戴」

澪子は車窓の、親友をじつと見守つてうるみ聲。春子も、薄紅のハンケチで眼を拭ひながら。

「はあ有難う、貴孃も御大切にね。左樣なら御機嫌よう……。」さすがに、語尾は震えてゐる。



「左樣なら……御機嫌よう……。」

辛つと云ひは、云つたものゝ、澪子はもう身も世もあらぬおもひ。あゝ春子さんにお別れして、明日からはまあ誰と共に物語し、誰と一緒に遊ばう。今迄は、憂も喜びも、共に悲しみ、共に樂しんだものを。姉樣とも思つてゐたのに……

……これからは私一人ぼつちに成つて了つて……。其で春子樣は東京で立派に、暮して御出の、伯父樣の御宅へ居らしつて、女子大學とやらに、御入學遊ばすのだといふに、私は……あ私は矢張し此草深い田舍に、物學びする術さへなく……一生つまらな暮すんだは。やがて都風の美しい御姿で、故郷へ錦を飾つて、御歸省遊ばすであらう。其際私は、やつぱし身すぼらしい、田舍娘で……あゝ嘸ぞ笑はれることであらう。其樣なるともう、私なん

かお友達にしては下さるまい。そういふ折が來るかも知れない。此後必度あるに違ひないは。あゝ私も春子さんと御一緒に上京たいこと。けれど……例へお父樣やお母樣は御免し下さらぬにしても。兄さまは、きつと同意して下さるだらうと思つてゐたに……えッ未だ學校へ行きたいつて。女子はもう、普通に女學校を卒業すれば、學問の方は澤山だよ。女子は家内を治めるのが大事だから、兄さんは此以上の學問は餘計だと思ふ。それに女子が餘り學問すると、生意氣になつて憎らしいものだ。以後は女子らしく、裁縫や割烹でも稽古する方がよい。兄さんは決して惡い事は、云はないから――との意外な御言葉。せめて兄樣から御願ひして、戴いてお兩親のお免しをうけ樣と思つてゐたものを。今は頼みの綱も全く斷れて……眞に兄さまも餘だは今更兄さまが恨めしいは。何故私は、都の立派な家庭に生れなかつたらう。詮樣がないは。どうせ、もう花も實もない草むらに朽ち果てるんだは。夫にしても春子さんは、あゝ御一緒に行きたいこと……東京へ。

澪子の心は、いとゞ乱れ亂れて、想ははるかの、都の空に憧るゝ時しもあれ、ピイと吹いた車掌の合圖に汽車は徐ろに、進行し初めた。

今はとて、澪子は情けなさそうに、術なさそうに、眼に泪一ぱいためて見送つた。見送つたけれど、見送つたけれど……其も瞬間。忽ち汽車は飛ぶやうに、其姿を乘せて去つて了つた。

やがて、松原の内に隠れ、音も聴えなくなつてしまつて、烟のみ所在なさそうに、漂つてゐたが、それさへいつか消えてしまつた。

美しい澪子の姿はさながら、大理石と化したかと疑はるゝばかり。此儘日が暮れやうが、夜が明けやうが、いつかな動かぬといふやうな樣子。

文章は熟練したもので、一字一句を正す必要もなく、全く賞讃は文才ある事は確かである、只小說らしい想を排へることが缺けて居る、短いながらにも、小說の體を具へるやうにしたい、今一歩のみ（選者評）

○この身

津市　松尾湖花子

（一）

あゝ私は何故こんなに不運なんてしよう、頑是ない未だ五歳の時に優しい母上に死別れ次ひで男手一つに育てられた私は又十五歳の秋、天にも地にも只一人の父上に御別れしたのてす、あゝ其時私は一日一夜泣き明

した事を覺えて居ます、其から一人身の私は津市なる叔父の手に育てられましたが大變可愛がつて下さつて、親身も及ばない程の御親切、其間に私は只管勉強致しまして御陰で首尾よく女學校を優等で卒業さして頂きましたのは丁度去年の三月、私の十九歳の春でした。其から三月計りは家に居ましたが幸か不幸か私は其七月、阿漕ヶ浦へと避暑に見えました華族小町田樣にふとした事から、おこがましくも家庭敎師として雇はれましたが、此れが抑々又私の悲哀ひ涙の種となつたのでした。

（二）

未だ別莊はないと云ふので御宿は千鳥館でしたが、御一家は殿方は見えず、御年は三十五六歳位の品の宜い奥樣と御年は十六七歳と見える御美しい御孃樣、其れに五六歳の御可愛らしい坊樣との御三方でした。私は只孃樣方と散歩をしたり、水浴したり、又雨の日は詩語り等しては、暇々に勉强するのでしたが、而し常々御二方の動作に注意せなけりやなりませんのですから其苦勞は



歸省〔賞外〕　韓國釜山　富永清子

大抵てはありません、が私は只樂しく働いて居ました、御孃樣は日々近々に兄樣が見える〳〵と云つて居られましたから私は如何な御方かと日毎其御風彩を偲むで居ました。

（三）

十日許りすると其若樣が見えました、目鼻立の揃つたすらりとした二十一二歳の御立派な御方でしたが、御孃樣方に少しも似て居られませむから私は不思議に思ひました、尚不思議なのは若樣は何故か御妹子の御孃樣と御親密てはなく成丈其散歩の時でも避ける樣〳〵にして居られましたから私は此れは必ず許嫁の御方だらうと思ひました、大變御歌が御上手で私の室へ御遊びに御出て下さる度に必と頂きましたが、其中に初戀と云ふのを頂きました時、何故か此時計りは胸が異樣に騷ぎました、其から夢の間に一月許りも立つて、忘れもせぬ八月の十五夜、御孃樣方を御眠ませ申して私も寢ようとしましたが餘りの月の美くしさに

逐憶がれ出て又もや濱邊を逍遙ひまして、例の一本松の根方迄來ましたので勞れた身を据えて休むてました、暫くすると不意に後に人の足音がしますので吃驚して振向きますと其は若樣て御座いました。て直樣席を讓つて種々の御話を承はりましたが終に若樣は吃となりまれして、「花子さん」と御呼かけになりましたので、私は吃驚して幽かに「ハッ」と答へますと若樣は私の手を取られまして、何事てしよう勿躰ない妾如き者に戀したと申されまして細々と心のたけを打あけられましたのてす、私も思はず貰泣きして、勿躰ないやら吃驚て御返事もせずに其塲は御別れしましたが、あゝ何卒其後は御察し下さいませ、もう書く事が出來ませぬ。

（四）

それから私は嬉しひ樣な恐ろしい樣な氣に充たされまして日毎鬱々と暮して居ましたが、何とも申上ないのも若樣に失禮てすし、又私の樣な者を朝夕果は「姉さん〳〵」と御慕ひ下さる御孃樣に對しては尙々濟みませず途方に迷ひまして遂々叔父に有の儘を打明けて助力を乞ひましたのてす、すると驚くじやありませむか、今迄の見かけによらぬ叔父は此れ幸にして私に向つて色々と義理人情を以てせめるのてす、何て私が其を聞かれませう遂に意を決しまして、叔父並に奥樣や御孃樣に永々の御禮を謝し又事情あつて御暇をする旨を記し、若樣にも此間の事情を細々と認め、何卒何事も夢と御諦め下された上御孃樣と末永く御添ひ遂げ遊ばして下さいます樣と書殘して或夜密かに此處を拔け出て逃したのてす。

＊　＊　＊　＊　＊

私は今は此平和なる村里に平和なる教鞭を取つて居ます。其して只管に勉强して叔父にも御恩返しをしようと思つて居ますが、其れにしても彼若樣と御孃樣は如何遊ばしたてあらう？私は朝夕御二方の身の上に幸多かれと陰ながら神に祈つて居るので御座います。

秩序正しく、明晰に、巨細に身の上噺を終る、文章としては美文の至れるもの、之れ容易に企て難し、難なく疵なし（選者評）
正しき人の戀愛談だけに稍物足らぬ點もあれど、却つて實際らしく思はせる（選者再評）

〇雲の行方　金剛山麓　橘かほる子

「秋子さん昨日面白かつたね今日もいらつしやいな」幾星霜を此處に風雨と戰ひて尙且つ緑增さりゆく鎭守の松原繪の如き中に海老茶袴の裾を曳いて辿りゆく十

一二の振下げ髪茂みを通して差込む午後の日光をまぶしげに仰きて今かく云ひしは愛らしき春江と云ふ

「チー御嫌や」

返事がないので春江は不審と友の顔を差のぞくと意外秋子はいつか涙組んで居るので少なからず驚く、

「マア如何したの何處か惡くつて」

イーエと秋子は首を振つて居る

ジャア如何したのよー秋子さん

私遊ばれないわアノーおつ母さんに叱られるんですもの

切々に云つたが堪らなくつてか、たふれる樣に若草の上に座つて袂を顔にあてゝ終ふた

あなた叱られて

之も同じく秋子の傍らに

エーアノ遲くなつたつて

聲はふるへて居る

マアーと目を圓くして幽かに戰く秋子の前髪の邊りを見詰めてた春江の目はいつか涙が充滿になつて



散歩〔賞外〕 麹町富士見町 古谷きよ子

お母さんも劇いのね

春江と秋子とは同級生の至つて仲好秋子が此處母の實家へ來てから未だ日の淺ひにも係はらず姉妹も及ばぬまでの語らひなので。昨日は幸ひの日曜是非ともすゝまぬ秋子を強ひて自分の宅に招ひて長閑な半日を愉快に心ばかりは慰めた積りであつたのが意外歸りの遲刻した爲めに母の怒りを受けたと聽いては氣の毒なやうなすまないやうな氣もして元より繼々しい中の增して父の出征後は何彼に附けて手劇くいたいけな私子をいぢめる事もよく知つて居るので自分の自由な樂しい境遇に思ひ比べては同情の涙にくれずには居られなかつたと同時に春江の優しい心は自分は何處までも此可憐な友を慰めて苦痛を助けねばならない又然するが友達の義務だと思ふたので、優しう秋子の肩に手をかけて曲んだリボンを直してやりながら

秋子さん泣ちや可不ないわ先生に敎はつたてしやう自分さへ眞直てあれば天は必ず幸福を與へるつて必度

今にお父さんも歸つていらつしやるわねもう泣かないてサー又遲くなると不可ないから

優しう手を取つて抱き起し涙ぬぐへるまを甲斐しく後に廻つて友が袴のみだれを繕ろひ落ちてし包の塵を拂つて持たせ本何くれと勞はりつ

ちよいと秋子さん見て御覽奇麗な雲

可憐な友を慰めんとの柔しい心情

ナアニと首を上げたが

マアほんとに奇麗まるで鶴の羽根の樣だわ

指さす彼方實に鶴毛の如き一沫の白雲、澄み切つた碧空を見る／＼遠く

春ちやん早いのねもうあんなにお山の方へ往つちまつたわアノ雲に上せてつて呉れると好いんだけれど聲細し。何不自由なき家に生まれながらも父は外に有勝の幼きより薊のしとねに座すらむ思ひの涙多き十二年の月日も人なき折無骨な手に涙ぬぐい呉るゝ父あるをせめてもに生立ちしを其父は今日戰に召されて明日をも知れぬ異郷の空子供心の悲しきに附けても思出らるゝは父。ゆく雲にも思ひは馳せて春江は秋子の手を確と握つて

早く御父さん歸つていらつしやれば好いのね

エ……

二人は言葉なく葛城の頂遠くうまれゆく白雲のゆくへをみつめたまゝ夢のやう

＊　＊　＊　＊　＊

越えて旬日飛報一度至るや全國を驚喜せしめたる某地會戰の大捷が犠牲となりし幾千の大丈夫が中には無慚秋子の父櫻田大尉の名をも見た

悲哀小說として純乎たるもので、二人の性格は此數十行の文字に遺憾なく現はれて居る、就中鶴の羽根のやうな雲の行方を見送る處、一篇の主題だけありて、最も詩趣が多い（選者評）

○鄙の手ぶり　　宮城　古河松江

「人を見下すんだア」、「生意氣じやないか」

どや／＼と五六人の、工女らしい、田舍風の女、後ふりかへり／＼何者かを罵るやう、やがて道の傍にある大造の家に聲をひそめて入つた

後は森として時々鷄の啼く聲が微かに聞こゆるばかりである。

其道を引きかへして工女連の來た方向に二三町往くとちらほらと、六七軒の家があつて右手の街道より少しく離れた所に、古びた二階づくりの家がある。

今しも前の方の池の傍に雪を欺むく程色の白い、鼻す

じの通つた十七八の女一見して都住ひでもした者と直ぐ思はれるのが七つ秤の腕白そうな男子に、面白そうな唱歌の一節、熱心に教へて居る、やがて焦れつたそうに

「武ちやん馬鹿、些も覺えやうとしないんだもの」

武ちやんも厭いて了つた

「知らねい、そんな歌」と云ふや否一散に家に入つた

「ホ、、、」と獨り笑を洩らしたが今まで雲に被はれて居た日が急にパツと照り輝いたので、まぶしそうに袂を顔にあて慌て丶家に入つた

折しも二階の母の聲

「須賀や一寸」、「え？」と耳を濟ました

「一寸御出よ」、「ハイ」と軽う。楷子の音とん／＼

「何か用があつて？」と裁縫して居た母の傍に座り、默つて母の梳を取り、ほつれ毛をかき上た

秋晴　［賞外］　陸中一ノ関　黒澤みつ子



「用つて別にないけどねー須賀さんや、元の御友達などゝ途で遇つた時知らない風情をしますまいねー」

「え？」と突然の問に幾分か心に掛つたやうである。

「否さ今ね外を通つたお前のお友達がさ此方を向ひて何者かの悪口を言て居たやうだ」と針の手を休めて須賀子を見上た

「何？私の事？」と云つたが、直ぐ下をむいた。

「いえ何も云ひません、が只一語、一體和女を、お父さんと妾として高等女學校に入れて上たのも…小學校に居た頃もまアお前の成績は一等だつたでしやう、品行も善良と云はれね、教育させたらと先生もわざ／＼來て仰有るからまア入學て上たのさ」此まで云つて又靜かに針をはこんだ

「今の女學生はまア墮落に近いと云ふ事を時々新聞御覧のお父さんに聞いて居ましたが、温順な須賀などに

はそんな心配は無いと思つて居ますが甚麼とてスから染みてむか解らないから御氣を付けなさいね、大手を振つて田舎者に見せびらかし顔や手足の飾り方ばかりして元のお友達などに悪感情を起てさせる事は妾一等いやです、田舎者は矢張何所から見ても田舎者と交際はなくつちやいけません」と低く力の有る聲で語り出した、須賀子は身を切らるゝ思ひ、顫う唇をかんで辛うじて只一語

「左様てムいます」と……

母親のさとしが、縷々として盡くして居て、而かも朴訥純樸な田舎の豪家の奥を司どる主婦の面目が現はれて居る、文も簡樸、相俟つて近頃異色ある小篇を成して居る（選者評）

○別れ

本所　田中紫女

「ねえ操さん御覧遊ばせアノ蜘蛛を、あれだつて少しづつ巣を造るてしよう、だから貴孃も別れてから一生懸命になつて……御願てすから—

秋の夜は沈々とふけて行くに今操子は歌子と別れを惜んて夜ふけ迄語つて居る、小川の邊枯れ木立の上に蜘蛛は段々と巣を造つて居るのを、勉強せよと例へに引き出したのてある。

操子は今年十七、色白く口元キッ、と締つた美人、歌子も彼女に劣らぬ美人てある、操子の母はまゝ母操子の花のやうな姿をねたんで日ねもす殘酷な主人が馬を使ふ如く用事を云ひつけるので操子は父と相談の上一と先叔父の家へ引き取つて養つてもらうので今宵歌子とつきぬ話に畔道を散歩して居るのだ、けれども

一逢ふ時は語り盡すと思へども
別れになれば殘る言の葉」

て、考へは無聊となつた。

「歌子さん妾もつと我家に居たいのだけれども、どうも御母様が……妾も叔父の家へ行つたら時々文通しますからね……どうか歌子さん、かんにんして下さいな」

うるほう眼見せじとすけれど自然と聲がもれるので包みきれずワット許り泣き伏した

「それでは操さんもう十一時頃てすからお別れを致しませう、それては明日五時に停車場へ御出なさるの？」

「はい一番汽車て行かうと思ひまして……」

「それては四時頃貴宅へおじやま致しましてお送り申しますから……ね……それてはお躰をお大切に子……

……—

「有難う存じます、それては左様なら、貴孃もお躰をお大切に子—

今にお父さんも歸つていらつしやるわねもう泣かない
でサー又遲くなると不可ないから
優しう手を取つて抱き起し涙ぬぐへるまを甲斐しく後に廻つて友が袴のみだれを繕ろひ落ちてし包の塵を拂つて持たせ本何くれと勞はりつ
ちよいと秋子さん見て御覧奇麗な雲〳〵
可憐な友を慰めんとの柔しい心情
ナアニと首を上げたが
マアほんとに奇麗まるで鶴の羽根の樣だわ
指さす彼方實に鶴毛の如き一沫の白雲、澄み切つた碧空を見る〳〵遠く
春ちやん早いのねもうあんなにお山の方へ往つちまつたわアノ雲に上せてつて呉れると好いんだけれど聲細し。何不自由なき家に生まれながらも父は外に有勝の幼きより薊のしとねに座すらむ思ひの涙多き十二年の月日も人なき折無骨な手に涙ぬぐい呉るゝ父あるをせめてもに生立ちしを其父は今日戰に召されて明日をも知れぬ異郷の空子供心の悲しきに附けても思出らるゝは父。ゆく雲にも思ひは馳せて春江は秋子の手を確と握つて
早く御父さん歸つていらつしやれば好いのね
エ……
二人は言葉なく葛城の頂遠くうまれゆく白雲のゆくへをみつめたまゝ夢のやう

＊　＊　＊　＊　＊

越えて旬日飛報一度至るや全國を驚喜せしめたる某地會戰の大捷が犧牲となりし幾千の大丈夫が中には無慚秋子の父櫻田大尉の名をも見た

悲哀小說として純乎たるもので、二人の性格は此數十行の文字に遺憾なく現はれて居る、就中鶴の羽根のやうな雲の行方を見送る處、一篇の主題だけありて、最も詩趣が多い（選者評）

○鄙の手ぶり

宮城　古河松江

「人を見下すんだア」、「生意氣じやないか」
どや〳〵と五六人の、工女らしい、田舍風の女、後ふりかへり〳〵何者かを罵るやう、やがて道の傍にある大造の家に聲をひそめて入つた
後は森として時々鷄の啼く聲が微かに聞こゆるばかりである。
其道を引きかへして工女連の來た方向に二三町往くとちらほらと、六七軒の家があつて右手の街道より少しく離れた所に、古びた二階づくりの家がある。
今しも前の池の傍に雪を欺むく程色の白い、鼻す

じの通つた十七八の女一見して都住ひでもした者と直ぐ思はれるのが七つ程の腕白そうな男子に、面白そうな唱歌の一節、熱心に敎へて居る、やがて焦れつたそうに
「武ちやん馬鹿、些も覺えやうとしないんだもの」
武ちやんも厭いて了つた
「知らねい、そんな歌」と云ふや否一散に家に入つた
「ホヽヽヽ」と獨り笑を洩らしたが今まで雲に被はれて居た日が急にパッと照り輝いたので、まぶしそうに袂を顔にあて慌てゝ家に入つた
折しも二階の母の聲
「須賀や一寸」、「え?」と耳を濟ました
「一寸御出よ」、「ハイ」と輕う。楷子の音とん〳〵
「何か用があつて?」と裁縫して居た母の傍に座り、默つて母の梳を取り、ほつれ髮をかき上た

秋晴　〔賞外〕　陸中一ノ關　黑澤みつ子



「用つて別にないけどね－須賀さんや、元の御友達などゝ途で遇つた時、知らない風情をしますまいね－」
「え?」と突然の問に幾分か心に掛つたやうてある。
「否さ今ね外を通つたお前のお友達がさ此方を向ひて何者かの惡口を言て居たやうだ」と針の手を休めて須賀子を見上た
「何?私の事?」と云つたが、直ぐ下をむいた。
「いえ何も云ひません、が只一語、一體和女を、お父さんと妾として高等女學校に入れて上たのも……小學校に居た頃もまアお前の成蹟は一等だつたてしやう、品行も善良と云はれね、敎育させたらと先生もわざ〳〵來て仰有るからまア入學て上たのさ」此まで云つて又靜かに針をはこんだ
「今の女學生はまア墮落に近いと云ふ事を時々新聞御覧のお父さんに聞いて居ましたが、温順な須賀などに

黒樣の繪紙が千束でも二千束でもマッチ一本で灰だからなアはつゝゝ」、「左樣ともね。其があるの無のつて泣いたり笑つたりする人の心程、分らないね」と爽に言つて、がらゝゝり戸を開くと、目さむる樣な月の色。「米さん！お月樣は何處も同じにお照しなさるよ」「左樣とも」言ひながらうーんと伸びて、ひよッと首を出した。あゝ其顏！笑まし氣な其口！夢見る樣な其眼！そこに限りない平和の色が漲つて、月を仰いだ二人の姿が、一好の目には如何に神々しく見えたてあろうか。

第三

「あゝ僕は操さんに何とも謝する言葉がない」

「あら良君。何ですの」操子は夫の機嫌が直つて、嬉しさに胸は躍る。「何つて僕は實に今夜で目がさめた、と斗りじや分るまいが」と一好は、藁家夫婦の睦じい變情や物語りに、一種の感に打たれたと杯話して、

「お前が是迄の心盡しを少しも思はないで、只一筋に貧乏が厭で、今更結婚したのを悔んだり、操さんの親切が癪に障つたり、隨分今迄は辛かつたろう」「いゝえ、皆妾が行屆かなかつたんですわ」「いゝや左樣でない。併し操さん、是からは安心するがいゝよ、僕はたとえ草鞋作りになつても、操さんを愛するとは堅く誓つて置くから」「マア其程迄に……」と操子は夫に犇と緊つて、嬉し涙に咽び入つた。空はますゝゝ澄み渡つて、月は笑まし氣に此二人を覗いて居る。

第二の藁家夫婦の物語も好し、第一の操子の苦衷も憫むべく描かれて居るが、只一好の心の變る動機が少し突然で、一好なる人間の心底が知れない、今少し之を明かにする必要があつた。（選者評）

「左樣なら……」

唯一言を名殘に右と左に別れたのである噫此れがもう名殘か操子は人しれず涙にむせんて歌子が彼方の森にかくれる迄見送つた。

＊　＊　＊

操子は月三更の時分に家へ歸つた。噫御母樣は寢て居らつしやるに、お父樣許り一人お起きになつて用意をして居らつしやる……之れが眞の親とまゝ母との差別か、夜は明けた歌子は今や露を踏て操子の家を訪れて停車場迄見送つて互に既往將來を語つた。

汽笛一聲、汽車は出た、車中は操子と他の人五六人である。

「お父樣もお躰を……」

「あゝ御まへもね」父も眼をうるほした。

「歌子さん、それては……お躰を……」

「操さんもお大切にね……左樣なら又日曜にでもお遊びに……」

「有難う御座います」

汽車は出た、未だ操子の白い「ハンカチーフ」は風に動いて居る。



雨の渡し（選外）　備中　濱田郁子

別れを叙するに餘裕のある處、女性的の精緻な觀察、讀者を感ぜしめる力は充分ある、但だ深い處の無いのは、少女の作として却つて愛すべく、女性的作品として本篇も亦當選上の一席を占むるに足る（選者評）

○心の底

神奈川　中村三重子

第一

此頃千賀田一好は、愛てふものを忘れてか、眼を閉ぢて腕こまぬき、唯物思にのみ乖籠めて居る心の中の測り難さ。妻の操子は此仕打が、悲しく愁く心苦しく如何にして慰めやうと、有らん限りの赤心を盡せど、良君の心は解けざるのみか、其疎々しさは日毎に増り行く斗り。今日も朝から例の樣子、物も言はねば

食事もせず、あゝどうしたら能いのだろう、

「あの、御飯に致しませうか、お午飯も召上らないでお腹がお空きになつたでせう？」「いゝや」一好は案の如く頭を振つた。

「少し召上れな。良君のお好な物を造らへて置きましたから」と無理に淋しい笑顔をつくる。

「僕は何も欲しくない、操さんだけお喫り！」と卒氣なく言ひ放つて、つと立上るや帽子を掴んで、

「羽織を出しておくれ」

「は……。何處え……」

「何處だか分らん」「其じや絣ので能う御座んすか」

「何てもよろしい」と冷か。操子は手早く箪笥から出して、後から着せかけながら「西田様？」（友の名）

「何處だか分らんと言つてるじやないか」と荒々しくぐいと袖を通して外に出て了つた。

後に操子は一人敢果な氣に立上つて、茶の間に据えたチャブ臺に向つては見たが、やる瀬ない思ひにはらはらと涙溢れて、果は忍音に泣くのであつた。

第二

用水堀に沿ふた竹藪を後に、一軒の小さな藁家がある。向頭巻きて藁を打つて居た色の黒い、併しりんとした顔立の男、女房の貌をちらりと見て、こう言ひながら猶一層力を入れてスットン、スットンと打初めた。

「あら米さん、私別に欲しいたア言はねいだよ、唯……」「唯彼金が自分のならよかんべいていのか、はつはつゝゝ、金は世間え……」「預け置くかね、はつゝはゝゝ」此度は妻に言葉尾を取られて、夫婦は共に笑ひこけるのであつた。

一好は胸の煩悶を夜風に吹かせんと、月の光りを浴びながら横手の細道に佇んで、計らず二人の聲に耳傾けたのである……。引入れられるやうに。

「だアけんどこうは言つてもなアお安」お米さんは急に調子をかえて、打て居た藁を索い初めながら、

「己だつて時々思うとがあらア、今に鎮守様の祭禮になるというに、帯一筋手前に占めさせるとも出來ねえなんて、何てい意氣地無だんべい……」と妻は打けす様に手を振つて、「およしよ米さん、鎮守様のお祭りなつても、妾や夜一寸お詣りに行きアいゝんだもの、帯も着物も入用るもんかね、此取付き財産でお前……」としんみりとして來た。「大概左様思つてゝ呉れべいと思つたゞが……。己ア手前さへ其了見で居て呉りや、是なり一生終つても口惜しいたア思わねえ。大

黒樣の繪紙が千束でも二千束でもマッチ一本で灰だからなアはつゝゝ」、「左樣ともね。其があるの無のつて泣いたり笑つたりする人の心程、分らないね」と爽に言つて、がらゝり戸を開くと、目さむる樣な月の色。

「米さん！お月樣は何處も同じにお照しなさるよ」

「左樣とも」言ひながらうーんと伸びて、ひよッと首を出した。あゝ其顔！笑まし氣な其口！夢見る樣な其眼！そこに限りない平和の色が漲つて、月を仰いだ二人の姿が、一好の目には如何に神々しく見えたであろうか。

第三

「あゝ僕は操さんに何とも謝する言葉がない」

「あら良君。何ですの」操子は夫の機嫌が直つて、嬉しさに胸は躍る。「何つて僕は實に今夜で目がさめた、と斗りじや分るまいが」と一好は、藁家夫婦の睦しい交情や物語りに、一種の感に打たれたと杯話して、

「お前が是迄の心盡しを少しも思はないで、只一筋に貧乏が厭で、今更結婚したのを悔んだり、操さんの親切が癪に障つたり、隨分今迄は辛かつたろう」「いゝえ、皆妾が行屆かなかつたんですわ」「いゝや左樣でない。併し操さん、是からは安心するがいゝよ、僕はたとえ草鞋作りになつても、操さんを愛するとは堅く誓つて置くから」「マア其程迄に……」と操子は夫に犇と緊つて、嬉し涙に咽び入つた。空はます〱澄み渡つて、月は笑まし氣に此二人を覗いて居る。

第二の藁家夫婦の物語も好し、第一の操子の苦衷も憫むべく描かれて居るが、只一好の心の變る動機が少し突然で、一好なる人間の心底が知れない、今少し之を明かにする必要があつた。（選者評）

はがき文

編輯局選

特別第二賞

○母様のお小言

横浜市中村町　寺田光子

萩の小窓にふとよりかゝつて朝露をながめて居ると、「早く袷を縫つてしまはないとぢきに寒くなりますよ」と母様の御聲。私は驚いて窓をしめた。

秋に驚くは萩の下風のみかは

特別第三賞

○小包

愛知縣中島郡豐田村ノザキ　顯明

家から小包がとどいたので、あけて見たら飛白の單物二枚、傍に縫絲と針二本、又小さな紙包に水蒸の痕やさしく母よりと、中に寳丹膏二貝。

鳥に踏まれな、溝に落ちるな

天

○月末

今紫久子

あら今月のお錢の餘り方どうしてまあこんなに、あゝ知つた頭飾を一切やめたもの、實にそふだつた、それに此度はお隣の可愛相なお婆さん迄に慈善する事が出來た。たつた是れ丈の餘金でこんな嬉樂が買はれるのだもの。

知らず諸嬢の月末は如何

地

○雨つづき

福島縣双葉郡廣野村石井勘方　石井薔薇子

二番田草の其頃から來る日も來る日も雨ばかり時には先達の様に疊を流す様な洪水、母様は毎日毎日これでは今年の作も！　と御嘆き妹は「姉様もう晴れても好

のねお日樣も過酷だわ」と。

僅に四行の文字、一浮響なし

噫また雨のもる音がする

急に氷の國へ來たやう、せい〳〵する

廣く其人をあらはせり

人

○雲　刀根の河邊　清月

またたく、ひまには、山を掩ひ、うち
みるひまには、海をわたる、あやしく、
奇しき雲に、あや、にしきの、色あざ
やかなる、幕、たれしかと見るまに、
御空は大海原、こゑせぬ、浪さかまく、
あやしく、奇しき雲よ雲よ

本號、自然文の白眉

秀逸

○好きな學科　上毛　すみれ子

私の最も面白く、好きな學科は、地理と。數學です。地理は其の地の樣子や、日露の大小の事など分り。又數學では、どうも難しい問題などの解かれた時は、夏の蒸暑き所より、



根津權現

○晝の星　伊藤　松月女

私の鄕は極く田舍故、日中に、浴衣を着て居る者の、なきためか、私が餘りの暑さに、浴衣着て、居りますと、母樣が、晝出た星の樣だと、仰しやつた

して見ると東京の夏は晝の星が降るやうにある

○眼前　安齋　池の子きよめ

お父樣は今新聞を讀んで入敬る、お母樣は裁縫をして入敬る、兄樣は英語のお復習、姉樣はお茶のお稽古をして入敬います、武さんと菫さんとは今敎師が入敬いましてお稽古最中、私は女子文壇第八號を繙いて居ます、

おやしきは賑いてせう

○私の腦中　越後　花心

私程幸福な者は無と思ふ、何故といへば世の中に有とあらゆる心配難儀をしたが、其結果は皆理想通になつた、然しまだ金が餘る心配をした事

かない、それは私の脳中に、「私に貧も富も與ふるな唯満足を與へよ」の古語が有からだ

好箇座右の銘

○照子の葡萄　江口春子

朝起きると顔も洗はずに、姉さん葡萄を取るんだから抱いて頂戴なと、口癖になつた照子の、昨日取りつくしたのを忘れて、今朝また抱かれて葡萄棚の下に行つたが、あはれ紫の珠は一つも無い

ハイカラ式に書かざりしを多とす

○別れの涙　山口千代子

うつくしき黄白の二羽の蝶は庭の夏水仙の花の上にて昨夜は宿りぬ、あかつき、花の涙は蝶にかかり　蝶の涙は花より落ちて地にしみこみぬ。

麗かなれ

○病院の一夜　牛込　服部けさ子

うつら〳〵として今日もくれし雨の日、ふと目を開けば月はいつか昇りぬ。我腕のやせを我と右手に廻してみる折しも階下の室よりは讃美歌の聲。

讃美歌も此處にして多大の慰藉あり

○桑摘み女　府下　森田なか子

夏のお日様を浴び乍重ひ桑籠を背負て歸る道傍にお母さんの好なキリギリスが鳴いて居ますから是こそはと思つて忙て過ぎたのでパッと飛れてアレ惜しい事をと見かへる側に莓がなつていました

なか〳〵忙しい

○かたみ　鳥取　上山千重子

唯一人の姉上に別れて幸うすき夕、思ひ出多き月に形見の手箱ぞと蓋取れば、夢なれや幾年の昔、嫁せ給ふ君が重き髻にかゝやきし櫛と笄　いまも燦爛として我が目を射る、秋深うして虫の音の亂るゝことよ。

文章にあやあり

○愛蠶　安藤さゞなみ女

私の愛してる蠶に桑を與へ乍ら見惚れて居ると桑を食ふ蠶、小さき頭を振つて桑を求めてる蠶、早きは初眠につきたる蠶、其の眠れる姿は嬰兒の眠れる其れにも似て　私は不覺愛妹を手招ぎて、蠶の可愛のを御覽よ!!

女人の菩薩眼

○十五夜　芝　やす子

そら兄さんが、薄を持つて來た、兄さん栗も、あつたかい、嬉しいな、あゝ姉さんお團子を早くこしらへないとお月様が怒るよ。としたり顔の弟、ほんとに喧しい

見だねえ、と叱られて、だつてお月様が出るさうなのに

兒童心理學者も知らざる處

○富士山を惜む　秋田　千代子

日本の西海岸は、だん〳〵削られて、東海岸に殖ゑるさうです、さうしたら、いつか日本一の名物な富士山も無くなりませう、それが案じられます。

其時分に人間が居りませうか

○十五の妹　秋田　出羽雪子

秋雨蕭々と降る夜、妹は孝女白菊の歌を讀んで、終クスン〳〵泣くのであつた。妹は今年十五なのである。

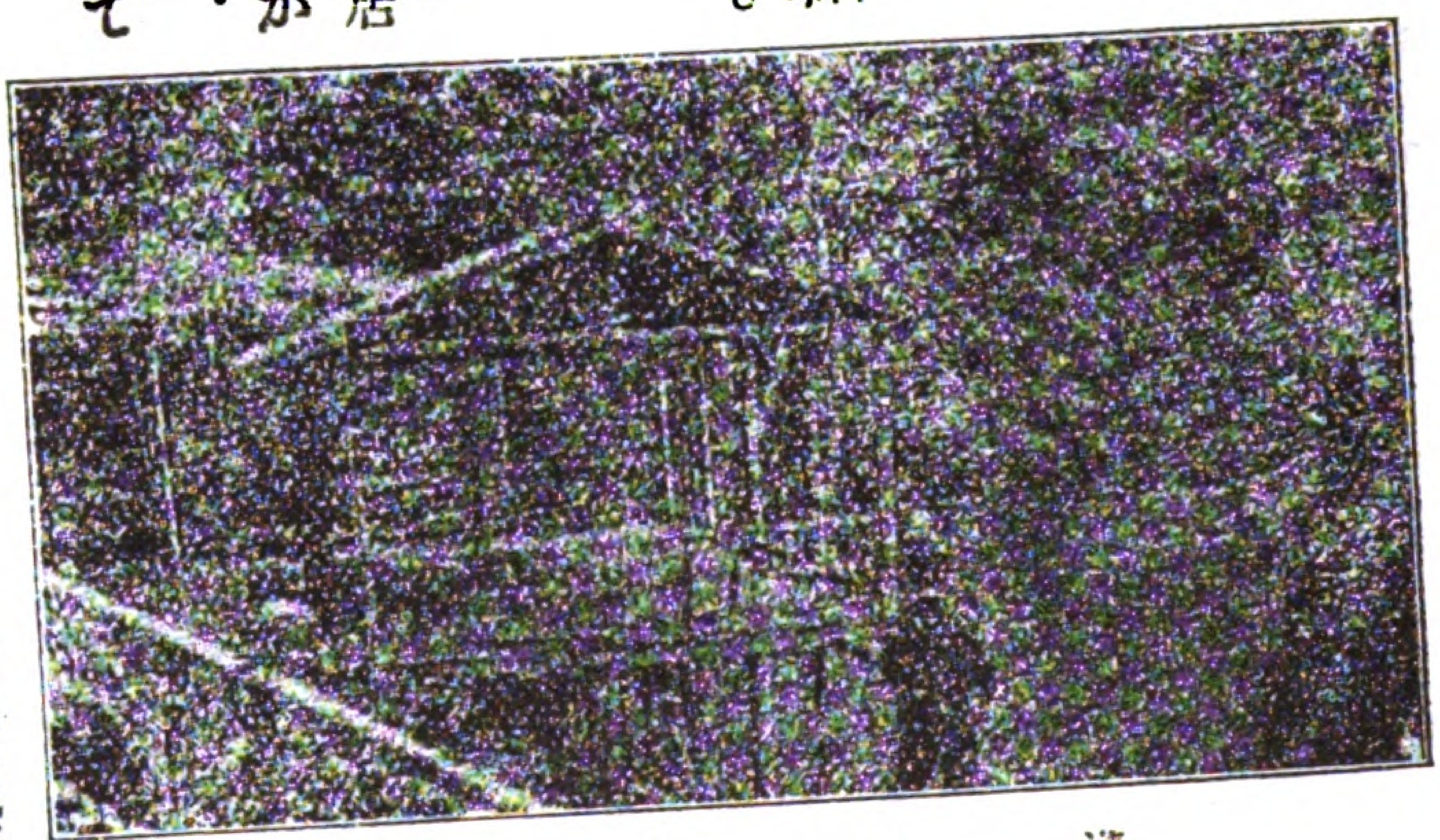
落合氏地下に冥す

○あはれくもの巢　愛知　紫雲女

それは〳〵圓くきれいにつくられて居た小さな蜘蛛の巢は昨夜の大雨て穴があいてめちや〳〵にこわされました、蜘蛛の子は一所懸命にせつせと繕つて居ます。

蜘蛛の巢を繕ふは天晴るゝの兆なり

○よそながら　大阪　梅本やよひ子



蘆の川（其一）

綾子さんの御兄樣は奉天の戰に戰死せられました綾さんはそれをよいことにして此頃夜になると角帽の學生さんと中之島公園を散歩して居られます、で妾は女子文壇九號の小說女渡守に赤い印を附けて送りました

これ亦女子文壇の頌德表

○音樂　鹿兒島　柳子

此頃の月の淸い夕虫の音に耳傾けていますと前の奧樣の月琴後の女教師樣のオルガン隣りの孃樣の小琴向ひの翁の薩摩琵琶少しあちらの紳綴のどなり聲等かはる〳〵耳に入る之座ながらの音樂會ではないか

月細き昏の西片町あたり

○柿の接木　神奈川　寺野英子

今年七十三と云ふ隣の御隱居が柿の接木をして居られる貴老喰べられる御積りかと云ふと己には子もあるよ孫もあるよと笑はれました。

問ふて愧づ

○私の唱歌　秋田　茂子女史

のねお日樣も過酷だわ」と。噫また雨のもる音がする

僅に四行の文字、一浮響なし

急に氷の國へ來たやう、せい〳〵する

能く其人をあらはせり

人

○雲

刀根の河邊　清　月

またたく、ひまには、山を掩ひ、うちみるひまには、海をわたる、あやしく、奇しき雲に、あや、にしきの、色あざやかなる、幕、たれしかと見るまに、御空は大海原、こゑせぬ、浪さかまく、あやしく、奇しき雲よ雲よ

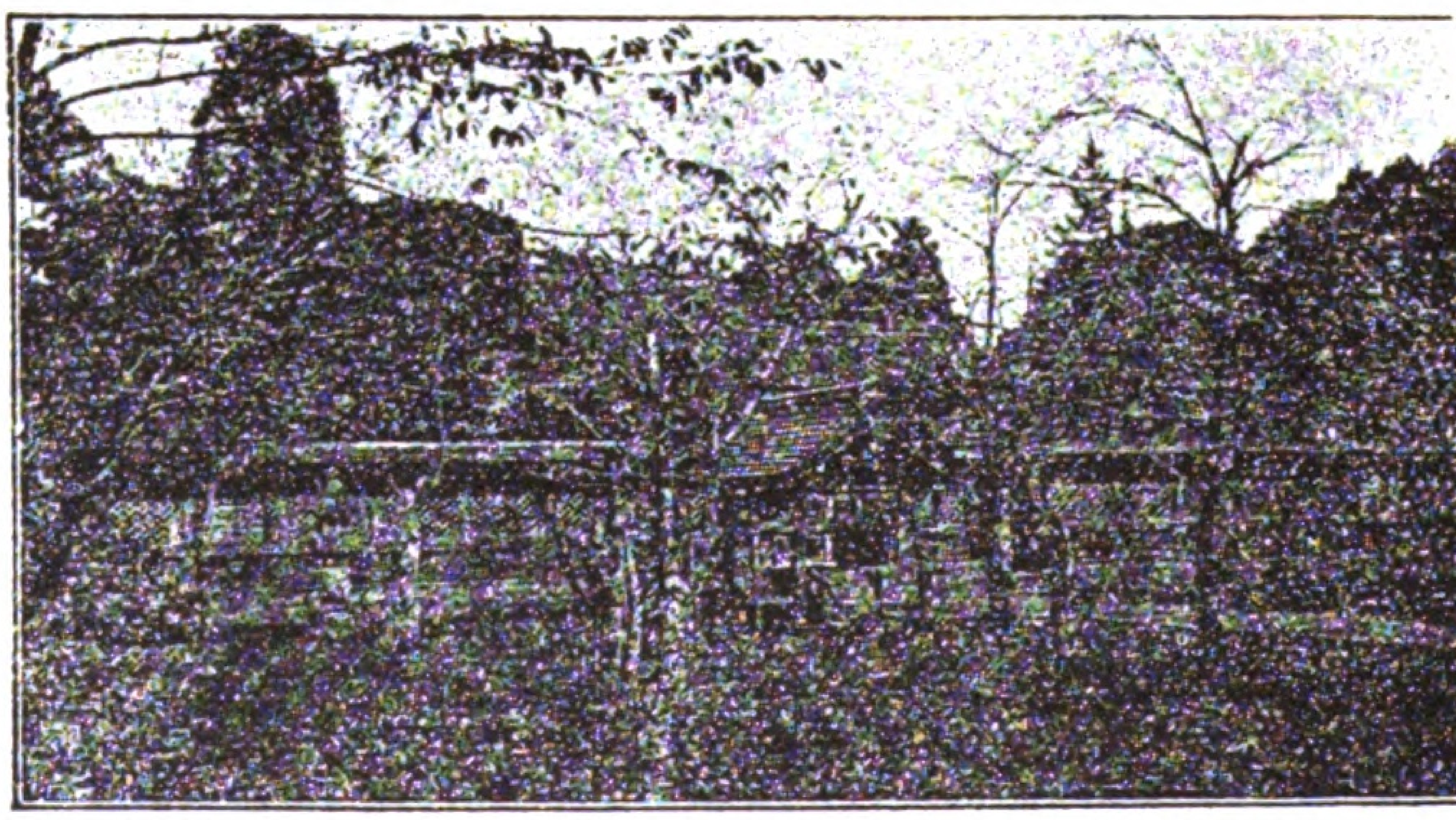
本號、自然文の白眉

秀逸

○好きな學科

上毛　すみれ子

私の最も面白く、好きな學科は、地理と。數學です。地理は其の地の樣子や、日露の大小の事など分り。又數學では、どうも難しい問題などの解かれた時は、夏の蒸暑き所より、



根津權現

○晝の星

伊豫　松月女

私の鄕は極く田舍故、日中に、浴衣を着て居る者の、なきためか、私が餘りの暑さに、浴衣着て、居りますと、母樣が、晝出た星の樣だと、仰しやつた

して見ると東京の夏は晝の星が降るやうにある

○眼前

安藝　池の子きよめ

お父樣は今新聞を讀んで入被る、お母樣は裁縫をして入被る、兄樣は英語のお復習、姉樣はお茶のお稽古をして入被います、武さんと菫さんとは今敎師が入被いましてお稽古最中、私は女子文壇第八號を繙いて居ます、

おやしきは廣いでせう

○私の腦中

越後　花心

私程幸福な者は無と思ふ、何故といへば世の中に有とあらゆる心配難儀をしたが、其結果は皆理想通になつた、然しまだ金が餘る心配をした事

がない、それは私の脳中に「私に貧も富も與ふるな唯満足を與へよ」の古語が有からだ

好箇座右の銘

○照子の葡萄　江口春子

朝起きると顔も洗はずに、姉さん葡萄を取るんだから抱いて頂戴なと、口癖になつた照子の、昨日取りつくしたのを忘れて、今朝また抱かれて葡萄棚の下に行つたが、あはれ紫の珠は一つも無い

ハイカラ式に舊かざりしを多とす

○別れの涙　山口千代子

うつくしき黄白の二羽の蝶は庭の夏水仙の花の上にて昨夜は宿りぬ、あかつき、花の涙は蝶にかかり　蝶の涙は花より落ちて地にしみこみぬ。

麗かなれ

○病院の一夜　牛込　服部けさ子

うつら〳〵として今日もくれし雨の日、ふと目を開けば月はいつか昇りぬ。我腕のやせを我と右手に廻してみる折しも階下の室よりは讃美歌の聲。

讃美歌も此處にして多大の慰藉あり

○桑摘み女　府下　森田なか子

夏のお日様を浴び乍重ひ桑籠を背負て歸る道傍にお母さんの好なキリギリスが鳴いて居ますから是こそはと思つて忙て過ぎたのでパツと飛れてアレ惜しい事をと見かへる側に苺がなつていました

なか〳〵忙しい

○かたみ　鳥取　上山千重子

唯一人の姉上に別れて幸うすき夕、思ひ出多き月に形見の手箱ぞと蓋取れば、夢なれや幾年の昔、嫁せ給ふ君が重き髷にかゞやきし櫛と笄いまも尚燦として我が目を射る、秋深うして虫の音の亂るゝことよ。

文章にあやあり

○愛蠶　安藝　さゞなみ女

私の愛してる蠶に桑を與へ乍ら見惚れて居ると桑を食ふ蠶、小さき頭を振つて桑を求めてる蠶、早きは初眠につきたる蠶、其の眠れる姿は嬰兒の眠れる其れにも似て私は不覺愛妹を手招きて、蠶の可愛のを御覽よ!!

女人の菩薩眼

○十五夜　芝　やす子

そら兄さんが、薄を持つて來た、兄さん栗も、あつたかい、嬉しいな、あゝ姉さんお團子を早くこしらへないとお月様が怒るよ。としたり顔の弟、ほんとに喧しい

見だねえ、と叱られて、だってお月様が出ないもの」

○富士山を惜む　秋田　千代子

兒童心理學者も知らざる處

日本の西海岸は、だん〳〵削られて、東海岸に殖ゑるそうです、そうしたら、いつか日本一の名物な富士山も無くなりませう　それが案じられます。

○十五の妹　秋田　出羽雪子

其時分に人間が居りませうか

秋雨蕭々と降る夜、妹は孝女白菊の歌を讀んで、終夕〳〵泣くのであつた。妹は今年十五なのである。

○あはれくもの巣　愛知　紫雲女

落合氏地下に冥す

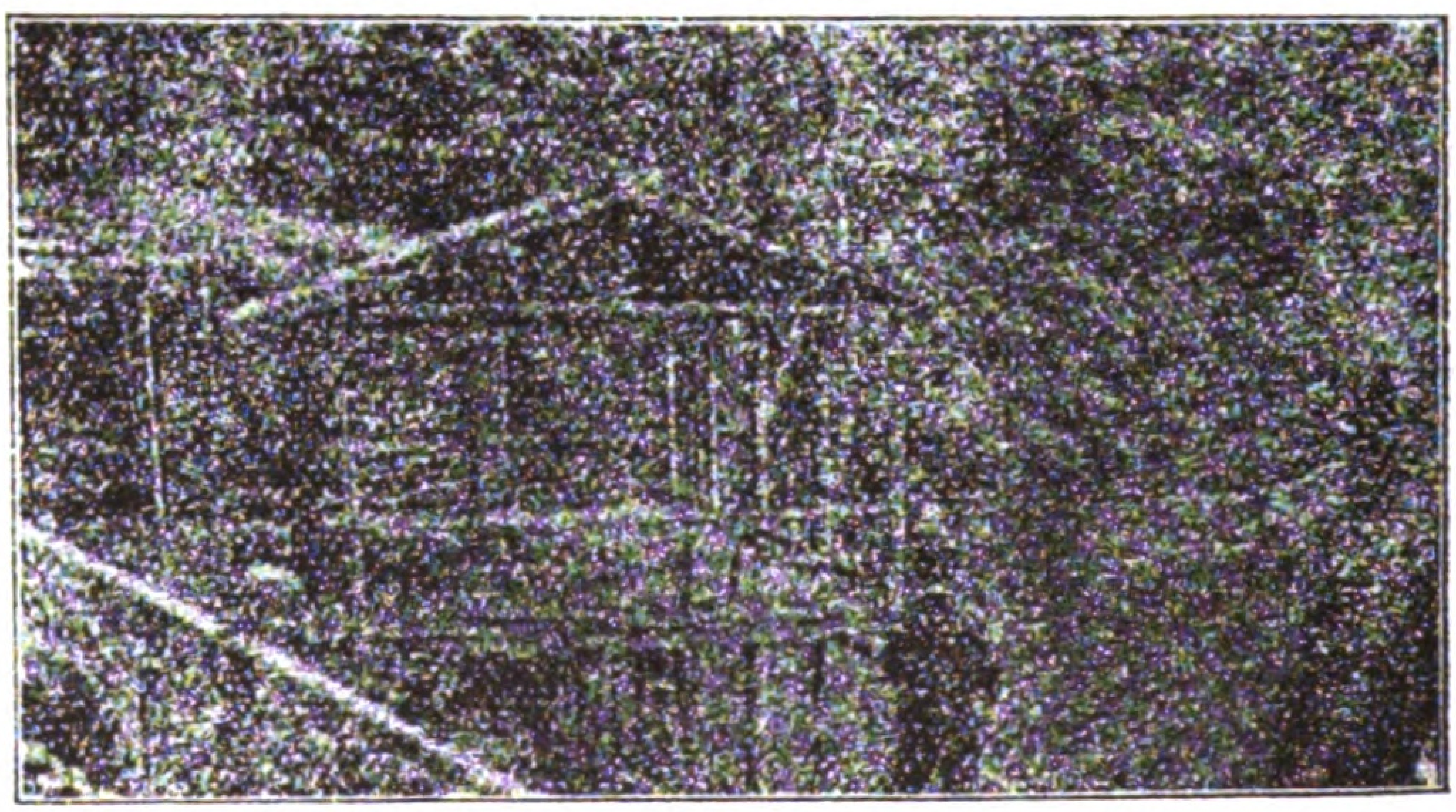
それは〳〵圓くきれいにつくられて居た小さな蜘蛛の巣は昨夜の大雨て穴があいてめちや〳〵にこわされました、蜘蛛の子は一所懸命にせつせと繕つて居ます。

蜘蛛の巣を繕ふは天晴るゝの兆なり

○よそながら　大阪　梅本やよひ子

紀子さんの御兄様は奉天の戰に戰死せられました綾さんはそれをよいことにして此頃夜になると角帽の學生さんと中之島公園を散歩して居られます、て妾は女子文壇九號の小説女渡守に赤い印を附けて送りました

之れ亦女子文壇の頌徳表



瀧の川（其一）

岡ふて悦づ

○音樂　鹿兒島　柳子

此頃の月の淸い夕虫の音に耳傾けていますと前の奥様の月琴後の女敎師様のオルガン隣りの孃様の小琴向ひの翁の薩摩琵琶少しあちらの神經のどなり聲等かはる〳〵耳に入る之座ながらの音樂會ではないか

○柿の接木　神奈川　寺野英子

月細き黄昏の四片町あたり

今年七十三と云ふ隣の御隱居が柿の接木をして居られる貴老喰べられる御積りかと云ふと己には子もあるよ孫もあるよと笑はれました。

○私の唱歌　秋田　茂子女史

鈴虫は、小ひさくても、よく歌ひます、私は人に生まれても、唱歌の點は、いつも優れません

鈴虫は誰に敎はつたでせう

○朝の出來事　早稲田　小島濱子

明日は日曜樂しい日と、昨夜夢中に云つて居つたと、起きるとすぐに母に笑はれ、大急ぎでお化粧して、危く鏡臺を轉倒かへそうとしましたが先づこれも無事、お友達の家へと立出る途端、蜘蛛網がさつと妾の顔へするとが蝶の命も助かりました。

不用意に仁を施す

○兄さんの理想　周防　美水女史

妾の兄さんは去年中學を卒業されましたが「こゝ五六年の中に自分の目的物に向ふ端緒を開かなければ此の生存競爭場裡を去つて自分が好な一孤島の漁夫になる」と云つて居られます

反對ですか

○天長節　愛知　平野樂雄

十一月三日の朝とく起き出でつゝ一家打揃ふて、新米の飯炊ぎ日の丸の國旗を軒に掲げ、君が代も千代も八千代に榮えませとぞ、祝ふ事こそうれしけれ。

標雅・

○都より　東京　露の花

秋の風は冷く候、秋の色は寂しく候、秋の花は哀れに候、秋の雲は暗く候、秋の水は白く候、而して秋の都は悲く候。かしこ。

いづこも同じ……

○田舍より　八王子　菜女

烏瓜の灯今風に奪はれて候、葡萄棚には房なりの實の月の光をあびて誠に美はしく美い坊は其の下にて行水を致し居り候、ことゝゝと水車の音の聞え候、なゝ其處には與作と云ふ面白き翁の一人住み居り候、

所謂田園趣味

○妾の希望　西京　紅葉女史

佐保姫、龍田姫此の二人の内に妾が加つたならば全世界に錦を張らんものを、あゝなぜ妾は生れて來なかつたであらう佐保姫の妹に、龍田姫の姉に。

○虫聞　筑前　堀芳子

七草の花飾めて立派に建てられた秋の堂に、毎夜樂神が天降て澤山の虫を集め美しい聲で歌を教るといふので、そつと忍んで耳澄すと不思議！それが私にも聞へる、ほんに夢のやうな麗しい心地。

○あはれの不具者　京都　早歌

妾は通學の途中で毎朝二人の眞黒な目鏡を、かけた學生に逢ふのです、聞けば彼等は盲啞院の生徒で、全くの盲人であるとの事、嗚あはれ！彼等は自ら強ひて不具なるを醫そうと勤めて居るのである。

○蛙　近江　御園その

秋のしとれにゆら〱ゆらぐ梧桐の葉に、手足もあやうく雨やどりする蛙、今に風ふかば葉はあえなくうち果てんものを、　佐賀　眞木かち子

○軒下の雀

私の書齋の軒下で、いつも夕影になると澤山の雀があつまつて、おしやべりをしますからお前達は何事を語り合ふの、と言ひましたらはら〱と飛び出してしまひました、

○誌友諸姉へ　鹿兒島　村山清子

今年拾四になるひでさんとたまちやんから無事で勉强してよ又讀み古しの雜誌を送て頂戴なとの手紙妾は每月女子文壇を送る事を約した而して每號投稿して兩人に賞められ度と思ふ

○歸京　武藏　眞藤とう子

五十日の暑中休暇は誠に面白う遊びました、私はまた東京へ行つて勉强せねばなりません、今日は故郷を別れの日です、珠ちやんは私に早く東京へ行きたいわと宣いましたか、私は故郷に居たいと答へました。

○山雀　信州　央竹

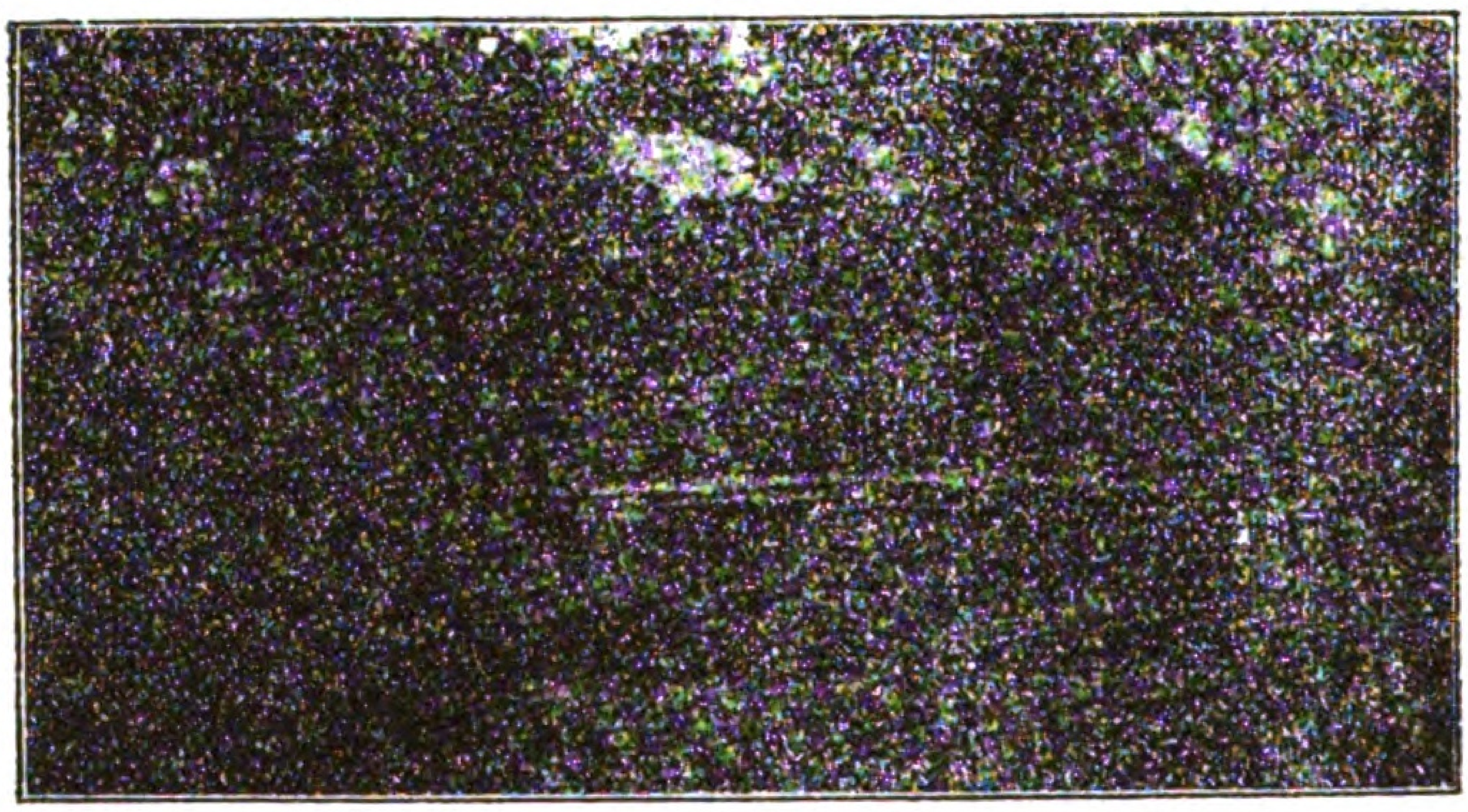
稽古してから二日目、一時も忘れられないと云ふ妾の大切の〱山雀を、自分の好奇心から餌をやろうとして、ついにがしたのを、妾はおこりもしないで、只目に涙をいつぱいためておりました

○黑潮　愛知　田島顯子

黑潮あり、黑潮盤あり、東西兩半球を貫通して永遠の生命を流動せしむ、風よ、雨よ、霰よ、雪よ、東より、西より、南より、北より、此大なる潮に憧がれて來よ。

○太郎さん　弘前　しらいと

アラ、またあふむがいつてるわ、白玉や、お前もそんなに太郎さんがおすきなの、おとまお可愛いの以えと。わたしは、あふむのおごを抱きしめました。あゝなつかしい太郎さん。



瀧の川（其二）

○戻り道　麹町　細川とし子

今朝の茄子は大きくて色がよいとて殘らず賣れた。此れで祖母樣に、何買つて上やうか。あれ〱大のお好な麥饅頭。あゝそうだ……ても御齒をお痛めなりはしないかしら。

○寂しい物　安城　田舍娘

犬の遠吠、夜の音、小川のせゝらぎ、月の聲、風なきに鳴る軒の風鈴、病人のお念佛、神のみ社に夜籠りしたる、燈火のほの暗きそして妾の一番寂しかつたのは夜寺に一人和尚樣を呼びに行つた時の己が足音

○盲人の案内　名古屋　中村よし

何氣なく前より來りし人に友の家を問へば。あはれ此人盲人なりし併し「一町西へ行き南へ曲る角」と親切に敎へられ妾も一禮しておやぶみつゝ行けば果して其家。

○あけぼの　備後　四松女史

神の秘間に耳かたむけつゝ例のお庭に出て今朝初めての姫百合に接吻した。葉末の清ひ涙は私の紅の袖をいよ〱濃く染めたあゝまろで久子樣の文を讀み返した樣な

○妾が境遇　靜岡　佐藤靜子

花の都の手振も知らず、稻の作に手も足も泥に汚れ流るゝ汗も拭はれぬ田舍者の姿よ、さはれ、實の粒々と太り穗も撓はに穗を垂れて、目の限り、畑に彩色し靡擬亂す秋風の、足下に寄る稻の穗浪、

○林檎畠　兵庫　柳田のぶ子

父上と共に歸鄕した、甲斐ありて今年はたくさん果實を結んだ林檎畑を見廻りながら裏の牧場へ來ると來ると早く見付けたやぎ羊鷄等が嬉し想

に吾先きにとかけて來るんだもの眞實に可愛くつて

○十八日の夜　岩代 伊藤よし子

いそ〲とやい子の君は來りぬ、共に笑ひ共に泣き好きなもの嫌ひなも各入つを定め、友は十時といふ頃再た庭の鈴虫を驚かして歸りました、中止したご飯を二度いたゝいて妖物の夢などみん樣にと胸より手を落して寢た

○戰地之兄上　岡山 吉田いさ子

梢を拂ふ風も身に染み、身體に綿入を裝ふ頃小雨しよぼ〲と降る夜、母上と唯兩人、火鉢の傍に座し何と寒い事、さぞ兄さんは……懷ふのは、戰地の兄上。

○俄雨　京城 某女

室内の俄にくらくなつたのに氣がついてふと向ふ見ると今にも雨が降りそうな、暑い風が吹き去たと思うと非常な勢でザア〲と降り初めた、今迄面白そうに遊んで居た韓童は泣き叫びヒヨ〲と急いて去つた。

○氣味あしき物　金澤 森井せき子

横町のお虎ばあさんの顏、奥庭のつがいの青大將、人氣りなき夜道に男子に行會ひたる時、露助の笑顏、夜中犬の遠吠、首く〻りの人を見たる時、暗中に猫の目の光りたる、影女房の話をき〻たる時。

○日記の一節　宮崎 澤田水蝶

隣家の垣の方を天女が益々紅み塗り初めた。すると隣の早起き老人が、例の花を鋏む音が聞え初めた。あゝ思ひ出て多き今日の朝よ。

○折れたる菊　奥田ふい子

父が愛菊、昨夜の大風で庭に廻らした土塀が崩れたが哀れや菊は下となつた。下男等は主人の大切な菊が下になつたと掘り出しに掛つた。

○今年の虫干　兵庫 飛早女

今日は忙しい虫干。昔御殿女中だつた祖母樣、美しい衣裳を出して、十萬石の年中行事を、くど〲と毎年くりかへし仰有る。ちつと聞くのは貳坊丈だつたが、あゝ今年はもう聞かれない。

○秋の朝　天鹽御町 さかえ子

此處田舍の田畔道日は漸々東の山に差しかゝつて前の池後の小川に小さき金波を立たせた面白の小雀は實のりし落穗を、ひろひては飛びひろひては飛び實にや豐年の秋景色。

○勝ぐり　山梨 内藤とし子

郵便！　文壇を讀んで恍として居た私は驚き振向けば、小包而も國から、解くまも待遠しく開けば、懷かしや母が眞情こめたる袷!!!　一寸引かけ樣とすれば、發々として落つる勝ぐり三つ。

○華族の姫樣　石見 松が枝

姉さん華族のお姫樣つて額に黑子を入れて衽衣着て厚い座蒲團へ座つて居るのじやないのね、やつぱり姉さんと同じ樣な姿してよとは愛ちやんが海水より歸つての話

○姉さんへ　長野 山里彩子

姉さん、お庭の白菊がよう〲咲いて、あるかないかの夕風に、ほのかに薫つて居ます。お母さんの靈がこもつて居るように思はれてよ。

○家政の稽古　京都 木村滿子

妾は此頃兄樣の新宅でお嫂姉樣の出來るまで家政のお稽古をしてゐます何だか急に面白樣で恐しい樣で妙な感じがしてよ朝早くからお兄樣のお辨當と自分のとして兄樣はお役所へ妾は學校へお留守は母樣に

○桔梗の言葉　京橋 萩野雅子

太古、高い〲御空の星が如何したのか露を含んでいる野の叢の葉に落ちたのを、優しい秋の女神の御手に拾ひ上げられたのが妾等桔梗の出來た基いてある。

○二羽の目白　備後 池田啟子

日曜の朝お友達と二人田圃道を通りぬけて向ふの小高い山に散歩して居ましたら房々と熟した「カラビ」の實の下に二羽の目白が頭を羽の下に入れて寢て居ました。

○雨　出雲 漁女

天は無情だ。あゝ鬱陶しいと、たてこめてあつた障子を、意地わるくあけると、眼ひきや、いつのまにか、西の方にはお日樣が、うれしげな光

りを、放つてゐる。

○虫 質
神田大崎光子

今年この村に十八年目といふ虫賣の翁。はや年越ゆれば復は來られぬ老よと打語りぬ。慰めむとして册許すれば、月は寒き雲に隱され、籠への虫は秋をかき交ぜて鳴きしきるなりけり。

○朝の仕事
宮城秋風子

私は毎朝〳〵お父さんと弟と三人で庭の芝生に行。先お日樣を拜しそれから、一二三四、二二三四、を初める、するとお母さんニコ〳〵して、菓子を御もち遊ばさるの、

○汽車の中
岩代服部良子

いゝえと固辭するのも聞かずに席を讓つて與れたのはもう餘の風みかけた、お婆さんでした。ところへ又一人、片足の負傷兵がは入つてきました。が、依然、車中の人は見むきもしません。身動きもしません。

○田園生活
豐後田仲保子

秋風そよ〳〵と吹く田畑道を、鼻唄歌ひながら歸つて來た農夫は、己の一日の務をすまして、椽端にごろり横になり、大欠伸一ッして見上げた空の東には、早や宵の明星が輝いて居る。

○妾女乞食
羽前高橋汲子

恰度黄昏時分でした、妾が狐塚と云ふ炎手の小杜を散歩爲たんでせう、所が、稻荷堂の蔭より飄と脊認めた生首が顯れたので、妾も眞青に成つて驅け戻りました。そしたら赤飯竊みの女乞食よ

○清い樂み
麻布おちば

妾は小學校を卒業してから一日も樂しい嬉しいと思つた事はありませんのにふと赤十字社の看護婦にならふと思ひついた時其時程心のすゞしい嬉しい事はなかつたが矢張此所も浮世でしたもう此世界に嬉しい清い所はないのでせうか

○流 水
周防楓子

源は小さき〳〵泉より溢れし玉のそれなるを、一萬餘噸の大艦を木の葉の如く弄んで遂にわが見上をも千尋の底に飲みたるも此の水。

○秋海棠
備後伊和子

あら、庭の秋海棠の花が大變落ちてよ、おや下に蛩が居る、今おりたんだれ、まあ奇麗な事、青い草の上に赤い花瓣、雷まて居て、ほんとに繪の樣です

○ひとりごと
攝津白椿

昨日芳川さんのお宅へ行つたら、奇麗な貭着が、美しう仕立てあつた、白と、赤と、黑と、あれは花子さんのお嫁入の着物、内へ入らつしやる、お姉樣のも、あんなのかしら、早く見たいこと。

○さらば
久留米巴陵女史

さらば、わが古里の山や海や。はるかなるはいづ方の燈し火ぞ、ひめふり山の影もわをし。おぞやかよわの女の身に海外留學の任ぞ重き。さらば、さらば。一句を書いて風に投ずれば、夕風靜なり玄海の浪の上。

○寺にて見たる
備後しらはぎ女史

合掌瞑目して眞にありがたそうに說敎を聞いて。居る女の膝には、二歲ばかりの男の子が、すや〳〵眠入つて居る。折々其櫻色の頰に笑を浮べるのは何を夢みて居るのだろう

○小 川
愛知品子

田の面は照る日に、青々したる稻葉も殆んど枯死の有樣。我が家の脊戶の籔蔭を流るゝ小川。水は淸く淀みなく、樂しげなに小魚凉しき藻草に見えつかくれつ、あゝ。友に離れし此一月唯一の友は此小川よ。

○人 心
上毛露竹

我は、小學校を終へて、一年を、田舍に過し、後、この女學校へ、入學しましたら、同窓の、たれも、かれも、御手紙下さいました。田舍にありました時は、返事一ッ、下さらなかつた、方も。

○お月見
栃木いさを

待に待て居たお月見もいよ〳〵今夜、弟秀雄は御庭の柿や栗を取る役、兄さんは芒やお花を尋ぬる役、父樣は屋敷のお手を取る役、そうしてお母樣と私はお團子を造る役。



讀友俱樂部

○諸孃と記者

○私の内では御母さんと私と妹と三人一緒に投書するのですよ字が能く似て居るのは私が代筆するからなのです一人が名を變へて出すのではありませんよ（露子より）（記者曰、之は珍しい事を承ります阿母さんと御姉妹で投稿なさるとは實に感服の外ありません、何んなに樂しい家庭だらうかと想像されてお羨ましい）○記者樣及び皆樣に申します女子文壇一號よりの愛讀者小原雪枝さんは十七歳を名殘として去る九月六日黄泉の客となられました、雪枝さんの辭世は「これやこの十七年は夢にして歌につくせし血は赤かりし」と云ふのです、三日前に血をお吐きになつた時です以上は御家族からお知らせがあつたのです（北海道早來本郷直枝子）（記者曰、多數の愛讀者の内には斯る不幸な方もあるでせう、生前本誌を愛讀されたお孃樣だけに記者一同深く哀悼の意を表します）○記者先生私は此度はじめて投書いたすのですからよろしく願ます農家のことゝていそがはしく勿論一夜の作故拙いのは言をまたずですけれどもこれからもつとめて失望せず毎月投書しますつもりです書方はこれでよろしいのですか（下野松の舍）（記者曰、書き方は宜しい、農事にお忙しい中をお作りなすつた詩や文章は紙上へ出ると出ないに拘はらず貴い値があります）○記者樣私は初號からの愛讀者でしたけれども例の引込主義で居りましたら皆樣大變な御奮發だもんですから私もついつり込まれましたまだ未熟でございますからどし〳〵沒書にして下さいましても怨みはしませんよ（櫻溪女史）（記者曰、其代り少しでも出ましたら大いに欣んで下さい）○記者先生私は皆樣のように學校へも行かれません唯此女子文壇を師とも友ともおもつて愛讀しています御恥かしさを忍びて初めて投書いたしました（うめ子）（記者曰、學校へいらつしやらないでも文才や詩才や自修のやりかた一つで隨分立派になれます、お勵みなさい）○記者さん姿不足いふんじやないけれど姿の處へ來るのは皆不具者ばかりですよ八號では、モーモー樂しいやら嬉れしいやら樂しいやらでザツとして居られない程待つてゐた三宅先生の水彩畫がついてない姿非常に落膽したわ九號では、三宅先生の水彩畫の切取線が左の方にあつて右側にない甚だ不恰好ですよ十號では、これも水彩畫ですが黃色がベタリコに右の方について居るの姿餘程運が惡いと見える（淺田灘子）（記者曰、何分數萬部の雜誌の事ですから中には遺漏もありませう、さう云ふ場合には直ぐ折返して本社へ御返送下さればゞ、完全なものと御取換申します）○記者樣これまで諸姉よりも度々お望みになりました事でも御座いますが、私よりも改めてお願ひ申ます、まづい顔だなぞと御遠慮なすつてはいけません、それはお互ひですものそんな事を兎や角申すやうな私共では御座いません、唯もうおなつかしくてならないのですからお寫眞がむつかしくばお名前丈けでよろしうございます、是非共お知らせ下さいますやう私共の心を不憐とも思召して何卒お聞き下さいませ（周防、楓子）（記者曰、斯樣に叮重に仰つては實に恐縮いたします遠慮すると申す譯でもムいませんが、實は一寸機會を逸して、諸孃の前へ改まつて出にくいと云つたやうな次第で、併し必ず其内にはお目にかゝります）○記者樣私も子女子文壇の愛讀者です以後はどし〳〵投書する考へで元より田舍の淺學ものですから沒書になる事を覺悟していますよ何度沒書されても少しもかまわずに投書するつもりです（しらつゆ）（記者曰、御發奮感服の外はありません、投稿は凡て諸先生に廻しました）○記者樣私は今度初めて短歌を投書いたしましたが此通りでよろしうございますか御誌上で御知らせを願ひます（神奈川縣田所加登）（記者曰、よろしい）○記者樣私は前に上京しました事を申上げましたが私は不幸にも腦病の爲めに止むなく歸國いたしました今後私は病氣全快するまで父母の膝下で愛讀いたします考です（撫子）（記者曰、お大切に）○記者樣御耻かしゆう御座います、私は世に云ふ、世間知らずですから只今迄こんな自分の理想にてきした雜誌があるのを知りませんでしたよ、私も第九號から御仲間入りをいたしました、（佐賀市玉つばき）（記者曰、またまた新しいおつれが出來ませう）○記者樣毎號愛讀者のたのしみとなる樣な新らしい優美な唱歌を數へて下さることに願たうございます（愛讀者）（記者曰、考へてみませう）○記者樣うかゞひます鐵はミヨーペン紙ではいけませんか又色々の文を一ッのふくろに入れてもよろしうございますか（宮城縣伊具郡角田町齋藤しま）（記者曰、二つともよろしい）○記者樣皆々樣御機嫌よろしくていらしやいますか炎暑紙の異たのと綺葉書付て下すつて嬉しくつて〳〵毎日〳〵かゝへて居るのよ（鳥取すみれ子）（記者曰、お欣び下さつて記者も滿足です）○私は元來筆が拙いので、今度初めて投稿しました原稿も淑女諸君から見られたなら、書き汚しの樣でせう、けれども私はこれで一生懸命に書いたのです（加賀國津幡町松原みつゑ）（記者曰、否、貴孃の原稿は少しも汚くありません、且違反もありません）○記者さまに一寸左の件を敎はりたい俳句又文章も半紙でよいですかそれで私は俳句や和歌を數首出したいと思ひますか多く出せば沒書になるのですかそれから當に樣な寫眞を送りますからのせて下さい（唇氣森美智江女史）（記者曰、凡て半紙でよろしい只俳句は一句、和歌は一首、御自分で一番すぐれて居ると思ひのをお出しなさい、二句又は二首以上あつたら沒書です）○記者先生に伺ひます、本社から文壇などとらなければ、盃は沒書するのですか、お敎へ下さい（上總松露）（記者曰、地方の賣捌からお買になつてもよろしいのです）○記者さん〳〵と、言ひますけれど

記者さんとはどんな御方なの 何と申す御名前てすの、記者さんど－か、おつしやつて頂戴なれ、御願ひなのよ(京都府かすみ女)(記者曰、左樣、申上てもよろしいが矢張先づ當分は記者さんにして置きませう、其内には申上る機會がありませう)○第七號の本誌て、私の拙句が地賞に當撰いたしましたのは、實にお耻かしい次第て、こよなき光榮とするところてあります。就ては立派な褒狀に添へて賞品迄お贈り下さいまして、ありがとう頂戴致しました、以後はます／＼勉勵致しまして、再度の名譽を擔いたいものてす。(耶馬溪にて横山汎愛)(記者曰、左樣勝つて兜の緒を締めよとも言ひますから)○記者先生に是非共お答へを願ますあの投稿の平假名には變體假名を用ひてはいけませんか御伺ひ申上ます。(本所横網井口清子)(記者曰、格別差支えありません)○記者樣十號の表紙や繪葉書のきれひてすこと此後もあのようなのを願ひます、それから松井長子樣の寫眞募集大賛成よ記者樣どうぞ實行して頂戴な樂しんで居ります(福岡大和きく子)(記者曰、皆樣てお送り下されば載せます、投稿者と否とを問はず、凡て本誌愛讀者の寫眞なら欣んで掲載します)○記者樣妾が志望に候ひし、繪葉書添附を賜し召され候事深く御禮申し上げます、次號がなか／＼樂しみてす、それから古陵文學子の、新體詩「古城」哀れもふかく感に激して讀み終りました。何卒此後小長詩を折／＼御掲載くださいまし。(牛込早稻田、島濱子)(記者曰、拜承いたしました)○貴社益々御清榮の段賀し奉り候ふさてわれ／＼十名團體して女子文壇愛讀會なるものを下總取手町秋山院にて相開き、大に知識をみがゝんとする愚考にて候間よろしく願ひ上げ候ふ。會員は下の如くにて候ふ。會長中村よしえ、會員秋山よし子、北川よれ子、渡邊やゑ子、石島せん子、北川しん子、蟾原つる子、杉野かれ子、宮内けい子、中村さき子、(女子文壇愛讀會)

○剽竊詩文の注意

○本誌第十一號の投稿中剽竊詩文として 注意あつたものは左の通りてす

▲文章の部

○論文秀逸増田愛子の「嘲罵」は明治三十六年七月一日發行「少年世界」第八卷第九號普通文第二賞伊勢國桑名町內堀一楓君の「嘲罵」と同文、剽竊なり

○消息文秀逸陸前菊地のぶ子の「團扇を送る文」は明治三十六年七月一日發行の「新小說」書簡文に二等賞を得たる糀町鈴木いよ子君の「團扇を送る文」と同文なり、剽竊とす

▲短篇小說の部

○秀逸中の神奈川中村せい子の「陸と海」は中村春雨氏作「角笛」の小品文「姉妹」を剽竊せしものなり、但し此文は一度三十八年七月十五日發行「秀才文壇」第五卷十五號小說欄二等賞神奈川清吉と云へる者も剽竊せし事あり

▲はがき文の部

○特別第三賞「白炊」は「秀才文壇」第十三號はがき文秀逸「白炊日記」を剽竊せしものにて右の白炊日記は又「萬朝報」より剽竊せしものなりしと

○地賞南豐富永八千代子の「愛の力」は明治三十七年一月二十四日發行「萬朝報」百字文第五回當撰京都北岸吉郎君作の「愛の力」と殆んど違はず、全く剽竊と斷定す、尤も該文章は伊藤銀月氏編「百字文選」三十八頁にも出たり

○百四頁下の段大隅江花の「金堀」は「秀才文壇」五卷八號のはがき文地賞「金堀」(備前立石露影君作)の剽竊なり

▲俳句の部

○天賞上毛木暮松枝の「美しう……」の句は博文館發兌「明治一萬句」二百三十七頁白菜子の作を剽竊せしものとす

○七十三頁十四行目陸中黑江みつ子の「紅葉狩……」の句は「新小說」第七年十一卷懸賞俳句番外函館春人君の作と同一なり剽竊なるべし

右に付き懸賞入選者にして 剽竊と認められる者には凡て賞品の發送を見合せました、又前號等て剽竊と認められて 作者から或は暗合なりとか辨解の書面來る向もありますが 煩はしい故一切載せませぬ、又剽竊の注意をなさる方には其厚意を謝しますが剽竊を指摘する場合には充分嚴正に、原作の出所は發行日號數頁數作者の名等詳しく知らせて頂きたい、漠然たる注意は紙上て公にする事が出來ません、さて本號の注意者の芳名は左の通りてす

○四谷、秋波生○埼玉、石田みどり○横濱、一少女○下總、藤崎みな子○白韻女史○常陸、霙女史○神戸、參鷺樓主人○下野、久保やせ子○下總、鈴木芳枝○陸前、仲女史○神田、君江子○信濃、すみれ女史○茨城、小泉はま子○金城下女郎花○上毛、五十貝須江子○長崎、なみ子等

○諸孃の交際

○皆さんどうかお交際下さいそして繪はがき半紙編み物の交換を願います(大阪東區南久寶寺町塩瀬之前東入松屋內花子)○吾がなつかしき誌友貴女よ私は至つて編物をこのみますが形がないのて誠につまらなく思つて居りますどうか元編物を御持ちの方はお送り下さいませんか又都合がおわるければかして下さいませんか(山梨縣師範學校女子部寄宿舍內加々美ちよ子)○諸姉さま、繪葉書、お玉章、お寫眞を御送り下さい、妾は早速上等繪葉書、當地の名所寫眞て御かへし申します、先着二名の方へは、妾のうつしえ、差上ます、(京都南禪寺町、田島かほる子)○皆樣、繪葉書御手紙にて御互の意志、地理上の交通をして下さい、又寫眞の交換も致しましよう(相摸國三浦郡浦郷村三三四佐野清子)○繪葉書や御手紙の交換を願ひます早速御返事致します(鹿兒島市東千石町百四十番戸福留たつ子)○小石川のきよ子樣私は遠い北國の片田舍者てすけど同名の御緣て御交際下さいませ皆樣にも肉筆繪葉書や手紙の交換を願ひます(能登國輪島町字鳳至樓丁淺見清子)○あゝうれしい事よ／＼繪葉書が附て來る樣になつて每號附いて來る樣かた／＼祈りますわそれから宮城郡伊具郡角田町天神町の加藤よしの樣あなたほんとにおなつかしう御座いますす御住處明記して御

手紙下さい私もあげます（靜岡縣志太郡和田村一色村上節枝）○秋田高等女學校の今立いま子樣おなつかしう御座います私も同じ寄宿生活です之を御縁に（山梨縣師範學校寄宿舍加々美ちよ子）○私は女子文壇の愛讀者の一人ですが博學多識なる諸姉上樣と交際を願ひます（岡山市內山下六十八番地の第六號大橋方にて大橋霞峯）○皆さん私は五才の時に兩親に離れまして果敢なくも叔父さんの處へ預けられつらく寂しい想いして今迄生育ました不幸の身の上であります何卒同情して御見捨なく交際して下さい（長野縣小縣郡中塩田村上本郷馬場綾子）○出雲の福田美子樣倉橋小鶴樣栞ありがとう妾も不出來ですが送りましたのお受取下さいましたか御尋いたします札幌の春谷雲山の君殘念ですが消印のため住所不分明で戾りましたのどうぞ御住所御知らせ下さい（神戸、本田しげ子）○東京南千住町野口樣方春子樣御返事下さいましてありがたう御座いました宿所氏名は彼の通りで宜しう御座い升か私しは又田舍の產物を御送り申し度う御座いよ左樣なら（信濃中村川口ちか子）○大島春江樣先達迄は御手紙差し上げても屆きましたに四五日前差し上げました手紙に附箋四枚もして返して來ましたのよ栞送らうと思ふて居りますが何所へ送つてよろしいか（北海道早來直枝子）○妾は七月から或事情の爲雜誌を取る事を止めましたが女子文壇のみはどうしても讀まずには居られません又第十號から皆樣の御仲間入りを致ましたからどうか御交際を願ひますわ雜誌手紙肉筆繪葉書の御交換を御願申します（土佐高岡郡越知町一四〇森木萱子）

○誌友の皆樣御交際下さいそして繪葉書交換や文通などは大變致したう御座いますから何卒御送り下さいまし（熊本縣八代郡八代西本町弓削えい子）○東京小島すみれ樣私あなたの御美くしい御水莖の跡手に結ばうとはマア夢の樣ですは……一時の何てなく永久に御交り下さい）何諸孃方交際願ひます（下野、宇都宮なる、きつ子より）○伊藤ろく子樣に申し上げます私は何と御厚意に謝していゝやらわかりません淺野樣も御存知の通り私は肥前の片隅に住まつて居る者で御座いまして皆樣方の御相手になれる者では御座いませんけれども御懇意にあまへ末長く御つき合ひ致しませふ先づは一寸誌上にて御禮申上げます（肥前、久子）○皆樣早速御親切なる御手紙や繪葉書をお送り下さいましてまことに有りがたう存じます御返事も眼が惡う御座いますのでまだ差上ずに居ります寫眞は先着の方五名にと御約束して居りますのでどうぞ〳〵御免し下さいませ（福岡市、高知秀代）○皆樣私は田舍で日々數へ子を導いて居りますもの學校から歸ると淋しくてなりませんからどーか御便下さいな早速御返事しますから（廣島縣備後福山西町磯野みき子）○私はぜひ諸孃と御交際を願ひたいのですどなたでもやう御坐いますから文通して下さいまし（栃木縣下都賀郡栃木祖生町川島美輝）○妾も之れから女子文壇にはいりましたからどうぞ御見捨てなく御教授並びに御交際下さい（宮城縣陸前國栗原郡長岡村澤田曾根桃花女史）○十月の誌上に備中玉島町筒井八重子として誌友倶樂部に亡き姉の云々と云ふ投書がありましたが私にも同地に同姓同名の妹が居りますがこれはまだ八才で只今尋常小學校二年級ですからこんな事はある筈はないのです人ちがひで私の宅へ申し込まれた方もあつたようですから一寸御報知して置きます（岡山縣立岡山高等女學校寄宿舍內筒井茂枝）○豫定の通り二十名の人達に上げました外に十七名此人達は繪葉書にて御申込みになりし故特に御送り申しました殘る百十三人の人達へはいかんながら御送りする事が出來ませんあしからず（札幌雪山）○誌友諸姉御文通下され有がたくお禮申上候ケシインのため住所不明の方も數多之有御返事上げざる方もあり候故こゝにて厚くお禮致し候（琴子）○皆さん栞其他縫物の御交換を致しませんか私きつと相當なのを御送りいたします（廣島市大手町七丁目脇せつ）○皆樣以後どうぞよろしく御交際を願ひますそして岐阜の葉樣本らんて御住所並びに御姓名を御知らせ下さいませ（岐阜野菊）○上毛新田の里すみれ樣妾の如きものに交際御求め下され懇謝の外はありません仰せの如く住所知らせます（越後中蒲原郡新飯田小柳琉玖女）

○皆さま私も今度入壇いたしました神聖なる諸姉と交際いたしたうございますどうか編者や繪端書など送つて下さいませ（伊豫國喜多郡山島坂村宮脇朝香）○女子文壇愛讀者諸姉よ私も八號から愛讀者の一人となりました何卒末長く御交際を願ひます（横濱市安田政子木村園子）○未だ私は小さいのですけれども皆樣御交際下さいなどうぞ繪ハガキなり手紙下さいまし必ず御返しいたしますそれから北海道本郷なほえ子樣難町重田春子樣御交際下さいな（長野市旭町十六わかば）○皆樣先着十五人の御方にレース製の栞を差上たう御座います御望の御方は繪葉書て御申越し下さいませ、また自作詩歌繪葉書の交換も致します（滋賀縣甲賀郡柏木村存泉高井方寄留辰井琴子）○妾は千葉町にあれ程女學生が居つても本誌に一人の誌友がないのかなしんでをります奮つて千葉町の女學生たちよ投稿して下さいそれから交際を願いますよ（千葉縣長生郡新治村上太田森たま方森久子靜緒子の二女）○私は川越女學校の二年生で一號よりの愛讀者であります、そして山田松子さんは無二の親友、ホントに優しい方ですよ、何卒可愛がつて上げて下さい（埼玉長澤ひで子）○東京たそがれ樣先日は種々美しい繪に御深切なお手紙お添へ下すつて誠に有難く存ました。北海道春谷雲山樣先日はお珍らしい種子を色々お送り下すつて誠に嬉く存ました。（京都府すみれ）○武藏の久くり原さん早速女子文壇御送り下すつて誠に嬉しく拜受致しました、だが御住所が不明で如何ともすることが出來ませんどうぞお知らせを願ひます（常陸高濱町川並平方汀柳子）○愛讀諸姉の內でもしも女子高等師範學校に入學御志望の方も御座いますならば何卒御住所御姓名委しく御知らせ下さいまし直接に御手紙さし上げますから（一女學生）○栃木縣の三浦梅子孃、靜岡縣の前島邦子孃、ともに去る八月雜誌を送りましたのは御受取下さいましたか、（大阪府刀禰春子）○今迄にも御手紙差上げたい姉樣も澤山御座ひますのが、私を妹と思つて度々御文通を願ひます（愛媛縣喜多郡大洲町游小路尾崎逖平內にて斯波八千草）○和歌山縣の鈴木くま子樣、東京市

木邪の松浦幾子様、山梨縣の松浦二女様、宮城縣の加藤よしの様、福島縣の武田芳江様、大阪市の小山文香様誌上で御證致しますから御教しれ、(埼玉縣北足立郡大砂土村大字大和田細沼藤子)○熊本茂里つる子様に申し上げます、突然かは存じませんが妾は斷然絶交の所置を取ります此の文は貴孃に與ゐ可き絶交書と思つて頂戴(ひで子)○本田しげ子様先日しなりを送りましたら五六日して所在不名として歸りました(島根縣簸川郡久多美村福田美子)○丹波白露様先日はお葉書を誠に嬉しく夫れから伏島直子様おはがき有りがたう、あの一件れ私最う事實さへ分明に成りますれば怨んでは居ないのよお安心遊ばせ(北海道亀田郡七飯村松井長子)○愛讀の皆様妾達三人は皆高等四年生で非常に中よしの本誌の愛讀者です以後宜しく御交際下さい(宮城縣伊具郡角田町加藤よしの、齋藤しま子、星りつ子)○妾は去る八月より地方へ遊びに出て居りましたので其不在中へ御手紙下すつた諸姉様に久しく御返事中上なかつたのは何卒あしからず(雲州小鶴)○私は鬼の住むと云ふ丹波の者で、はるばる此伊勢國まで物學びに參つて居ますが、どうか宜しく誌友の姉様方に御紹介を御願致します、誌友の姉様方右の通りですから、どうか書狀なり繪葉書などを交換して頂戴(伊勢國度會郡宇治山田町字中之切町西村いしの様方武部みちよ)○上毛新田の里、すみれ様先月の紙上に御答ひ申さんと思ひハガキ出しましたけれ共、期日に後れましたのか紙上へは出ませんかつた妾實にすまないと思ひます御免し下さい(越後小柳瑞玖)○天下にあまぬき本誌友諸孃達私は今年拾九歳を今や越えんとして居ります第十號から愛讀者になりましたから以後何卒よろしく御教導之程願上ます又繪葉書の交換も願ひます(近江國志賀郡坂本村井神金子方里子)○小泉拾紫子様酒葉栗様どうか本誌へどしどし投じて下さい、そして本縣の名を紙上いかゞやかして下さい(濃北岐阜專修女塾內、白韻子)○新潟縣の野口文子様貴地を御教へ下さいませ(野口方春子)○繪葉書や寫や手紙等の交換は非常に大好きですから皆様御贊成の御方はどしどし下名の處に下さい直ぐ御返し申しまするから(鹿兒島市易居町波口野紫子)○女子文壇愛讀者の諸姉何とぞ御地方の寫眞とか御自分のお寫眞とかをお贈り下さいつき次第妾もお寫眞をお送いたしますから。宛名は(豐後國直入郡平村夫婦石甲斐ふい子)○みなさん私は本誌一號からの愛讀者で御座いますどーか妹とで以後御見すてなく、私はみなさんの繪葉書及文を送くつて下さるをたのみに今日の日をくらして居ります、どーか送くつて下さいたのみてす、(廣島縣高田郡甲立村深瀨笑岡ちと子)○茨城の笹目こう子様先日はお葉書を有難う存じました(東京、大澤隆子)○交際欄の皆様へはがき交的の文通を願ひます、それから私は秋濤先生の譯された戀のナポレオンを持て居ますがお望みの方は下名へ御申越下さい(岩手縣稗貫郡花卷川口町折居綾子)○私は田舍者ですが、親しく御交際を願ひます。また日本三景の一、天の橋立見物に、居らつして下さい、御案內いたします(京都府丹後國與謝郡宮津町竹村こま子)○私は北海の片田舍の蕪學な女ですどうぞ御玉章を御願ひ致します私も必ず、御手紙差上ます(石狩國樺戶郡月形村高橋とく)○福岡縣の女學生諸孃に申ます、吾が縣人で諸雜誌に投稿をする人は他縣に比ぶれば極く少數で、殊に女子の投稿者は一層少ないやうに思ひます。當縣十數箇所の女學校では、隨分文章や詩歌の秀才の方があることは豫て承つて居ますのに、女子の投稿者の少數なのはこれ諸孃が餘り御遠慮遊ばすからだと考へます(福岡、筑紫女)○本誌にわが茨城縣の御方の投書の少ないことは誠に遺憾であります何卒皆さん盛つて投書なさい、御勸め申します。(新治郡高濱町東大橋川並汀柳女子)○皆さん、私も女子文壇の愛讀者です以後よろしく御交際下さいな(京都新堺町杉內晴榮)○私は地方取次店から本誌初號より購讀致して居りますがこんな理想にかなつたのはありません私は皆さんと記者さんの御骨折りを謝せねばなりませんと思ひます、(美濃しげ子)○淺野様その後は御無沙汰いたしましたのあの私は廿三日に湊流から歸りましたがれ少し加減がわるくつてブラブラして居ます、(常州明月女史)○皆様私は深山の草家に果敢なく日を送る賤の女で御座いますがどーぞ誠の道へ案して下さい(信州小縣郡東鹽田村吉田雅枝)○アノ茨木縣石崎秀子様京都バイオレット様越後岩船郡長島はつ子様の方々に繪はがき差上ましたのに今日て(差上ました日から)丁度二十日經ちますのに、まだ御返信がありません、何故てすか御尋ね申します(京都松田ひて子)○私は片田舍に住む洵に不幸者で御ざいますが本誌初號より愛讀いたし居ります親愛なる姉様方と御交際いたしたく記者様御手數甚だ恐入ますが何卒御紹介のほど切に御ねがひいたします(信濃國上高井郡須坂町佐藤安子)

○繪葉書交換

○どーか御交際を願ひます繪葉書交換も致したいのです(伊豫松山湊四、八四、藤本靜香)○皆様一葉十錢以上の舶來繪はがき御交換を御願ひたし升(武藏大宮郷白菊女史)○私繪葉書交換希望てありますから繪葉書交換欄へ掲載して下さい(福岡縣筑紫郡岩戶村一〇五八、結城幾子)○繪葉かき交換や寫眞の交換かしていたゞき度存ます(播磨飾磨郡廣峰山三二西村むら)○賢明なろ誌友諸姉繪端書を交換して下さい御使用相當の物にて早速御返事いたします(陸中國黑澤尻町齋藤惣八方大內いれ子)○當地には每月繪葉書展覽會が御座います皆様の中御情深ひ方々は新奇なのに歌か俳句を書いて私に御惠み下さいませんか、必ず會に出品して一段の花を添へようと思ひます(三重縣津市西新町三九、松尾花子宛にて)○繪端書交換をお望のお方はありませんか先着者には春夜の月と云ふ小說をあけます(常陸國高濱町東大橋酒葉つれ子)○繪葉書送くつてくださる方には妾は嬉んで御返信いたします(京都府相樂郡祝園村字菅井松田かすみ子)○妾は女子文壇が生まれました時から此本の愛讀者てす何卒御見知りを願ひますそして失禮てすが繪葉書の御交換を願ひます(熊本市外島崎六一一平岡信子)○文だん諸姉さまよ妾は森久子さまの近所でございます是非妾にもはがき交かんして下さい住所は(千葉縣長生郡新治村上

太田關屋覺子）○給葉書交換致し度候（淡路國津名郡洲本內通一丁目森七郎方日田春子）○誌友の諸姉よ給葉書の交換を御願申します、（富山縣阿礪波郡福岡町地崎ふさ子）○つまらぬ姿の繪葉書交換を本欄に望んだ處が幾多の誌友諸姉より賛成の榮を辱ふし、まことに嬉しい次第です、紙上て一寸御禮を（茨城縣高濱町東大橋、小泉拾葉子）○短歌又は俳句を書いた繪葉書の交換を切望す（福井市佐佳枝下町六十三高柴小靜）○皆樣繪葉書交換致しましよお望の方は下名へお送り下さい（京都府下南桑田郡薭田野村柳原ゑつ子）

○文事百般

○記者先生に申上ます御恥かしいことてすが皆樣の御書きはなりました御言葉の中（しかすが）とか（うらぶれ）とかむづかしくて解らないのか澤山ありますそれに田舍の事故尋ぬる人もありませんのでほんに困ツて居ります どんな書物を見ましたら皆解るようになりませうか どーか御敎へ下さりませ（周防なみなへし）（記者曰、しかすがはさすがに、うらぶれは浮浪の意、どんな書物と云ふより凡ての國文學を修養なさい）○何雜誌何小說にても宜し送付を乞ふ禮に石器時代の矢の根石美花の稲子近刊の雜誌を送る（越後見附町三〇三蕊子）○本誌第一、二、三、四、五、六號即ち六月分まてと、九號即ち九月分御不用のお方が有りましたら、私が一昨年著述しましたローンテニス（定價一部拾貳錢）と交換して戴けませんか、（岐阜縣惠那郡下原田村永井忠吉方渡邊紫蘭）○諸姉の中で女子文壇の初號から九號まで叮嚀に保存してある御方は御讓り下さい（大阪府池田大西町獨立軒藤田芳子）○私の手許に女學世界增刊家庭十二月社會百性活天地有情黃菊白菊もしほ木詩の神文藝俱樂部等ありますがお望みの方に差上げます故お申越し遊ばせ（岡山縣英田郡福本村國司秀方秀芳女史）○諸姉樣のうちで左の書を御持ちの方は代價の一倍或は相當の書籍と交換して下さいませんか百一字文選浚宵花、小詩國。博文館發行徒然草、一蓑一笠、文章辭典、川柳入門、俳句獨習、俳句新歲事記。以上です、（埼玉北葛飾郡豐岡村、伊東香子）○冒險小說「海底軍艦」「新造軍艦」「塔中の怪」「銀山王」の四冊不要になつて居りますから御入要の方があつたら、何でもよいですから御交換を願みます（京都南禪寺町田島かほる子）○拾號の文字百般の中にありました柳葉樣とやらの御問ひに答へます女子大學一ヶ月の學費は上を見れば限りは御座いません、然し私は實際只今まで十五六圓で充分で御座いました尤上級になりますといろ〳〵參考書などに入りますが夫れとても平常から心がけて置きましたら左程でもありますまいと思ひます（同校の一生徒より）

○記者より諸嬢へ

▲・・・・・・・投稿の諸嬢に一言。 誌友俱樂部の投稿中、初めて投書をするから原稿の書き方は是て規則に背いてないかと尋ねられる方、及び初めての登壇の挨拶を寄送される方等は驚くべき大多數一々諸嬢と記者欄に採用すれば制限がありませんので甚だ勝手ですが一切省きました、其代りお漏れになつた方の中で御注意申すべき事があつたら勿論本欄にてお答へする積りです即ち別項の諸嬢と記者欄にある通りてす

▲・・・簡單なれ。 誌友俱樂部の原稿は成るべく簡單に認めて下さい、一人でも多くの原稿を採用したいてすから。

▲・・・・・インキと鉛筆。○葉書へインキ（殊に紫を忌む）又は鉛筆て書いた原稿は禁物てす、字が不明瞭て問違が起り易いてす、必ず墨て書いて餘り字をつめないやうに願ひます

▲・・・住所姓名。 誌友俱樂部の原稿ても一通每に御住所姓名は成るべく書いて下さい紙上て公にするのを憚なら記者迄てもお知らせ下さい

▲・・・一人て多數。 一人て幾通もあるのは困りますヽ先づ一欄には一通ときめて下さい多くあつても採りません

編輯だより

○來年後の定期增刊。 多數讀者よりの注文もあり原稿の輻湊もあり旁々來る明治三十九年より本誌定期增刊を年四回發刊することに定めました、即ち二月、四月、九月、十一月の四度に發刊するので每月紙數に制限されて餘つた處の諸嬢の文章小說詩歌の類は皆此の增刊に出る譯ですから諸嬢の投稿も其月の雜誌に出ないからとて落膽せず、增刊の出るのをお待下さい。

○紙數の增加。 奮發に奮發を次ぐ本誌は今回から又更に紙數を增加して都合百二十頁としました、其定價と比較して如何に低廉なるか、天下無比の勉强を賛助して萬倍の愛顧を希ひます

○口繪の寫眞版に就いて。 本號口繪に挿みたる寫眞版の內長野縣下高井郡中野町軍人家族招待會の寫眞は特に同地の古田ちよ孃より送られたもので餘興の料理法研究に新婚夫婦の者が天狗に料理法の傳授を受ける處を撮影したものださうです、本社は是を惠贈されたる古田孃に謝し併せ江湖の諸孃よりも此種の寫眞を御惠貸下さらば欣んで寫眞版として挿入する事を申上げて置きます

Halloween.

Halloween is the name given to the evening of the 31st of October. It is a very jolly occasion for the younger people of America and Great Britain, and particularly for the girls. They spend the evening by singing and dancing, cracking nuts and ducking for apples in a tub of water, and perform other harmless revelries. They try to discover who should be their partners for life from the initial letters formed by the apple peels which are thrown on the floor. With a monthful of water, a girl should retire to her room if she wish to see her future husband in her dream. Many comical letters and verses are exchanged among friends, and thus the evening is spent in as lively a way as possible. In the old days, people believed that the spirits of saints came to visit the world on that evening and they celebrated it. Although this superstition died away many centuries ago, the harmless custom of celebration still remains even to-day.

ハロイーン

ハロイーンとは十月卅一日の夜の事を申ます。其夜は英米國の青年男女，別して女子の爲に面白い機會て御座います．樣々の事を致す中にも舞踏や唱歌，胡桃の割り並べ，槽中に浮べた林檎のかぶりつき等の無邪氣な戲をして遊びます。別して可笑いのは，林檎の皮を長く剝いて其れを床に投げ，其れが形作る首字にて將來の配偶者を判ずると云ふ事てす。又未來の良人の夢を見るには，床に就く前に一口の水を含んて休むとよいと申ます。友人同士滑稽な手紙や歌等を交換をして笑ひ可成當夜を罪なき戲の中に送るが例て御座います。

昔日は十月卅一日の夜には亡靈が下界に來ると云ふて祭つたのてす。其妄信は數世紀以前に消えてしまいましたが，戲れ遊ぶ習慣丈は今日も尙殘て居ります。

and woe shall cease?" I cried aloud, as if addressing some mysterious friend.

"Oh, miserable doubter, do you ask? Look in the heaven above, and in the earth below, and in the water deep beneath the earth. One only law is given—the law of order, harmony, and joy," answered a gentle voice. "Alas how often broken!" I exclaimed. "Ay, but disturbance is no law," said the same voice, "and therefore cannot last. Life, order, harmony, and peace work together with universial joy. This is law. Believe in it, and live!" And as the voice grew silent, from the sky beamed over all the scene the placid moon once more. The wind had lulled or passed away, and over all the forest streamed the brilliant light.

"I have been wild and foolish, gracious moon!" exclaimed I. "I doubted all the promises and hopes, you shed so fully down. We are never deserted in our need. The winter tempests rage, but always you return from time to time to shed down rays of hope and promise of glory on our heads; and still we doubt and fear, and still you repeat your tale. Forgive me once again, O you patient moon!"

して即ち秩序，調和，喜樂の一法あるのみ」と以前の溫和の聲が返答した。

處て自身は又「悲しい事には其法則が屢々破れるから」と云ふと，聲が再び答へた「然あるべしとは雖も紛擾は決して法則に非ず，故に永續の途なし．生，秩序，和合，平和は互に全般の喜樂と相扶けて働くものなり．是即ち天地の大法なれば是を信じ以て活きよ」と。

音聲止に及んで硏げるが如き月輪が中空に懸つて全景を輝らした。風は鎭まつたのだか，吹き去つてしまつたのだかて森中は只皎々たる月光で滿たされたのである。

慈悲深き月よ，我は誠に愚にして狂し居たり。我は汝が斯くも惜まずして輝り下す凡ての約束と希望とを疑へり。我等は窘迫の日に放棄せらるゝ事なし．嚴冬の寒威暴風荒ぶるとも汝は屢々我等が頭上に榮光の希望と約束とを照らして止まず．然れ共我等は尙恐れ疑ひ汝は尙汝の物談を繰返して止まず。忍耐深き月よ，今一度我を寬恕せよ。

A Lesson on Hope.

How the rising flast is driving through the ancient forest! What a dismal roaring there is among the pine-trees! What a sharp clattering among the half dried poplar-leaves! What a sighing among the beeches!

It was thus I spoke, when, having wandered out one gloomy autumn night, I found myself in the deep recesses of a wood after a violent storm. All a tonce, there shone down upon me, from an opening in the clouds, the full rays of a bright November moon. I heard a voice exclaim, "It is the moon that shone in Paradise!" But another voice was heard, saying, "Deluded fool! See! your precious moon is gone!" "Not gone, though hidden," was the answer. But in the next moment a gust broke in with savage fury on the forest, and many a stalwart branch crashed down upon the ground. The wailings of afflicted nature rose amidst the storm. "Will the day ever come when storm.

希望之教訓

マーア此古い森林を吹き荒ぶ疾風の酷さは如何だろう！何んと物凄い唸聲が松樹の間にするのだらう！半分枯死して居る白楊(ヤマナラシ)の颯々の恐ろしい事！椈(ブナ)から來るあの悲鳴！

斯く獨言ちつゝ或る陰氣な秋夜効外を散歩するともなく歩いて居る中に我知らず大嵐の後の森へ奥深く這入てしまつた。俄に雲の割目から皎々たる中秋の明月其水光を我身に浴せた。

「こは樂園に輝きし月にこそ,」との聲が耳に達する暇もなく又他の聲があつて「欺かれし愚者よ．見よ，汝の貴き月は既に消え失せしに！」と答へた。

忽ち一陣の疾風狂ふの勢にて森林に暴れ出し幾多の丈夫な枝梢は折れて地上に散布し天地の慟哭は嵐の中より起つた。

そこて自分は恰も奇怪な者にても談る樣な大音て「嵐や愁憂が止む時節が來るものかしら」と叫んだ。

「嗚呼憐む可き狐疑者よ，如何にして斯は疑問なすや．仰いて天を望み伏して地と地下の水體とを視よ．天地の原則は唯一に

英文

津田梅子閲　　河井道子述

Beginning.	始
Are you going to do a kindly deed?	情ある行爲　君なすや,
'Tis never too soon to begin;	早過ぎはなし　始むるに.
Make haste, make haste,	急げや急げ,
for the moments speed,	時は馳せ
And the world, my dear one,	世界は, 我子よ,
has pressing need	切に乞ふ
Of your tender thought	汝の情と
and your kindly deed—	助をば—
'Tis never too soon to begin.	早過ぎはなし　始むるに。
But if, the deed is a selfish one,	私慾の爲の　働は
'Tis never too late to begin;	おくれ過ぎはなし　始むるに.
If some heart will be sorer,	人の心を
when all is done,	傷む行爲は
Put it off, put it off	延せやのばせ
from sun to sun,	日より日と.
Rememb 'ring always, my dear one,	我子よ常に　記臆せよ
'Tis never too late to begin.	後れ過ぎはなし　始むるに。

Jean Blewett.

每號懸賞募集項目

每號精讀を要す

選評大家（文學士嚴井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君／文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　○新躰詩（半紙一枚十句以內）

○短歌（半紙二ッ切一枚一首）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新當俳句（はがき判紙一枚一句）

但着色無用可成鴈皮紙を用ゆ

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

賞品規定

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

每回の本誌により當選者は贈品に差支へざる様前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

（投稿〆切＝每月十五日）

○投書は各欄とも决して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

☞（最寄書店になくば直接發兌元へ注文を乞ふ）☞

定價

女子文壇（每號水彩畫彩色畫寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行

一册（大百二十頁刊）前金拾錢	六册（半ヶ年分）前金五拾七錢	十二册（一ヶ年分）前金壹圓八錢
定價郵税共一册金拾壹錢	定價郵税共六册金六拾三錢	定價郵税共十二册金壹圓廿錢
外國行	郵税共	拾四錢

讀者心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき様注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割増に願上候○御間合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候▲缺號にならぬ法……前金拂込むに限る

廣告

六號ロ取リ正

種別	一頁（二十四字六十行）	半頁（二十四字三十行）	一行（五號字二十四字）
普通	金拾五圓	金八圓	金參拾錢
特別（表紙四面口繪對面）	金貳拾圓	（半頁以下御斷申上候）	○

〆切　發行前十五日

▲廣告大取次

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社
神田區千代田町二番地　博報堂
京橋區入官町十八番地　廣告堂
神田區花房町九番地　富士原秀穗

明治三十八年十月廿九日印刷
明治三十八年十一月一日發行

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許轉載

發兌元　東京京橋區大鋸町十一番地　電話＝本局六〇七番　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目卄　東海堂
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市京橋區鍋屋町九番地　良明堂

第壹巻第十一號　女子文壇　明治三十八年十一月一日發行（毎月一回一日）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



女子文壇　最廉無比　定價金拾錢　郵稅壹錢

（東京秀英舍印行）